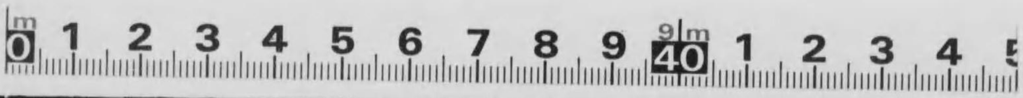
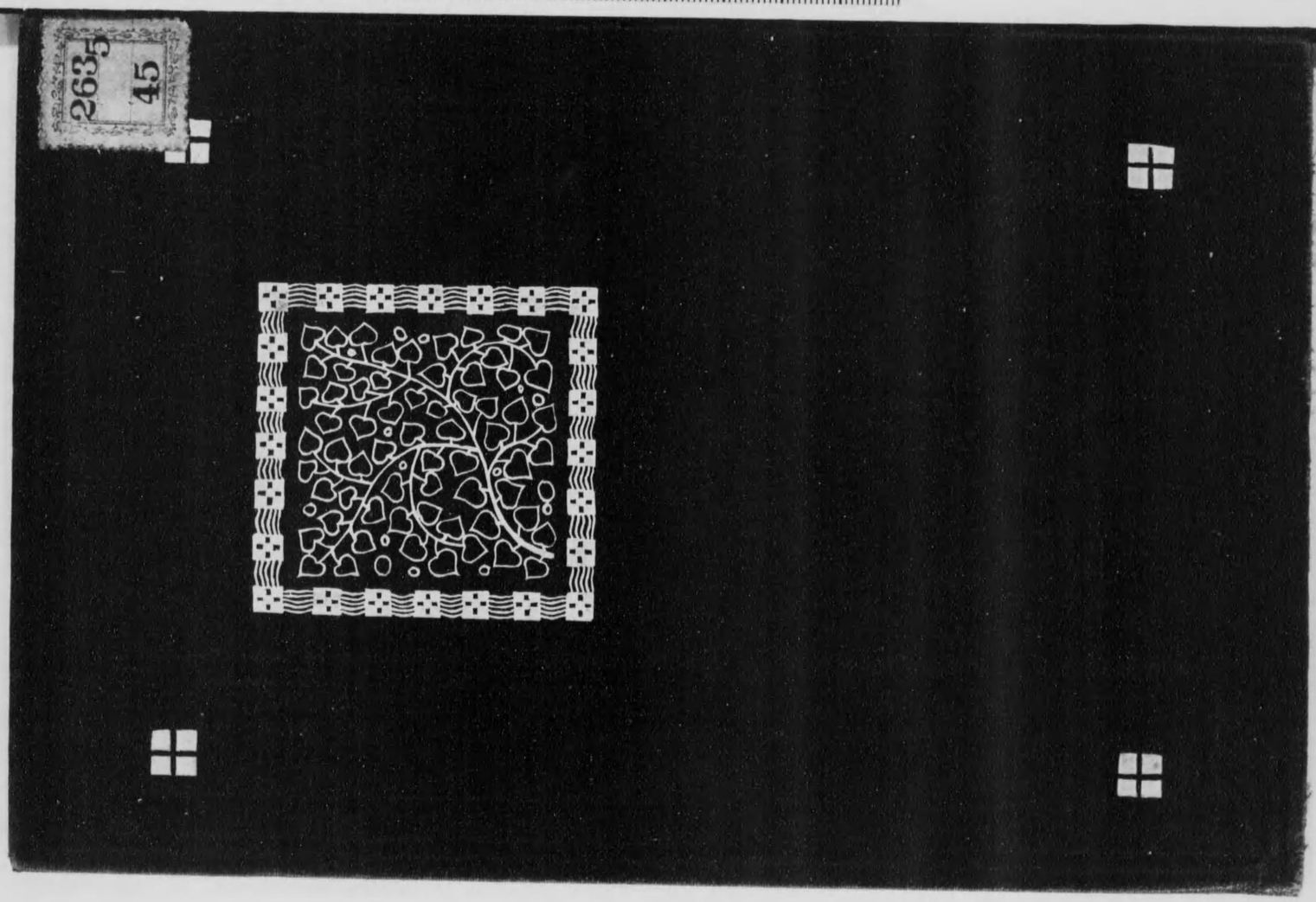

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4


2635
45

263.5-45

修身教授資料集成

「エミール」譯者
東京高等師範
學校訓導
三浦關造
川島次郎
共著

東京
隆文館藏版

大正
8. 6. 18
内交

修身教授資料集成に就て

一　本書は主として尋常小學校五六年の修身教科書の內容を補足し、教科書と相俟つて、兒童に歷史的觀念及び現實生活の道德的基礎を固くし、微細にしようといふ考で、編輯したり、著作したりしたものゝ集成である。著手以後日淺くして、十分の意を滿すことが出來なかつたが、それでも多少の參考になることゝ信じて出版することにしたものである。

二　集めたところの材料は、教科書を基礎にしたものであるが、また現代の修身教授上必須な新題目をも幾分か挿入した。斯ういふ著述は、十分時間の餘裕があつて、もつと豐富にすべきものだとは思つたが、著者共に多忙の身なので、十分の努力を盡すことの出來なかつたことは殘念である。他日もつと大著述にして十分立派なものを完成したいとの考へもあるのである。

三　教科書を本として、斯うした材料を用ゐるに當つて、教授者の參考とすべき根本思想に就いて、いさゝか注意したいことがある。

（イ）歷史的觀念は、忠君愛國の至誠と共に、個人をして歷史的創業者たらしむる自我意識を刺戟喚發せしむること。

（ロ）國民道德とは、兒童の心理及び境遇と懸隔ある道德の細目を强制することではなくて、世界の

歴史の比較觀念によつて、自國歴史の大精神を發見せしむると共に、些細な日常生活上に於ける道義規律が、國家の生命を高調せしむる唯一の祕義であることを念ぜしめ、以つて、斯る實行が個人の社會的生存の意義であり、國家てふ精神的有機體を生かす大なる動力であり、從つて個人の發展上必須缺くべからざるものであることを感ぜしめなければならぬ。

（ハ）經濟觀念は、勤儉とか、殖産興業とかいふもの、即ちまだ經濟的獨立を得て居ない兒童に必須なものとして自覺欲求の念を起さしむることの出來ないものに限つてはならない。經濟は凡ての道德的細目と根本的に關係があり、日本的精神は經濟的基礎を離れて活動しないことを念頭に有つて居なければならない。そこで經濟觀念の誤謬は、個人の根本的滅亡であり、國民的發達の停止であることを考へて置かなければならぬ。

（ニ）修身教授は消極的禁制、受動的教訓にならないで、藝術的に兒童に深い印象と動機を與へるやうにならなければならぬ。又兒童の個性に一致して、兒童をして創意的に道德的ならしむる方針をとらなければならぬ。

（ホ）日本歴史の建設には、眞劍勝負の熱烈な大精神があつたこと、それは常に尊王の精神と共に創意的であつたことを示さなければならぬ。

（ヘ）熱誠、堅忍、寛大の德は、日本の大精神であつて、それは個人の自立發展の上にも、社會的秩序の上にも極めて必須なものであつたことを念頭に有つて居なければならぬ。

（ト）兒童の境遇に不相應なことを守らせようとするのは、修身教授の本旨ではない。兒童をして、凡ての境遇に在つて、如何にその困難を征服し、如何にして自立的に發足し、如何にして自己を積極的に社會化せしむるかといふことが其の本旨である。個人の發展と、社會的生存とを無視した道義は役に立つものではない。

（チ）道德は社會の或る秩序に盲從させることではないから、兒童の經驗から兒童が發見した善惡觀念を妨止してはならない。

（リ）靈肉一致の原則は、道德的基調である。そこで、身體と精神との一致といふことは、體育ばかりでなく、今後の德育上必須なことである。だから道德問題は、生理上の問題に重大な基礎を有しなければならぬ。生理的疾患を治して、審美な身體の調和を實現し、强健な體力を養ふことは、修身教授上必須なことである。「身體が曲れば心も曲る」とはクルークバックのいつたことであるが、日本の靜座では猶更悉しいのである。腹臀の細い子は、逆上し易く、腰が弱ければ、腦貧血を起し易く、血液循環の不正則なものに一として精神的異狀のない者はない。精神的異狀があれば、現はれるものは個性といふより、習癖で、外部の妨害にさけ易い。

* * * * * * * *

修身教授の哲理を説くのは、本書の目的でないから、こゝまでにして置くが、以上の條目は今後の修身教授上、微細な實際研究を要すべきことである。不十分なる本書の材料を參考にして、教育者諸君が、自身の天分、技量をもとゝし、更に研究を重ねて、完全な方針をとられむことを望むものである。

大正八年五月

編著者

修身教授資料集成　目次

忠君愛國

訓話……一
詩人ダヌンチオ……五
決死隊……六
忠烈な夜襲……七
ベルギー國民の忠烈……一一

仁と勇

佛蘭西の一小學校教師……一三
義俠の愛蘭土兵……一五
校長さんからの一場の訓話……一七
船と運命を共にした船長……二〇
鱶を刺し殺した虎吉の話……二二

信義

烏の仇打……二五
正宗の銘刀……二九
瀧見物……三二

誠實

ワシントン……三四
ヴェニスの商人……三七
少年軍看護……五五
貯金箱九スー……五六
番人の妻……五八

萩の下露……五九
おくひの小判……六四

堅志

ミケランゼロ……六九
破産と復興……七二
燈臺守の兒……七三
蟻通の明神……七七

儉約

興國と儉約……八六
今後の世界と日本國……九〇

孝行

近江聖人の幼時と立身……九八
炭屋の雇人から百萬長者……一〇八

兄弟

吾等は七人……一一三
國士の友愛……一一七
妹の手紙……一二一
阿能局……一二三

進取

錢屋五兵衛……一二六
南洋の一成功者……一四〇
千代子さんの石鹸製造……一四四

忍耐

ソクラテス……一四六

偉人と食べもの……一五一
不幸と忍耐……一五三
文豪カーライル……一六三
偉人の忍耐……一六六
桃の種子が何百兩……一六八
馬車屋の息子……一六八

禮儀

禮儀と自信……一七四

習慣

玉子さんと秀子さん……一七八
雪雄の京都土産……一八〇
竹子さんの失敗……一八四

勉學

漁師の子からドクトル……一八六
學校から選拔される……一九一
新井白石……一九五

朋友

或る畫家の話……二〇五

德行

二つの德行……二一九
柴郎さんと赤毛布……二二二
中江藤樹……二二五

度量

アレキサンダー……二四〇
勝海舟と西郷隆盛……二四一

謝恩

大野先生……二四八
爺やの謝恩會……二五四

廉潔

鏡のやうな心……二五六
良太郎米屋……二六〇
烟の中に金の壺……二六三

生物

鳥の巣……二六六
人の心と動物……二七一

女子の務

勇士の妻……二七六
笠森阿仙……二七九
靜御前……二八〇
人命を救つた傳書鳩……二八八
將軍の訓誡……二八六

忠孝

原惣右衞門の母……二八八
孝行な娘の話……二九二
盲目の子……二九五

沈勇

沈勇……二九七

勇敢なる自轉車隊……三〇〇
織田信長の幼時……三〇二
一人の英兵……三〇三
少年の勇氣……三〇四
赤鹽九郎右衞門……三〇八

膽力

村井保固……三一
肥大將軍……三一四
石屋の膽力……三一七
ルーテル……三二一
北齋の日本精神……三二三
隆盛家僕に叱られて三日食はず……三二六
西行法師の歌……三二七
上杉謙信敵に鹽を送る……三二八
敵を伏す……三二九
吾汝と異れり……三三一
岩崎彌太郎……三三三
羅馬將軍ファブリシウス……三三五
人は城よりも强い……三三五
高山彦九郎……三三六
大統領リンコルン……三三七
ゴルドン將軍の花園……三三八

自立自營

自立自營と國家……三四〇
學者の子と農夫の子……三四四
王の悲しみ……三四七
ピートル大帝……三五〇

規律

馬商人とワシントン……三五一
馬車の切符から一大富豪……三五三

公益

金原明善と天龍川……三五四
發明と苦心……三六九
獨を慎め……三七二

慈善

石井十次……三七四
賴山陽の友人……三七九

勤勉

曲亭馬琴……三八〇
逸見一信……三八九
越後屋……三九三
セキスピアー……三九三

衛生

其の一……三九四
其の二……四〇二

潔白

大雅堂と稻荷大明神の寶物……四〇六
海舟と鑄物師……四一〇

眞劍勝負

海舟の學生時代……四一一

感化

乃木將軍……四一五
聖者バルナルド……四一七
中村敬宇先生……四二〇
源博雅の笛……四二二

氣節

勝海舟を助けた澁田利右衛門……四二二
人造肥料……四二六

自信

四二七頁―四三三頁……四三〇

寛大

胸の廣い秀吉……四三三
羅馬のシーザル……四三六

神色自若

橋本左内……四三九

成功

河村瑞賢……四四〇
希臘の大政治家ソロン……四四二
布哇一大成功者……四四七

努力

秀吉の努力と忍耐……四五〇
米國の馬鹿墓王……四五五

言語

人物と言葉……四六一
アントニーの演說……四六四
沈默……四六五

反省と改心

或學生の改心談……四六六
ある婦人とカーライル……四六九
トルストイの勞働……四七一

世界歷史の話

日本人の覺悟……四七二

修身教授資料集成目次 終

教授指針
戰敗國や民族的個性創造の文化及び實力なき國家の悲慘なることを平易な事實で知らせる

修身教授資料集成

三浦關造
川島次郎 合編

忠君愛國

訓話

皆さん。あなた方は親もなく、家もない人々の哀れな樣を知つて居ますか？あなた方は乞食を見て、どう思ひました。乞食は自分で稼いで食べて行くことが出來ず、または働くだけの身體が丈夫でないから、冬の寒い日も、雨の降る夏の日も、汚ない着物を着て村々町々に食べものを貰つて歩いて、木の下や、お寺や、お宮の軒下にねるのです。

親のない孤兒も、家を持たない乞食も實に哀れなものです。誰だつて、こういふ人を憐れみこそすれ、こういふ人になりたい人はありますまい。世の中に慈善事業といつて、斯ういふ哀れな人々を集めて、食べさせたり、育てゝやつたりしますが、孤兒の多くはよい教育を

受けても、よい人間にならないことがあり、乞食はどんなに親切にしてやつても矢張なまけ者です。

資本主義の弊害を知らしめ、國家經濟の根本義を知らしめる

孤兒や、乞食は哀れなものですが、こういふ哀れな人々の外に、世の中には惡るいことをして人々に迷惑をかけて食つて行くものがあります。泥棒はそれです。けれども泥棒はしながら、少しもそれが泥棒だとは思はれないで、澤山の金持になつて結構な生活をして居るものもあります。そのために、正直な貧乏人は大變苦しまなければならんのです。

皆さん。若し日本に斯ういふ哀れな人々や、惡るい人々が增えて行くばかりだつたら、日本はどうなるでせう。外國から支配されてしまひます。

亡國の歷史大要を示す

昔から自分の國を失つた人民は澤山にあります。外國人が自分の國に來て、どし〳〵仕事をして、よいものは何でも奪ひとられて、哀れな生活をした國民はいくらもあります。國を外國人にとられて、自分の國に居れなくなつた國民も澤山あります。一時は世界で一番偉いといはれた國でも、後には外國に踏みたふされたところもあります。

國が無くなるといふことは、孤兒や乞食になるやうに哀れなことです。

そこで昔から何處の國だつて、自分の國を一番强くしよう、一番立派にしようと思つて奮發して來ました。國中に惡るい者、吾が儘なものがあつて、國の發展が妨げられる時には、

社會政策の概念

國を愛する人達が起つて、惡るい者を亡ぼして、世の中を立派に造り改めて來ました。國民の考が間違つて、不都合なことがあつた時には、國中が大さわぎして、間違つた考の者を攻めて亡ぼして來ました。

天皇を中心とした日本の文化には國體の變化なかりしことを示すための準備

國を强くするには、兵隊ばかりでは足りないのです。國を强くするには、國民が善人になり、正しい人になつて、自重して一生懸命働くやうにならなければならんのです。

國を强くするには、また金ばかりあつても駄目です　金が多くなつたからとて强くなるものではありません。國民の考が誠であつて、お互に助け合はなければならんのです。

で佛蘭西のやうな國は百年計り前には、革命戰爭といつて、吾が儘な金持や、權力のある無道な僧侶や貴族に向つて、平民が大戰を初めて、國を新らしく造りかへたのです。露西亞は今大變亂れて國中で戰ばかりして居ますが、これは今迄惡るい政治家や金持が居たからです。

獨逸は一度佛蘭西から攻められて困り果てたことがありましたが、心掛をよくして一生懸命になりましたから、學問科學が世界で一番盛んになり、大變國力が强くなりました。けれどもまた間違つた考の爲、今度世界中の國々と戰つて、また困り果てた有樣になり、皇帝(カイゼル)が位を退かねばならなくなりました。

兒童に國家的自覺を促す

だから皆さん國を強くするには、あなた方が、よいことを考へ、正しいことをして、一生懸命元氣よく働かねばなりません。どんなに貧乏な家に生れても、その人が本當に勇ましく善いこと正しいことをして居れば、それは日本の國を強くするのです。あなた方は日本國の腕だ魂だと思つて、立派な人にならなければなりません。卑怯な考をあなた方が有つことは、日本の國を卑怯にすることです。あなた方が惡るい事を考へたら、それだけ日本の國が惡るくなつたのです。あなた方が身體と精神とを弱くしたら、それだけ日本が弱くなつたのです。

君民一體の吾が國體を明かにす

神武天皇様から、今上天皇様に至るまで、天皇様は吾々人民のため、どれだけ大きな、御恩愛をたれさせ給うたか、わからないのです。日本人の元氣は、いつでも　天皇様に對する御報恩の精神と一緒になつて、いろ〳〵なよいことをして來たのです。

忠勇義烈なる國民精神を鼓舞す

萬世一系の天皇様がお出でになるといふことは、日本人の精神が實に立派で、元氣が實に盛んであつたことを示して居ます。皆さん吾々の先祖も、天皇様を敬ふ精神を以つて、非常な苦しいことも勇ましくやつて來、よいこと正しいことの爲には、命を惜しまずに働いたり戰つたりして來たのです。私共がこんな立派な國に生れたことは、大變に嬉しいことです。私共も先祖の人々と同じやうな精神をもつて、これから益々日本の國を善くし、強くして行かなければなりません。

先づ伊太利の位置を地圖にて示し、その國勢の一般をさぐべし

思想文學の如何に國民を刺戟する力あるかを知らしむる

詩人ダヌンチオ

今度の世界大戰が始まつて、伊太利が獨逸側の墺太利と戰はなければならなくなつた時、出征軍人の間に加はつて少年或は七十以上の老人までも激戰をした。その中でまた、伊太利で有名な詩人であり小說家であるダヌンチオは、愛國の情おさへ難く、飛航機に打のつて、敵陣の上の空をまひ、よく敵の樣子を見て、味方に知らせました。その飛航機が敵の上にある時には、敵が大砲や機關砲を激しくうちかけましたけれども、少しも損害を被らず安全にその使命を果して歸つて來ました。

或る時のこと、ダヌンチオが飛航機にのつて出かけますと、敵の飛航機が二つほど機關銃を武裝して追つかけて來ました。けれどもダヌンチオは敵の飛航機よりも高く上つて、反つて自分の方から鐵砲をあびせかけ、散々に敵を擊退しました。

こんなことが度々あつて、ダヌンチオは勇ましい働きをしましたが、只飛航機にのつて働いたばかりではなく、また國民に望を持たせ、國民を勵ますため、自分の作つた詩を空中からまき散らして、「自分達の國は必ず勝つ。勵め兄弟よ、撓む勿れ同胞よ。吾等が苦しみの終りを告ぐるのは近い。吾等が喜ぶ曉は近づいた」といつて居ました。

伊太利も一時は負けさうにも見えたが、さういふ忠義な人々の熱誠は、遂に墺太利をして少しも動きのとれないやうにさせ、墺太利が斯うして負けると、聯合軍の勢力は益々強くなつて、獨逸も叶はず講和を申し込んだのであります。

詩を作つたり、文章を書いたりして國民を勵ますといふことは、また忠君愛國の大なるものであります。

廣瀬中佐戰死の史實を先づ明かにすべし

決死隊

日露戰爭で、決死隊が旅順口の灣口をふさぎに行つて、廣瀬海軍中佐が討死されたことは諸君はよく知つて居られる。今度の世界大戰に於て國を守つた佛蘭西兵の忠義の念に燃えて決死隊を組んだ話も實に感心すべきものです。こゝに斯ういふ一隊の決死隊があつた。

佛蘭西の位置を地圖にて示し佛國勢の大略を語つて準備とす

佛國第十五師團の某聯隊では一箇中隊の決死隊を編成し、大尉がその隊長として兵士は皆志願兵から採用し、或る最も危險な特別任務に服することになりました。

この決死隊が或る夜M地點にある敵の塹壕の前にはつてある鐵條網を切斷すべき命令を受けた。重大な命令を受けて躍り勇んだ此の決死隊は、一人づゝ靜かに敵の前に忍びよつて、草の上に仰臥しながらポツリ〳〵と鐵條網を切り始めた。すると敵の方から巨眼のやうに光り輝いて居るサーチライトが彼等を白晝の中に於けるが如く照りつけ、切斷して居る佛兵の姿はすつかり發見されてしまつた。こは一大事と見てとつた敵は四方から彈丸をあびせかけた。彈丸の雨に晒された彼等は全滅するより外はなかつた。

すると必死となつて鐵條網を切斷して居つた兵卒の中から、隊長なる大尉が突然大聲に叫び出した。

「諸君、よく聞け、吾等は敵に發見されてしまつた。吾等は只進むあるのみだ。退却しても死ぬんだ。吾等の任務は重いぞ。どうせ死ぬるなら卑怯なざまをしないで、死ぬまで働いて死ね。最後の一人まで殘つて此の網を打つ壞せ。皆立派に戰死してしまへ。もう敵にかくれて仕事をするんぢやない。さあ皆國歌をうたつて働けつ！」

佛國の位置を地圖にて示し、佛國勢の大要を復習す

血に流れる勇壯な佛國々歌が鐵條網の下から空をつんざいて起つた。

不意に起つた銃聲と、佛國々歌の聲を聞いた後方の佛軍は、何で堪らう。これ見ろとばかりに奮起して突喊をやつた。血どろみになつて働いて居た決死隊のところへは、味方の將卒が進出して來て美事敵の塹壕は吾がものになつてしまつた。

忠烈な夜襲

佛國歩兵第二十四聯隊が陣どつて居た前方に一つの小山があつた。この山は佛軍の樣子を伺ふに大變都合のよい山だつたので、獨軍は早くもこれに目をつけて、これを先づ占領しよ

うとして居た。ところが、それを獨逸軍にとられると、佛軍の方では大變危いことになる。そこで、一刻も早くこの小山を獨逸に先だつて、自分達のものにしなければならぬと思つた佛蘭西の聯隊長は、フィリップといふ伍長を選拔して、小山占領の重任を命じた。

「今夜二十五名の部下を率ゐて、彼方にある小山を偵察して來い。獨逸兵が確かにあの小山の向ふ側に塹壕を掘つて居るに違ひないから、塹壕に敵兵が入り込んだら、味方の大不利である。だから足下は敵が何ごとをして居るか見屆けて來るのである。今夜出來る限り敵に近づいて其の行動を偵察し、明朝までに歸つてくればよい」聯隊長の命令はこうであつた。

「大佐殿、確かに承知致しました」

「然しこの偵察は非常に困難だから、勿論死を決して行かなければならんぞ」

「はい、國に捧げた命で御座いますから」

「よろし、しつかりやつてくれ！」

聯隊長は伍長の手を堅く握つた。

フィリップは二十五名の決死隊をつれて、山の方へと向つて潛行した。

それには敵の歩哨を突破するのが已に第一の困難であつた。ところがフィリップは早くも小山の上にうろついて居る敵の歩哨を發見した。少しでもその歩哨から發見されると駄目になるのだから伍長は、

「シッ、あの山の上に敵兵が居るらしいから、一同こゝに止つて居れ。そして叢の中にかくれて居れ。一寸でも動いてはならない。特に氣をつけて默つて居なければならないぞ」

と低い聲で命令し、隊の中で沈勇家なる一人の兵卒を呼んだ。

「俺と一緒に來い！」

暗の中を二人は忍び足して歩哨の方へと近づいて行つた。

「あそこに歩哨が立つて居る」と伍長は兵卒の耳に囁いた。

「第一に彼奴をやつつけてしまはなければならぬ。あの歩哨は本隊から百米突許り前方に來て居るんだから、敵に知られず殺すことが出來る」

「彼奴をぶち殺しませう！」

「いや、ぶち殺すのにも策略がある。二人で出來るだけ彼に近寄るんだ。貴樣は左から行け俺は右から行く」

「はいよろしい」

『歩哨が「誰かつ」と云つたら、貴樣は銃でことりと輕い音をさせるんだ。すると奴は貴樣の方を見るだらう。したら貴樣はペッタリ地の上に伏したほれろ。どんな事があつても、一

言も發してはならないぞ。またムジとも動いてはならないよ。そして俺の命令を待つんだよ』

「解りました！」

二人は次第々々に近づいた。歩哨は何事があらうとも知らずコツ〳〵と歩るき廻つて居た。二人は二三歩許りの所まで近寄つて來た。右から迫つたフィリップは小枝をピシリと折つた。

「誰かつ？」歩哨が叫んだ。

と同時に兵卒は其銃床でドスンと地を打つて身を伏せ息を殺した。怪しと思つた歩哨が左を向く其の途端、伍長は握りしめて居た劍で、グッと獨兵の心臓に突き込んだ。何で堪らう歩哨は聲も立てずにどつと斃れた。

「これはうまい！」と打喜んで伍長は手早く敵兵の外套と帽子と銃をとつて忽ち變裝して仕舞つた。獨逸の歩哨に化けたフィリップは悠々として敵の樣子を見て居た。すると獨兵の一隊は塹壕を作り終つたまゝ歩哨には何の報知もせず、靜かに本隊の方へと歸つて行つた。素知らぬ振して後ろを見送つて居た伍長は、益々しめたと打喜んで、手早く元の佛兵の委に歸り、叢の中にかくして置いた部下を呼び寄せた。

「早く來い。獨逸兵は去つたぞ。塹壕は虛だ。これからが大仕事だ。油斷するなつ！」

喜び勇んだ兵卒等は塹壕の中にとび込んで、敵が來たら來たらと待つて居た。

東の空がだん〳〵白んで來ると、敵が此方へやつて來た。

「覗へつ！十分に身構へして居れ。確かり」

伍長が命令を下した。機敏な佛兵が夜來こんな大膽なことをしたとは思ひもよらなかつた獨逸の一個中隊ばかりは悠々として塹壕へと近寄つて來る。今がその時、

「打てつ、急ぎ打かゝれ！」

不意の急射擊に驚きあはてる隙もなく、もう十名二十名の獨兵はバタ〳〵と斃れた。怒り狂ふ敵の隊長に命ぜられて敵兵は忽ち猛烈な攻擊を始めた。

「打て打て、急ぎ打ちかゝれ！」と叱咤するフィリップ伍長の命令に、二十五名の勇士は腕の限りに射つてかゝつた。そのため流石の獨逸兵も散々に打破られ、十八名の者が捕虜にされた。曉破る銃聲に、佛國の本隊の方では、すは大變だといふことで聯隊長が應援隊をひきつれて駈けて來た。

「大佐殿、御命令通りにやつつけました。敵の塹壕はこの通り占領してしまひました」

伍長フィリップの手を握つて喜んだ聯隊長は、部下の兵隊と一緒に萬歳を三呼した。

ベルギー國民の忠烈

ベルギーの位置及び戰爭前後の民族的境遇を語る

中立國を征伏せし獨逸軍國主義の不道を明かにす

ベルギーは小さな國であつたけれども、男も女も皆忠烈な國民であつた。それにベルギーは中立國で、獨逸はこれを征伐することは出來ない約束になつて居た。それをしも無視して獨逸はベルギーを攻め亡ぼしたのである。

小さなベルギーは、獨逸と戰つたところで勝つ見込はなかつた。けれども天皇を初め、不義の敵軍に抗して、國をあげて正義のために死なんことを誓ひ、國王率先して戰場に立たれ、或は彈丸雨飛の陣頭に進まれたり、泥濘濕陰の塹壕の中で、兵士と戈を枕にして休まれたこともある。

忠君愛國の熱誠に燃えた國民は實に壯烈な戰ひをしたのである。そして皆討死するまで戰つて止まなかつた。

嘗つてロンシンの堡壘には、五百人の守備隊が立籠つて居たが、獨逸はこれに向つて猛烈な攻撃を始めた。ベルギー軍は一生懸命戰つた。けれども、もう兵士は殆んど皆討死して、傷づいた兵士が二十五名だけになつた。けれどもベルギー兵は屈しないで、有らん限りの力で射撃を續けた。

獨逸兵がその堡壘にのり上ると、松火の光のかげに一群の兵士が居た。火藥の爲に眞黑になつた彼等の顔には眞赤な血が流れて居た。軍服はちぎれ〳〵になつて、手には碎けた銃を

正義は國を興す

「力は正義」也との獨逸精神の破滅を明かにす

教授指針

佛國の位置佛國々勢の大要を示す

握つて、最後の戰を始めた。見れば負傷した二十五名の兵士で、その他の者は死んでしまつて居た。

此の有樣を見た獨逸兵は、ベルギー兵士の餘りの忠烈な樣子に感動して、これに射つてからうとはせず、自分達の武器を投げ棄こゝ、ベルギー兵救濟にとりかゝつた。

凡て斃れてしまふまで國を守つたベルギー人の忠烈な精神は何で神を泣かせないで居よう。今や獨逸は休戰を申込て講和も近きにある。一度亡んだベルギーはまた聯合諸國から尊敬され愛護されて國をたてるに相違ない。

仁と勇

佛蘭西の一小學校教師

獨逸から全滅された白耳義のすぐ隣りなる佛蘭西の村にDといふ村がある。

白耳義を荒らした獨逸兵は血に渴いた狼のやうな勢で、このD村まで押し寄せて來た。そして獨軍の指揮官は、村長を呼びつけて、斯んなことをいふた。

「若し吾が兵に向つて、村民が少しでも無禮な事をしたり、敵意ある行爲をしたら、此の村を皆燒き拂つて、村の有力者は皆殺してしまふから、左樣心得て置け！」

敵對しても叶はないので、村長は拒むことも出來ず、その場を退いた。村民は安き心もなく、おそろしがつて居た。それから二日經つての事である。何處からか一發の銃聲が響いて來た。誰が何處で打つたのか少しも解らなかつた。勿論死んだ人もなかつたのだ。ところが獨逸の或る士官が、

「俺の耳もとをかすめて彈丸がとんで行つた」と云ひ出した。

隊長は直ぐ村長を呼び付けて、

「何者か、吾が軍隊に向つて發砲したものがある。予は即刻汝に十一名の人質を差出すことを命ずる。若し犯人が見出せなかつたら、人質を銃殺してしまふ」というた。

村長は、「此の村には一挺の銃器もないのですから、發射する者は無い筈です」。といつて、村に犯人の無いことを云ひ張つたけれども、隊長は頭をふつて、

「犯人が分らなければ、人質をつれて來い」と迫つた。

實にわけの分らぬ意地惡るな奴だとは思つたが、別に仕樣がないので、村長は意を決して、

「よろしい。村民には決して犯人はない。人質がいるなら、村長たる私が代人になつて死ぬるから、さあ殺して下されい」といつた。

すると村の坊さんが二人と、一人の老人がやつて來て、「私どもを人質にして下さい」と申し出た。

犧牲の精神

「まだ七人足りない。どこからか引つぱつて來い」といつて獨逸兵はそこらから男や女を七人ほど引つぱつて來た。そして十一名を一列に並べて、獨兵が銃先をそれに向け、號令の下にドンと一齊射擊で塵にしようとしたその瞬間、一人の學校の先生が走つて來て、

「一寸待つて下さい。犯人は私です。私が發砲したんです。殺すなら私を殺して下さい。罪の無い人を殺してはなりませぬ」と叫んだ。

先生の顏には決心の色があつた。隊長はその勇氣に驚いて先生を見詰めた。先生はピクともしないで立つて居た。

その模樣を氣つかつて見て居た村の人々は皆泣き出した。丁度あの銃聲が響いた時、この先生は學校の教室で生徒に教へて居たといふことを村の人たちは知つて居た。

然し獨逸人は此の先生の崇高な決心をも何とも思はず、「死にたければ貴樣も死ね」といつて先の十一人を殺した上で、この先生をも殺してしまつたのである。

愛蘭土の位置

義俠の愛蘭土兵

カンブレイといふ處で激戰のあつた後である。愛蘭土の一軍曹と一人の負傷兵と別に惡漢だといはれて居た一人の兵卒が、一軒の百姓屋にかくれて居た。或る日のこと、この惡漢と

とグレートブリテンとの關係を明かにす

いはれて居た兵卒が家の外に出て樣子を見て居たら、はしなくも獨逸兵に發見された。彼は惡漢であつたから、事によつたら味方の者の生命をとつても自分はのがれようとする人間であつたのが、彼の心には忽ち正義を愛し同胞を思ふ熱情が湧いて來た。

彼は直ぐ家にはいり込んで、

「私は不注意なことをして實にあなた達にすまないことをした。今うつかりして獨逸人に見つかつたから、ぐず〳〵して居ると敵は來て三人をみな殺しにして仕舞ふ。私は一寸用があるから、あなた達はこゝに隱れて居て下さい！」といつて、また家を出かけた。

惡漢の心にこんな崇嚴なものがることを知らしめる

軍曹は、彼が身代りになつて出かけるのであることを知つたので、呼びとめたけれども、彼は聞き入れないで、闕のところに立とまり、そして軍曹にいつた。

「あなたには妻もあり子供もあります。若しあなたが死んだら、誰が妻子を養つてくれます。私は惡漢に過ぎません。私が今敵にうち殺されても、その爲に痛いとも痒いとも思ふ者は一人だつてありません。あなた方を獨逸人に見出させたのは私です。敵は私以外に人がこゝに居ようとは思つて居ませぬ。で私が出て行つたら、敵は私を捉へてそれに滿足するでせう。私は鐵砲を持つて居ます。私は神かけて誓ひますが、若しあなた方が私の後について出て來て、可愛想なあの負傷兵を敵にわたすといふことになつたら、私は此の鐵砲であなたの頭に

以下二篇は事實を脚色した物語である

彈丸を打ち込みます。私は聯隊第一の射手です。射てばあなたに當らないことはありません」

斯ういひ放つて惡漢は家を飛び出し、敵兵めかけて突進した。獨逸兵は彼を見て發砲した彈丸は彼に當つて、彼はどつと地の上に斃れた。

けれども敵は、此の農家には、別にかくれた兵が居ないのだらうと思つて、こちらへやつて來る樣子もなかつた。で軍曹と負傷兵は三日間そこに潛伏して後英軍の本隊へとかへつた。そして涙ながらにそのことを味方の人々に話した。皆默つて涙をのんで聞いて居た。

とまた彼の敵にうたれた義俠の兵士は、その後、彼の負傷兵と一緒に、赤十字隊によつて救ひ出されたといふことです。

校長さんからの一場の訓話

吉太郎さんは、幼い時から、大變に情けぶかい人でありました。

お母樣から、お菓子や、お蜜柑を頂いても、それをお友達に分けて上げる事を、非常によろこんでゐました。

吉太郎さんは、だん〳〵大きくなつて、學校へ通ふやうになつてからも、惡戯な文太郎さんや、健二さんが、先生から叱られて、後ろに立たせられる時などは、きつと、吉太郎さん

が代つて、先生にお詫びを云つて、許して貰つて上げました。

いつぞやは、吉太郎さんが、學校から家へ戻る途中に、ひどい人だかりがしてゐますから何事であらうかと思つて、一寸大勢の人の中をのぞいてみると、其處には、見るから恐ろしい、顔には髭々と髯を生やした大人が、眼を輝かして立つてゐる。その前には、お友達の民夫さんが、飼犬キングを、シッカと抱いたまゝ、小さくなつて、而も、シク〳〵泣いて居ます。

それを見た吉太郎は、人々を押分けて、

『民ちやん、何うしたの？』と、やさしく訊ねました。すると民夫は、涙の下から、

『此おそろしい、おぢさんは、犬殺しなので、僕の可愛いキングを、連れてつて打殺ろすと云つて諾かないの。ねえ、これは僕の犬だもの。それにおぢいさんは、お前の犬ぢやないといつて僕に喰つてかゝるの』と、かうこわ〳〵に話しました。

そうと聞いた吉太郎さんは、その恐ろしいおぢさんに對つて、『どうか、犬を殺さないで下さい』と申しますけれど、犬殺しのおやぢは、餘り、民夫さんの連れてる、キングの毛色が好いものですから、お金にしようと思つて、中々聞き入れませぬ。

そこで、吉太郎さんは、止むを得ず、そこから四五丁もある交番へ駈けて行つて、巡査にその事を話して、『是非、民夫さんを助けて、犬を殺さない樣にして下さい。あのキングといふ犬は、大變に好い洋犬なので、ちやんと鑑札も受けてゐるのですから』と、たのみました。

程なくして、巡査と、吉太郎とが、民夫の所へ歸へつて來た。例の、犬殺のおやぢは、吉太郎達の姿を見付けると、一目散に逃げ出して、雲の樣に、何時となく、彼の姿は、消えて終ひました。

また、丁度其年の秋でありました。或るお天氣のよい日曜日に、吉太郎は、四五人のお友達と共に、紅葉狩りに出かけました。

山の麓には、きれいな川が流れてゐて、岸の紅葉を、さながら繪のやうに、寫して居ります。

時候はよし、お天氣も好いので、他にも段々紅葉を賞でに來て居ります。みんな、きれいだ〳〵と、眺め入つてゐると、突然「アッ」といふ、叫び聲がしたので、皆は思はず其方を振り向くと、誰か十二三位な、子供が、川の中へ落ち込んで、見る〳〵押流されて行きます。大勢の人は、岸に立つたまゝ、たゞ、あれよ、あれよと、騒ぐばかりで、誰一人それを助けようとはしませぬ。

それを見た吉太郎さんは、矢庭に川の中へ、ザンブとばかり飛び込んで、流れ〳〵て居る其人に、辛つと泳ぎつき、苦心の末、やうやく岸に引き上げました。見ると、それは、吉太郎さんよりも、一級下の尋常四年生に通つてゐる、直ぐ隣村の、三郎さんといふ生徒でありました。

此事が學校に知れて、早速校長さんは、全校の生徒を集め、その前に吉太郎さんを立たせ「吉太郎さんの樣に、常々情けぶかくて、而も勇氣がなくてはいけません」と、吉太郎さんの行ひに就いて、一場の訓話を述べられ、其上、吉太郎さんには、大變立派な御褒美が出たさうでございます。

船と運命を共にした船長

國男さんは、小學校に通つてる頃から、希望してゐた商船學校を、見事に優等で卒業しました。

そうして後には、大きな外國通ひの、日洋丸といふ船の、船長となつて、始終日本と、外國との間を航海してゐた。

常に、彼は、船を自分の家と思ひ、渺茫たる太洋は、彼の小さい庭のやうに考えてゐた。

國男は、幼さい時分から、遊ぶにも勇ましい事が大好きで、よく戰爭ごつこをしてゐたが

彼の一面には、また、老年の人を大切にしてやさしく勞はつたり、子供や、犬猫の樣な、動物に至る迄も、情けをかけて可愛がる尊い心を持つて居た。

その勇ましい心や、情けぶかい心は、彼の年と共に、ます〳〵美はしく成長した。

これ迄彼は、長い航海中に、どんな暴風雨に遭ふとも、又どんな怒濤の逆卷く時でも、ビクともした事は無かつた。何時も勇氣凛々としたものであつた。而も、其傍には、常に船員を憐れみ、且つ慰むる事は、迚も親身も及ばぬほどであつた。

今度、日洋丸が英國に向つて、神戸港を出たのは、十月の半であつた。

ところが、それ迄は、何の出來事もなく、至つて無事にやつて來たのであつたが、地中海邊にさしかゝると、俄然、濃霧に襲はれて、航海も危くなり、兎角してゐる中に、とう〳〵航路を見失つて、不運にも暗礁に乘上げたのであつた。

船の中には、日本人ばかりでなく、外國人も澤山に乘込んでゐた。

船がだん〳〵沈みさうになるので、慌てる者もあり、女子供は悲鳴を上げて泣き叫んだ。

けれど、船長の國男は、更に狼狽る樣子もなく、平素の通り沈着に、而も元氣な聲で、

『みなさんのお命丈けは、必ず私が引受けて、お救ひ申します』

と、云つて、皆の人に力付け乍ら、一方船員には命令を下して、ボートを下ろさせ、乘客

をそれに移し、其上船員をも悉く、それに乘移らしめた。

船員は、船長の上を只管に氣づかつて、

『船は今にも沈みさうになりました。貴殿は大切なお體でございます。さあ、どうか早くこちらへ、乘移つて下さい』

と、頻りにすゝめましたが、彼は尙も船に止まつて、萬端の整理を、殘りなくした上に、若し、誰れかゞ、まだ船の中に、殘つては居ないかと、最後に船の中を隅なく改めてゐると其時、俄に打よせた怒濤に卷かれて、船と共に、遂に國男は沈んで終つた。

船員は必死になつて、極力船長の死體を探したけれど、とう〳〵國男の死體は上らなかつた。

あゝ職責とは言ひながら、國男の如きは、最後迄船に止まつて、自分の命をも忘れ、多くの人々を救つたと云ふ事は、全く、仁と勇とに富める彼の、實に美はしい物語りで、永く人々の龜鑑として、傳へられなくてはなりやません。

鱶を刺し殺した虎吉の話

紀伊の國の或海岸の村に、虎吉といふ一人の少年が居りました。

彼は、幼い時に兩親を失つて、一人の叔父の手許に育てられました　その叔父が漁師のところから、虎吉もよく此叔父に連れられて、海へ漁に出た事があります。

虎吉は、小さい時から、非常に情けぶかく、片輪者や、子供の乞食などを見ると、何となく可哀想になつて、自分に貰つた小使ひで、お菓子などを買つてやるのでした。そして、

『おまへには、お父さんやお母さんは無いのかえ。何うして乞食などするやうになつたのだい。』

と聞くのが例でした。

そして、若し兩親がないなどゝ聞くと、自分の身に引き比べて、餘計可愛想になつて、自分も涙ぐましい氣持ちになりながら、何かと慰めてやるのでした。

それで居て虎吉は、中々力は强く、何事に對しても勇氣がありました。

けれど、普段は決してそんな態は、少しも面へ表はさないので、多くの友達はみんな『めそ虎、めそとら』と、云つて、馬鹿にして居りました。

それは虎吉がよく乞食の子供の身の上などを聞いて、何時も涙ぐむからであります。

虎吉は、そんな事を友達から云はれても、決して怒るふうも見せませんでした。

或夏のことでした。虎吉の村は海岸の事ですから、學校が暑中休になると、多くの子供は毎日海に浸かつて、河童の樣になつて遊んでゐるのでした。

或日、虎吉も友達と一緒に泳いで居りましたが、同じ村の仙と云ふ、これは普段非常に傲慢な、何時も虎吉の事を『めそ虎、めそとら』と云つて、誰よりも一番馬鹿にして居た、意地のわるい少年が、突然大きな聲を出して『助けてくれ！、助けてくれ！』と、怒鳴りますので、大勢のものは何事かと振返へつて見ますと、仙太は兩手を棒の樣に水の上に伸して、

「あゝ〳〵」言ひ乍ら、だん〳〵水の底へ沈んで行くのです。

それを見た二三人の友達は、助け樣と思つて仙太の傍へ泳いで行つたかと思ふと、何うしたものか、これは『キャッ』と云つて、急いで引返へして來ました。

『オイ、仙ちやんは鱶に喰はれて居るんだよ。駄目だ！うつかりすると、僕達までもやられて終ふ。』

と、云つて眞蒼な顏をして、ブル〳〵ふるへながら陸の方へ逃げ上つて終ひました。

此方からそれを見て居た虎吉は、矢庭に友達の持つて居た海軍ナイフを、引つたくる樣にして、仙太の傍へ拔手を切つて泳いで行きました。

そして、ふと水を潜つて見ると、驚く事には、一丈もあらうといふ、大きな鱶が既に足をくわへて、深い處へ引込うとするところでした。

虎吉はそれを見ると、いきなり鱶の右の眼玉に、ナイフをいやといふ程突込みました。鱶は虎吉の不意の襲擊に驚いて、噛んで居た仙太の足を放しました。それと同時に彼は非常な勢ひで、今度は虎吉を目がけて、一呑みにしようと飛びかゝるのを、虎吉はナイフを取り直して、こんどは左の眼玉に突刺しましたので、流石に鱶のひるむ處を、彼は逃はやく、仙太を抱えて泳いで歸りました。

これを陸で見て居た多くの人達は、虎吉の勇氣をやんやと許り賞めそやしました。

仙太は普段惡口を云つた虎吉のために、命を助けられたので、それからと云ふものは、虎吉の前には猫のやうにおとなしくなりました。

その事が村中に知れ渡ると、誰れ一人として虎吉の勇氣と豪膽とを、感心しないものはありませんでした。

虎吉のかうした行爲が縣知事に知れたので、彼は人命救助の功勞として、澤山な賞與を頂きました。

教授指針

信義

烏の仇打

或る日、一羽の烏が木の枝にとまつて往來を眺めて居ると、其處へ一疋の黑ぶちの犬が、

本篇は寓話と理論的に価値ある倫理的話題を取扱ひ、乃至七八歳位から十五六歳迄の兒童が喜常に好む寓話を求めて、更に進んで明瞭に判断する智的要求に応ずる事を目的とする。

さも疲れたやうにヨロ〳〵歩いて來ました。

烏はそれを見ると、大變氣の毒に思つて、

「犬さん、あなた、見れば大分疲れて居るやうですが、どうかなさいましたか？」

と訊ねました。

犬はそれを聞くと、如何にも倦るそうに首を上の方に向けて、

「えゝ、烏さんの前ですが、今日で三日も御飯を食べないもんですから、お腹がペコ〳〵になつて、何だか體がだるくつて堪りません。そして時とすると、眩暈などもして閉口して居ます。」

「さうですか、それは何うもお氣の毒ですね、そんなら私が何か御馳走をして上げませう。これからもう少し我慢をして私のあとへついて入らつしやい。」

と云つて、烏は先に立つて、烏としては如何にも間だるつこさうに、ソロ〳〵飛んでまゐりました。

そして、町中へ出ると、或る意地惡の牛肉屋の店へ、つつと入つたかと思ふと、おいしさうな牛の一片を嘴えて來て、犬に食べさせました。それから四五間行つたところの、不親切なパンやの店からは、出來たてのパンを失敬して來て、また犬　御馳走するのでした。

「何うも、烏さん、御馳走さまで御座いました。おかげでやつと犬らしく成りました。これでもう私の命も助かりました。何んともお禮の申樣もありません。」

と云つて、犬は烏に厚くお禮を申しました。

犬はお腹が充滿になると、何んだか睡くなつて來ましたので、

「烏さん、誠にすみませんが、私何んだか馬鹿にねむくなつて來ましたから、一寸此處で一眠りしますが、若し誰か來るやうでしたら、お手數ですが一寸起してくれませんか。」

「えゝ、ようございますとも。私が氣を付けて番をしてゐますから、御悠然りおやすみなさい。」

かう烏が親切に云つてくれるので、犬は其處の往來の傍へ、ゴロリと横になつてグウ〳〵と寢て終ひました。

其處へ、米俵をつけた荷車を挽いて、一人の百姓がやつて參りました。烏はその意地惡るさうな農夫をみると、

「おぢいさん、そこに犬さんが寢て居りますから、どうか車を氣をつけて挽いて下さい、後生ですから。」

と申しました。

それを聞くと、あばた面の伯父は、口を脹らして、

『何を餘計な事を云ひ上るんだ。こゝは天下の往來だぞ、邪魔げに、こんな所へ寢てゐる奴は、かうしてやるから。』

と、云ひながら、可愛そうにも、わざと寢てゐる犬の上に、重い車を引上げましたので、犬はグッとも云はずに其まゝ死んで終ひました。

烏はそれを見て、怒るまい事か、顏を眞黑にしてガア〳〵怒鳴り立てましたが、意地惡の百姓はそんな事は平氣で、どん〳〵車を挽いて行かうとしました。

烏は近所に居る仲間を大聲呼んで來て、その百姓を追ひかけました。そして車の上に積んである米俵に、穴をあけて百姓の大切な米を、往來に撒きちらしました。

『こん畜生！何をしあがるんだ』

と、百姓は大きな聲で怒鳴りながら、天秤棒を振り廻はしても、後から後からと、烏が追め寄せるので、手のつけ樣もありませんでした。

百姓はとう〳〵空つぽの車をひいて、家へ歸へつて見ると、今度は、裏の麥畑は、先まわりをして烏のために、大概實をむしられて終ひそうでした。百姓はそれを見ると、もう夢中になつて、長い竹竿で盲目めつぽうに、烏を追廻はしますが、此方は何十羽といふ烏が、入れ代り立ち代り攻めかけるので、麥畑は何時の間にか、空坊主になつて終ひました。

その中百姓ももう根が盡きて終つて、そこへバッタリと倒れて終つたので、烏群は凱歌を奏して、何處へか消えて行きました。

正宗の銘刀

昔、ある國の大名の家來に、山田三郎といふ誠に信義に篤い武士がありました。その友人に佐藤太兵衞といふ、これも亦純潔な武士がありました。

二人とも、日頃非常に友誼に厚く、家中の者からも、二人の友情は誰しも羨やまぬものはありませんでした。

或年の夏の蟲干の時、太兵衞が殿樣に預つて居た正宗の名刀を、はしなくも紛失いたしました。太兵衞の驚きは、實に一通りではありませんでした。

『これは、予の家に代々傳はつて來た重寶で、何物にも替え難き、名刀であるから、不注意のなきやうくれぐれも汝に預け置くぞ』と、殿樣から兼々云はれて居るので、彼はもう血眼になつて心當りを探しましたけれども、一向見つかりませんでした。

太兵衞は餘儀なく、其顚末を殿樣に言上いたしますと、殿樣は非常にお怒りになつて、その罰として太兵衞に切腹を仰せ付けられました。

刀鍛冶正宗は刀を鍛ふに時は齋戒沐浴し、仕事場を穿ち四方を繩をしめ心を込めまして、正宗の名刀が出來ましたときは、諸方の居合仕事をなさるものが、宗位にしたがつて立派な刀鍛冶がどうぞ探偵に出て、當時やはりかけたばかりの實を見て、右の服實をたしかに實を準備して授く

素より太兵衛は、お家の重寶を失くなしたのですから、無論、切腹は覺悟の上でした。そして、彼は心の中で自分の不注意を今更ら悔いながら、親友の山田三郎を呼んで、

『此度の出來事は、くれ〳〵も拙者の不注意から起つたのではあれど、拙者の察するところは、これは確に拙者に恨みのあるものか、お家に仇なす惡人の仕業と思はれる。日頃の友情に甘へて、此際御迷惑ではあらうが、何うか拙者の亡き後は、何卒刀のありかを探索して、お家の爲め、一つには拙者の無念をお晴らし下され』と、云つて呉々もたのみました。

太兵衛は憐れにもまだ三十にも出ない若い身空で、切腹して終ひました。

三郎は友人の死を痛く悲しみましたが、此れは一時も早く刀の有所を探し出すより外仕方がないと、殿様へはそれとなく武術修業の爲めと云つて、三年間のお暇を賜はつて、當てもなく刀の探索に出かけました。

彼は、その後野に伏し、山に寢て、凡ゆる艱難辛苦をして探し歩きましたが、一向分りませんでした。

丁度三郎が國元を出立してから、三年目の寒い冬の或日の事でした。彼は中國のある寂びれた町を通りますと、何處からとなく『テンカン、テンカン、』と云ふ鍛冶屋の槌の音が、哀れっぽくして來ました。

三郎は、何の氣なしにその音のする方へ歩いて行きますと、丁度町の中程と思はれる處に一軒の刀鍛冶屋で、頻りと刀を鍛へてる最中でした。彼はその店の前に立ち止まつて、不圖家の中を窺いてみると、傍の刀掛けにかけてある一本の刀がふと目に入りました。

三郎はそれを見ると、ハツト驚きました。そして心の中では、確に例の刀に相違ないと思ひまして、其家の主人に『この刀を一寸見せて貰ひ度い』と云つて、手に取上げてつく〳〵見ますと、それはまがふ方なき御家の重寶の正宗の名刀でありました。

それと見ると彼は、天にも昇るやうに打喜びました。そして今日迄の千辛萬苦もこれで空しくないと思ふと、彼は嬉しくて堪りませんでした。

三郎はそれとなく、鍛冶屋の主人に刀の出所を訊き正しますと、二三年前、五十格好の一人の武士から、買ひ取つたと云ふ事でした。彼は、主人の云ふその武士の人相に何處か思ひ當る所があるので、友達の仇も間もなく擊てる樣な氣がして、胸が踊りました。

刀の値は、五百兩と云ふので、三郎は少なからず驚きましたが、然し此刀の爲に、友人は切腹し、又自分も三年間の艱難辛苦を思ふと、幾ら高くても、そんな事は云つて居られませんでした。

彼は持合せが無いので、早速國元へ立ち戻つて、澤山もない家財道具を、一切賣り拂つた

金を持つて、其刀を買ひ求め、殿様に返上致しました。

殿様は、彼のさうした艱難辛苦の曉に、御家の重寶を探し出したと云ふので、百石の御知行を下すつた上に、彼が友人に對して信義のあつい事を、大變賞讃されました。それと同時に、死んだ佐藤太兵衛の身の上を、非常に不憫に思はれて、改めて三郎に、刀を盜んだ惡人を探し出して、友達の仇打ちをする事をお許しになりました。

その後三郎は、間もなく太兵衛の仇打をして、亡き友人の恨みを晴らしたといふ事であります。

物語として作つて見たものである

瀧見物

房二は、ある晴れた日曜日の午後、四五人の友達と共に、三里ばかり離れて居る、鴛鴦の瀧を見に行きました。

彼方を見ると、青葉の隙に布を引いた様に瀧の水が落ちてゐる。その邊の岩根や、瀧壺の周圍には、到底里では見られない、美しく珍らしい草花が咲いてゐました。そして時々名も知らぬ鳥も、可愛らしい聲を出して鳴いてゐました。

皆は、景色の好い處でお辨當を食べたり、そこらを駈けめぐつたりして遊んで居たが、其中日も傾いて來たので歸へり仕度にかゝりました。

歸りには近道を取つて裏通りを歸る事にしました。處が、初めての上に道も嶮しく、だんだん、薄暗くなつて來たので、思ひ〳〵に道を急いでやうやく里近く來て見ると、お友達の中の次雄さんの姿が見えませんでした。

皆は心配しながらも誰一人探しに行かうとするものはありませんでした。そしてお互に、『も少ししたら歸つて來るよ！さう心配する事はあるまい』と割合に平氣であつたが、獨り房二は、今日家を出る時に、次雄さんのお母さんから、お友達の身の上を吳々もたのまれたので、何うしても捨てゝ置く氣にはなれませんでした。

日頃信義にあつい房二は、だん〳〵日は暮れるも、友達の身の上がひどく心配なので、自分一人また今の道を急ぎながら引返して參りました。

そして方々探し索めて居るうちに、何處からか次雄さんらしい泣聲がするので、其方へ廻つて行つて見ると、次雄さんは足を痛めて谷合ひの木蔭に立つて泣いてゐるのでした。

『次雄さん何うしたの？僕達は君も一緒に來た事とばかり思つて居たら、君は何時の間にか見えないのだもの、僕隨分心配しちやつたよ、遲くなるとお母さんが心配されるから、さあ早く歸らう』と勞はり乍ら聲をかけた。

『僕、途中で足を痛めて困つてる中に、みんなの姿が見えなくなつたんだもの』

「さう、それは大變だつたねえ、僕達ちつとも知らなかつたんだよ、ぢや僕の肩につかまり給へ、負ぶつて行つて上げよう」

と房二はやさしくも次雄を負ぶう樣にして、漸く家へ戻つて參りました。

もう餘程暗くなつて居て、二人の親だちは大變心配して居ましたが、わけても次雄さんの兩親は、その事情を聞いて、信義にあつい房二の行爲を、心から感謝しました。

教授指針

アメカリ合衆國の獨立せし

誠實

ワシントン

今のアメリカの大統領はウィルソンといふ人で、今度の世界戰爭が始まると、ウィルソンは、正しい考を以つて、世界に平和を來さむが爲、聯合軍に加はつて、アメリカから澤山の兵を歐洲に出し、獨逸と激しい戰爭をしました。若しアメリカが兵を出さなかつたら、英國も佛國も獨逸から破られてしまつたかも知れないのです。

アメリカには、偉い大統領の出たことが度々ありましたが、一番最初の大統領ワシントンも仲々ゑらい立派な人でした。

一體アメリカ合衆國の人達は今から二百年も前、英國から渡つて來た人達であつて、ワシントンも英國から渡つて來た或る富有な人の息子であつた。

意味を明かにし、日本と國體を異にすることをも示す

ワシントンは子供の折から心掛がよく、規律が正しくて、よく働いて居つたから、誰にでも愛され信用された。

孟子の言葉

然しどんな人でも信用され、立身するには樣々な困難に遭はなければならぬ、「天は人を苦しめて、そして偉い人になして下さるのです。」ワシントンは十八歳の時、或る貴族に信用されて、アレガニー山脈の測量に出かけたことがあつた。その時の困難は甚だしいものであつた。ワシントンは、一日働いて夕方小屋にかへり、晩餐をすまし、暫らく人々と話をして床につくのであつたが、床は薄く藁を布いたばかりで、その上に破れたフランネルを布いてねるのであつた。床には蟲が湧いて、身體が痒ゆくてよく眠れなかつた。然し、富有の家に產れた人でも、この位な辛抱が出來なければ、決して偉い人にはなれなかつたのである。

ワシントンは樣々な困難に耐え忍んで、二十三歳になつた時には、非常な手柄を立てた。

その時分、佛蘭西から來た殖民が英國から來た殖民の邪魔をするので、ワシントンは使となつて、山を越え谷をわたり、佛蘭西人の首領の居るところに行つて談判をしたけれども、佛蘭西人は戰爭をしようと思つて居るのであつたから相手にして呉れなかつた。ワシントンは佛蘭西人の戰爭準備をよく見屆けて、歸り途についたが、案内をして居た土人たちは、佛

蘭西人に誘はれ、ワシントンを去つて逃げて行つた。ワシントンはキストといふ人と二人きりで、歸路に就いて居たら、佛蘭西人は切りに發砲して二人を殺さうとした。その危いところをきりぬけて歸つたが、間も無く佛蘭西人が戰爭を始めたので、ワシントンは隊長となつて戰ひに出で、非常に勇ましい戰ひをして佛蘭西人を征服してしまつた。

議員に就ての觀念を與へる

その後ワシントンは州會の一議員となつたが、その頃英本國はアメリカに居る殖民に對して無理非道な稅をとりたてた。だから、アメリカに居る人々はとても安々と生活が出來なくなつて英本國と戰ひ、自由獨立の國をたてなければならなくなつた。

大會議が開かれて、議員達は皆ワシントンの偉いことを賞め、ワシントンを殖民軍の總督にしようと滿堂一致で定められた。

この至情至誠をよく研作意情と共に表すべし

その時感極つたワシントンは顏を眞赤にして、眼には一ぱい涙をたゝえ、

「ワ……ワタクシは、何も偉いことはして居ませぬ。私は……そ……そんなに賞められる者ではありません」とどもつて云つたとのことである。

これ程手柄のあつたワシントンが、まだ自分は何も偉いことはして居ない。賞められる資格がないと心から感じていつたといふことは、如何にも見上げたことではありませんか。

○

英本國は軍艦に澤山の兵をのせて攻めて參りました。ワシントンの率ゐて居た兵隊は、今迄鐵砲をうつたこともない人が多く、また劍も持たない者が半數以上あつたのです、然しながら、ワシントンは正義の心に富んだそれ等の兵士を訓練して、とう〳〵英本國を打破つて、講和を求めさせました。ところが英國は講和を求めながら、六ケしい注文をしましたので、ワシントンは斷乎として、英本國の强制をはねのけました。そしてアメリカ側ではヒラデルヒアで議會を開いて、合衆國の自由獨立を宣言し、英本國と手をきつて正しい國をたてゝ行くことにしました。

その合衆國の第一番目の大統領になつた人はこのワシントンでありました。

○

ヴエニスの商人（セキスピーア作）

セキスピーアは西暦一五一六、四年に產れ、一六一六年に沒した詩人で、その劇は今日に至るまで全世界の上場されて居ることセキスピーアに少し遲れて大

昔、伊太利のヴェニスといふ町に、シャイロックといふ意地の惡るい高利貸が居ました。また此の町に情深いアントニオといふ商人が居ましたが、この人は困つて居る人に金を貸しても決して利息をとらなかつたのです。

だからアントニオは、情知らずのシャイロックを嫌つて、そんな意地汚ない高利貸なんていふ商賣は止めたがよいと會ふたびにいうて居ました。シャイロックは外部では、平氣な風

詩人ミルトンあり、當時英國は文學が盛んであつたことは、ちょうどスペインが必ず勝つと思つて居ました。

をして居たのですが、心の中では大變怒つて、折があつたらば仇を討たうと思つて居ました。

さて、アントニオには貴族のバッサニオといふ親しい友達がありました、バッサニオは家柄はよかつたけれども、今は落ぶれて貧乏になつて居たので、困つた時には何時でもアントニオに相談して居ました。アントニオは何時でも相談にのつて、金を貸してやつて居ました。

或る日バッサニオが、アントニオのところに來て、「僕は近い内に或る富豪の令嬢と結婚することになつて居る。ところが金が無くて身支度が出來ない。こんな見すぼらしいなりをしては、とても婿入りも何にも出來たものでない。その令嬢といふは、先頃父親を失つて、財産は皆自分のものになつて居るから、僕が婿入りをすれば、皆僕のものになる。そしてその令嬢は容貌といひ、心ばせといひ、大變美しい女だから、僕は此の上のことは望まない。だから度々君に心配をかけるが、今度きり、どうか三千兩程拜借さして呉れまいか」といふ相談をした。

然しアントニオは其の時、あいにく夫だけの金の持合せがなかつた。でも近日中貨物を積み込んだ數艘の船が歸つて來るので、それを抵當にしてシャイロックから借りてやることに

本篇は元教訓の爲に作られたものではない。故に完璧には不適當なる部分が少くない。然し人々をして動かし、教訓を與へる所にあるのである。國民精神を刺戟する藝術の要を教へる必要がある

した。

でアントニオは、バッサニオを連れて、意地惡のシャイロックの處に行つてこんな相談をした。

「君三千圓程金を貸して呉れまいか。利子はお望み次第拂ふ上に、近く歸つて來る商船の貨物で元金の支拂をするから」

シャイロックは、これはうまいことだ、この機會を捉へて、アントニオを腰も立たないやうにやり込めて、日頃の仇を打つてやらうと思ひました。アントニオは、シャイロックが默り込んで切りに何か考へて居るので、

「君、僕の相談を聞き入れてくれないのか、どういふ考へなのだ」といひました。

するとシャイロックは、「アントニオさん、あんたは日頃私の商賣を惡口いうて、高利貸は人間のすることではないから、止めろと怒鳴りつけて居たぢやないか？俺が腹の蟲を殺してこらへて居ると、君はまた俺を意地惡だの、人喰ひだの、狸だのと散々惡口いうて、おまけに唾ふきかけ、犬あしらひに足で蹴飛ばしたではないか。それにさ、よくもまあシャイロック君金を貸して呉れなどいへたものだね。ところが犬や狸に金のある筈はない。まして三千兩の大金をどうしてこしらへることが出來よう。いや〳〵然し、俺はあんたに御恩がある

四五日前には唾を吹きかけられ、何時ぞやは犬だといつて下すつた。だから、そのお禮に私の方から頭を下げて、御入用だけの金を御用立申さうと出かけようかな」

アントニオもまけないで、

「うむ、僕はまたこの間いうたやうに、犬ともいひたいし、唾も吐きかけてやりたい位だが、君に金を貸す氣があるなら、仇敵に貸したと思うて貸し給へ。萬一破約でもして返金を怠つた日には、大きな顔して科料の督促をするがよいさ」

すると、シャイロックはどうしたのか、カラリと樣子を變へていふやう、「いや、さう怒らなくてもいゝぢやないか。お互に將來は交りを厚くし、俺もこれから君の最員を被りたいと思つて居るから、今迄君から惡口いはれた恥も怒りも、すつかり水に流して、お望みの金を用立てよう。利子なんか一錢もいらないことだ」

アントニオはこの思ひかけない言葉に喫驚して言がいへなかつた。するとシャイロックは猶しも親切さうに重ねて、

「いゝかい。三千兩、無利息でかしてあげよう」といひました。

そこでいよ〳〵三千兩を借り出すことになり、證文を書いて印をしようとすると、シャイロックが戯談半分に、

證文をかき保證人に立つことには沈重な態度を必要とすること

「アントニオさん、若し君が違約して、期日までに金が返せなければ、私の望みにまかせてどこなりと君の身體の肉一斤を科料として頂戴することにしようかね」といつた。

バッサニオは側から、そんな危險な證文を書いてはいけないと申しましたが、アントニオは、「何大丈夫、期日までには此の金額に數倍する荷物が着くのだから心配しないでよい」といつて證文をかく。するとまた側から、シャイロックが、バッサニオに向つて、

「あんたも隨分馬鹿正直な方だ。アントニオさんが破約したといつたつて、一斤ばかりの人の肉が何になりませう。牛肉か羊の肉なら少しは價値もあるといふもの。私はアントニオさんの好意をうけたいと思へばこそ、金を貸してあげるのだが、さういふ氣がなければ、どんな利子をつけても科料をつけても眞平御免だ。」

バッサニオは、何だか心配でならず、どうかして斯ういふおそろしい約束を止めさせようとしたが、アントニオは、これは只の戯談だと思ひまして、とう〳〵印をおしたのであります。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

さてバッサニオが娶らうとして居た富豪の令嬢といふのは、ヴェニスから程遠くないベルモントといふ處に住んで居て、名をポーシアといつて居ました。

こゝも風習の著しく異ふ日本の子供には話さなくてもよい點であらう

バッサニオは、いよ／＼準備が出來て、婚宴をあげることになつたが、先づ自分の身の上を打明けて、自分は財産も何もない身體一つの貧しい者だが、家柄だけはよく、先祖には偉い人が居つたことをポーシヤに話した。するとポーシヤ、「いゝえ財産などは何にも要りませぬ。私の財産は皆あなたのものですもの。その證據に此の指輪を差上ませう」といつて指輪を渡し、それからまた、「私は學校にも行かず何も知らないものですから、お教へを受けて何事でもお指圖通りにやさしくいたしませう」としとやかにいつた。

バッサニオは、この金持で、氣高い婦人が、自分のやうな貧乏な夫を尊んで優しくかしづいてくれるのが、大變有りがたく嬉しかつたけれども、何といつてよいのやら言葉が出ず、その指輪は終生身體から離さないことにすると誓ひました。二人の結婚につゞいて、バッサニオの家臣のグラシアノがまたポーシアの侍女のネリッザと結婚をしました。

その目出たい悦ばしい時に、一人の使が手紙を携へて來た。それはアントニオの許から來たのであつた。バッサニオはその手紙を讀んで居たが見る間に顏色が眞蒼になつた。横から見て居たポーシアは友達の死んだのを知らせて來たのだらうと大變氣遣つて、「どんな知らせで御座いますか、そんなに御心配なさることで御座いますか」と尋ねた。

「あゝ實に困つた。私は先頃、財産も何もないといつたが、無い位ならよけれど、おまけに借錢があつた。その金はアントニオに借りたもので、アントニオは自分の身體の肉一斤を抵當にして高利貸から金を借りてくれたのです」とバッサニオはいつて、その手紙をよんで聞かせた。斯う書いてあつた。

「拜啓、あひにくかの船皆破船致し候に付、止むを得ず證文通りのものを支拂はざるべからざることに相成候。就ては此の世に生きながらへることも覺束なく、就ては一度お目にかゝらるれば悦ばしきことにて候。若し御都合惡しく候はゞ、强ひてお出でを願ふわけにては無之、お出で下さるまじく候はゞ、此の手紙の件につき御心配も御無用にて候」

ポーシヤはこれを聞いて、

「さういふことで御座いしまたら、直ぐとお出で遊ばして、お金をお拂ひ下さいませよ。お借りになつた金の二十倍程の金をお持ち遊ばせ。あなたのためにお友達に頭髪一つだつて失はせてはよくありません。ねえさうなさいませ。」といつた。そしてバッサニオが出立する前に、ポーシアは自分の財産を皆バッサニオのものにしてしまつた。それが濟むと、バッサニオは大急ぎてヴェニスに驅けつけると、驚いたことには、親友アントニオは牢屋につながれて居ました。

高利貸は最早約束の受取日が過ぎたからといつて、バッサニオが持つて來た金をとらうと

もせず、只々アントニオの肉一斤を切つて貰はねばならぬと八釜しく申立てました。そこでヴェニスの殿様の前で、裁判が開かれることになり、バッサニオは友達が助かるだらうか助かるまいかと大變に心配をして居ました。

ポーシアは夫が出立する折、愉快さうに、「立派にお友達をお助けになつて、お歸りの折はその方をお連れなさいませ」といつたが、アントニオの事件は仲々、たやすく收まるまいと心配して、何とかして夫の友達を救つてあげたいと思ひました。

ところがよい考へが浮んだ。ポーシアの親類にはベラリオといふ名高い辯護士があつたので、その人に相談をして、どんなにしたらアントニオを助けることが出來るか、よくそのことを尋ね、そして辯護士の服を借りて、自分に着、男の姿をして裁判に出かけることにしたその時ポーシアはネリッサといふ侍女にも男にばけさして、それを書記にして連れて行きました。

所謂人肉裁判が一番大事な點である兒童に語るとしてはこゝを中心としたらよからう

いよ〳〵裁判が開かれると、ポーシアは法學博士で辯護士のバルザーであると名のつて、裁判に出た。裁判所には澤山な人々が、聞きに集まつて來た。けれども誰もこのバルザーといふ若かい美しい辯護士は、實は女のポーシアであることを見てとつた人がなかつた。夫のバッサニオすら、ちつとも氣がつかなかつた。

抵當、被告、檢事、判事等の觀念を與ふべし

夫の友達の命にかゝはることだから、優しい女ではあつたが、いよ〳〵裁判に出ると、ポーシアは氣がしつかりと引緊つた。そして先づ高利貸に向つて、

「ヴェニスの法律によると、貸した金がとれない時に、證書に書いてある抵當を取る權利はある。けれども人には情が大切である。情がなくては、する事爲すこと皆人間の道をはなれる」と述べたてました。けれども氷のやうに冷めたい心をもつた慾張りの高利貸は、只々「證文通り抵當の支拂をして貰はんとならぬ」といひ張るばかりであつた。

ポーシアは、「被告は支拂ふ事が出來ないといふのか」と尋ねました。するとバッサニオがそれに向つて、

「私は借金三千圓の何倍でも返してやると申しましたけれども、高利貸シャイロックはどうしても聞さいれません。實に人情のない男で道理に合はないことをいふのですから、今度だけは法律を曲げても正しいアントニオをお助け下さいませんかというた。するとポーシアは「いや、法律といふものは曲げてはならない。どんなことがあつても法律通りにしなければならない」と申しました。

高利貸はそれを聞いて大喜びで、

「さうだ〳〵。これは有りがたい。法律といふものは決して勝手に曲げてはならぬ。この裁

判官様は俺のために辯護して下さるのだな。これは實に有りがたい」といつた。

ポーシアは高利貸にその證文を見せよといつて、それを讀んだ上で、「なる程これは身體の肉一斤切つてやることになつては居るが、人間には情がなくてはならないから、この證文を破つてくれてはどうだ」

然し無慈悲な高利貸は少しも憐れみの心を起さないで、

「何と被仰つても私は決心をかへるやうな男では御座いません」といつた。

するとポーシアはアントニオに向つて、「どうぢやアントニオ、その方は今胸を開いて切り裂かれる用意をしなければならないぞ。何か云ひ置くことはないか」といひました。すると アントニオは、

「いゝえ私は死ぬる覺悟をして居ますから、もう何も申しあげることはありません」と落ついて答をし、それからバッサニオの方に向つて、「君の手を握らしてくれ給へ。僕が死んでも決して心配をしてくれ給ふな。歸つたら妻君にもよろしくいつて、僕が君を愛して居たことを話してくれ話へ」といつた。バッサニオは大變心苦しく、

「アントニオ君、僕は自分の生命ほど愛する妻と結婚したが、然し僕は自分の生命も妻の生命もまたこの全世界も、君の生命ほど貴いとは思はないよ。僕は自分の財産を皆この意地惡

世の中は正義一天張では渡れないものであるとこゝではこの點に十分感得させたい

るの高利貸に取られても、君を救つてあげたいよ」といつた。

一心に友達のことを思つて居たからだとはいへ、ポーシアは自分の夫が、かういふことをいつたのを聞いても、恨む心は起さなかつたけれども、

「若しその方の妻君がこゝに來て、その方の今いはれたことを聞いて居たら、どんな氣持がするだらう」といつたのです。

そんなことを話して居ると、高利貸は、もう待ち遠くなつて、「もうだいぶん時が經ちましたから、餘計な話はぬきにして早くアントニオの肉をお願ひします」と大聲にいつたので、裁判を傍聽に來て居た多くの人々は、これからどうなることかと胸をドキつかせて、室はひつそりと靜まつてしまつた。

やがてポーシアは天秤を用意させて、また高利貸に向ひ、「シャイロック、若しその方が肉を切り裂く時、誤つてアントニオを殺すやうなことがあつてはならぬから、外科醫をつれて來なければなるまい」と申しました。

高利貸はもとよりアントニオを殺さうと考へて居たのだから、「さういふことは證文には書いてありません」といふ。

ポーシャが重ねて、「たとへ證文には書いてなくとも、その方に情があるなら、その位なこ

とは許してよからう」

斯ういはれて流石の高利貸も口がきけないで、「いや……どうも、そんなことは證文にはありませんからな」とくりかへしていうた。

ポーシアは、「然らば被告アントニオの肉一斤は、その方のもの故、切りとつて差支へはない。法律に照らして、正當だと見とめる」

高利貸は大喜びして聲高らかに、「流石は立派な判官さまだ。」といつて、長い刃物を取り出しアントニオを見詰め、「さあ」とかけ聲をしました。

すると突然ポーシアは、「一寸待て、まだいふことが殘つて居る。この證文を見ると一滴でも血を流してはならない。證文には肉一斤とは書いてあるが、肉を切る際に一滴でも血を流したら、その方の財産を皆沒收て政府のものにしてしまふぞ」

血一滴も流さないで、生肉を切りとることは到底出來ませんので、流石の高利貸も息づまつて、うんとも言がいへなくなつた。傍聽に來て居た人々は、この時手をたゝいてドヤ〳〵と喜び騷きました。

思ひかけない失敗に、高利貸は顏色を失つて、それでは金の方を貰ひませうといつた。するとバッサニオが側から「金ならばこゝにある」と喜びの餘りに叫び出しました。

けれどもポーシアはそれをとめて、「そんなに騷ぐ必要はない。原告は抵當物の外受取る權利はない。さあ原告、よろしいから肉一斤を切りとれ。しかし血を一滴でも出したら許されぬ。肉でも一斤より一厘一毛の違ひがあつたら、その方を死刑に處し、また財産一切を政府に沒收するから、その心得で肉をとれ」

高利貸が、「いや、もう元金だけ頂けばよろしう御座います。それなら許して下さるでせう」と不景氣な顏でいふと、バッサニオは、「金はこゝに用意してあります」とまたいひ出した。そこで高利貸はその金を受取らうとしたが、ポーシアがまたそれを押し止めて、「待て待て猶一ついひ渡すことがある。ヴェニスの法律によると、人民の生命をとらうとたくらんだ者には、その罰として死刑に處せられた上で、財産を悉く沒收することになつて居る。然し殿樣のおめぐみによつて、生命だけは助けていたゞけるから、その方は今殿樣の前にひれ伏して、おあはれみを願つたらよからう」

高利貸は死んだやうに顏を蒼白くして、殿樣の前に伏したふれて、おがみました。すると殿樣は、

「その方が、あはれみを願ふから生命だけは助けてやる。けれども汝の財産の半分はアントニオにやり、半分は政府に沒收するぞ」

以下は兒童に語る必要はない樣に思ふ教師の參考に止めておきたい

すると親切なアントニオが立つて、「殿樣、若しシャイロックが、死後その財産の半分を娘夫婦に讓り渡すといふ事に約束して居ます故、「私に取れと被仰るその金は、頂きません」といつた。シャイロックの娘は、意地惡るい父の意見に從はないで、この頃人物のよい或る人と結婚をした爲、シャイロックが大變立腹して居た。その娘婿は貧乏な暮しをして居たのです。アントニオはそれを知つて居たので、助けてやらうと思つたのです。

高利貸はいやでも應でもこれに承知しなければならなかつた。こういふ有樣で、計畫はづれる、財産はとり上られる、もうガッカリしてしまつて、「私は氣分がわるう御座いますから、これで御免を被つて、歸へさして頂きませう。それでは娘に半分だけは讓るやうに屹度證文を書きまして印をおします」といひ出した。そしてしほ〳〵とそこを出て行きました。

* * * * *

裁判がしまへると殿樣は、若かい判官の賢明なのを大變ほめて、一緒に食事をしようといはれた。けれどもポーシャは夫の歸るまへに家に歸つて居なければならぬと思つたので、「御親切の程は誠に忝う御座いますが、これから直ぐ歸宅しなければならぬ急用が御座いますので、どうぞ御免下されませ」とお詫びを申しました。殿樣は殘念だけれども仕方がないからとてお歸りになりました。するとバッサニオは自分の妻とも知らずにポーシアに向つて、

「判官樣のおかげで、友達の命が助かりましたので、この金は僅かばかりで御座いますが、高利貸に返へさないでよいことになりましたから、どうぞあなたがお取り下さい」とて三千圓を差出した。アントニオも横から、「私共は、この位の御恩返へしでは足りませんから、一生涯御用に立つことなら何なりとも御命じ下さい」といつた。

けれども判官はどうしても其の金を受けとりません。するとバッサニオは大變當惑して、「それでは何でも、お禮のシルシにお受け下さいますやう願ひます」といつたら、判官は、「お厚意を無にしてはすまないから、あなたの手袋を頂戴して、いつもはめることにしませう」と所望された。バッサニオは早速手袋をはづして差出したが、判官ポーシアは、先頃自分がバッサニオにあげた指環がキラリと光るのを見て、この指環をも貰つて、自分が先に家に歸つて夫が歸つて來た時、「あの指環はどうなさいましたか」とからかつてやるつもりで、「折角の御親切だから、ついでに此の指環を頂戴して置きませう」といつた。

バッサニオは、それは大變大切なもので、一生涯はなさないではめて置くと妻に約束したのであるから困りはて、「これは私の妻から貰ひましたもので、どなたにも差上ない約束でしたから、その代りにこれから早速店に行つて一番上等の指環を買求めてまゐりますから、それを差上ることに致しませう」といひました。

するとポーシアは腹立たしげに、「あなたは乞食が物貰ひに來た時、斷はるやうにして、私の相談をはねのけなさるのですか」といつて出て行かれました。

そこでアントニオが、「バッサニオ君、いゝから其の指環を差上げてくれ給へ。僕のためには生命の御恩人樣だもの。妻君にちつとやそつと怒られたつていゝぢやないか？」

でバッサニオは、仕方なくその指環をはづして使の者を走らせ、判官にそれを差上げた。その時判官の書記をして居たネリッサも自分の夫のグラシアノから指環を貰つた。グラシアノもそれが自分の妻であることを夢にも知らなかつたもので乞はれるまゝにやつてしまつたのであつた。

* * * * * *

さてポーシアは、よいことをしたと思つて、歸る途すがら嬉しくてならなかつた。家に歸つて、判官の服をぬいで、自分の着物に着替へて、夫の歸りを待つて居ると、暫らく經つて夫がアントニオを連れて歸つて來た。そして、裁判の模樣を妻に話して聞かせた。ポーシヤは自分がその判官であつたことを少しもほのめかさないで、アントニオの生命の助かつたお祝をのべ、「まあよくお出で下さいました」と挨拶をした。

するとそこへ、グラシアノとその妻も來て居たが、二人は何か喧嘩を始めた。ポーシアは

「あなた方はもう喧嘩を始めたのですか。まあどうしたことです」と尋ねたら、グラシアノが答へて、「何、奥樣、家内が結婚の折に私に呉れました價黄金の指環のことで云ひ爭ひが起つたのですよ」

するとネリッサがやきもきして、「あら奥樣、だつてあの指環は死ぬまで、決して指から離さないと夫は誓つて置きながら、裁判官の書記にやつたなんて、そんな嘘をいふのですが、きつと他の女にでもやつたので御座いませう」

するとグラシアノが、「そんなことは無い。僕はアントニオさんの生命を助けて下すつた判官の書記だといふ青二才から乞はれて、やらないわけにはいかなかつたので、やつてしまつたのだよ」といつた。

ところをすかさずポーシアは、「グラシアノさん、それはあなたがいけませんよ。いくら人から貰はれたつて、一生涯指から離さないと約束なすつたものを人に平氣でやるなんて、それは間違つて居ますよ。私もバッサニオさんに指環を差上ましたが、あなたのやうに人にやるなんか、そんなことはなさいませんよ」

グラシアノは自分の誤りをいひのがれようと思つて、「何、旦那樣も判官におやりなりましたよ。それを見たものですから、書記の小僧までも私に呉れよといつて聞かなかつたので

す」

それを聞いたポーシアは怒つた眞似をして、何處かの女にやつたのだらうとぐぜり出した。バッサニオは、自分の妻が怒り出したので困つたことをしたと思つて、顏は眞赤になり「いや〳〵、私は決してそんなことはありません。初め判官にお禮に三千圓の金をあげようとしましたけれども、どうしても受取らないで、指環をくれと請求られましたので、それは妻との約束で他人樣へ渡されないとお辭りをしたら、ぷん〳〵怒り出したもので、仕方がなくあげてしまつたわけです。だから許して貰はないと困りますよ。その時、あなたも居られたらあの判官に指環をあげることを勸めて下すつたに相違ない」

二組の夫婦喧嘩が始まると、來客のアントニオは氣の毒で堪らなくなつて、「あゝ私が惡る御座いました。私のためにこんなことになつてしまつたのです」と泣聲をはりあげた。

するとポーシアは、「初めてゐらしつて下すつたのに、こんな樣を御覽に入れましては、誠にすみませんが、どうぞ御心配なさらないで下さいといつた。

アントニオはまた、「まことに惡いことをしましてすみませんが、私の生命の恩人の判官から請求られて、バッサニオさんが、大切な指環をおやり下すつたのです。何もかも惡るかつたのは私です。ですから今度だけはお許し下すつて、今後は約束を破らぬやう、もう一つ指

露西亞は國が亂れて居るけ

環をバッサニオさんにお上げ下さいませんか」

ポーシアは急に優しくなつて、「それでは、もう一つ指環を夫に差上ますから、あなたが保證人に立つて、今度はどんなことがあつても人手に渡さないやうにして下さいますか」といつた。バッサニオはまた指環を貰つた。見れば自分が判官にやつたその指環だつたので、これはまた何うしたことかと吃驚仰天。そこで、ポーシアはその時の判官は自分で、書記はネリッサであつたことを委しく話しました。するとまた吃驚するやら、喜ぶやらで大騒ぎになりました。

その時、突然使が來て、アントニオに手紙を渡した。開いて見ると、破船して海の底に沈んだ筈の船が、實は一艘も沈まないで、皆安全に今ヴェニスの港に着いたといふ知らせでした。悲しいことがあれば、悲しいことばかり澤山つゞくものだが、よいことがあれば、またよいことばかり續くものだと思つて、この思ひがけない嬉しさに、アントニオは今迄の苦勞を忘れてしまひ、皆がより合つて、面白い話をして、夫が自分の妻であることを知らないで裁判の折に眞面目くさつて居つたことを笑ひなどしました。

少年軍看護

世界大戰が始まると、露西亞では少年軍といふのが組織された。小學校の生徒や、小學校

れども、偉い人は居ることは國家の紛亂はロマノフ王朝の失政によることゝケレンスキー起ちてたふれて過激派とチエツク軍と分立して、日本及び聯合側軍隊がチエツクを援けるために赴くシベリヤにいたることを語りきかせる

を出た位の少年が此の少年軍を組織したのであります。

少年軍は戰爭の稽古もやつたが、また看護婦の代りになつて野戰病院に務むる役をした。看護をする少年は、二ヶ月の間、醫學校の先生や、お醫者さんから、消毒の仕方、繃帶のまき方、看護の仕方を習つた。そして看護婦も及ばぬやうに立派な手ぎはで仕事が出來るやうになつて居た。

そして朝から夕方まで病院に行つて熱心に仕事をして居た。負傷して居る兵士は、少年看護が皆好きで、「看護婦の助手」だといつて居た。看護婦の助手は、爆裂彈や彈丸にやられた兵士の傷口をよく洗つてやつて、繃帶をしてやつたり、着物を着かへさせてやつたり、手紙をよんでやつたり、新聞をよんでやつたり、或は床をとつてやつたり、食器を洗つてやつたりして働いたので、傷病兵は大變喜んださうです。

先づ佛國の位置戰中の國狀を示す

貯金箱の九スー

佛蘭西ドウードオヴイル町の小學校では、歲暮の折、出征軍人慰問のため、送りものをしようといふことで、兒童が父母から貰ふ金を毎朝學校に持ち合せて貯金することにした。

或る朝、小さい生徒達が昨日家から貰つた小使錢を大切相に握つて先生の前に持つて來た。その中には一スーの銅貨(日本の二錢)もあれば、五スーの銀貨もあり、時には十スー二十スーの銀貨もあつた。

その中に一年の兒童が先生の前に一握りの銅貨を差し出した。先生は數へた。一二三四五六七八九……

それは九スーであつた。

先生はその兒の顏を見つめた。短氣な先生だつたから、遂ひ

「九スーか？おかしいね。お母さんが九スーお前に下すつたのか？お母さんはお前に十スーの銀貨をくれたんぢやないか？」と叱りつけた。兒童は、先生をこはがつて何ともいはなかつた。

「お前はお母さんから貰つた十スーの金でお菓子を買つて食ふたんぢやないか。一スーのお菓子を一つ食べたんぢやないか？」

再び先生に叱られて、兒童の眼は見る〳〵涙で一ぱいになつた。大きな涙がハラ〳〵と赤い頰を流れた。

「お母さんが九スー下さる筈はないぢやないか？きつと十スー貰つたんだらう？」

兒童はすゝり泣きを初めた。そしてどきれ〳〵に、

「先生、これはお母さんから頂いたのぢやありません。私が……自分で貯金箱をこはして

露西亞の位置を地圖にて示し、開戰以來現に至るまで國情大略を說きかせたり上で民間にはうい人物の多いことを語りきかせる

出して來たんです」といつた。

感に餘つた先生は、兒童を抱いて罪を謝したといふことです。

番人の妻

夫の留守をあづかつて番をして居た、露國の或鐵道線路の番人の妻が、獨逸兵の來たのを見て、これは大變だと思ひ、番小屋の中に駈つけ、まだ獨逸兵が鐵道を破壞しない前に早く通知しようと思ひ、番小屋の中にあつた電話機で次の驛に報知をした。獨逸兵は番人の妻が番小屋の中に走り込んだのを見てやつて來て小屋をとり卷き、

「出て來たら生命は助けてやらう！」といつた。女はいやだといつた。そして內側から鍵をおろし、猶有り合せの棒で突ばつて扉が開かないやうにした。

「出て來なければ小屋に火をつけるぞ」と獨逸兵はおどかした。

番人の妻は成るべく隙どつたら、今に露國兵が來るだらうと思つて、しつかりして待つて居ると、マッチをする音がして、見る間に番小屋に火がついた。壁の方から一時に火が燃え上つて屋根の上がバリバリなり出すと、煙が一ぱいになつて、今に燒死しようとしたけれども、女は助けを求めなかつた。

すると彼方から駈足で露西亞の軍隊が、

大きな歷史的事實が必ずしも子供の心を動かさない。本當は少女の小さな生活の中から少しでも誠實の感じを表はさうとした

「ウラー〳〵」と叫んでやつて來た。番人の妻は大喜びして、火に燃える壁をつゝきこはして飛び出でたが、顏も手も眞黑に火傷して、誰だとも見わけがつかなくなつて居た。

そこに居た獨逸兵は散々に露兵のために殺されて居たが、番人の妻はその死骸の間を通つて、停車場に行き、そこに居た隊長にくはしい話をした。

夫の代りになつて務めて居た番人の妻が、敵兵に苦しめながらも、自分の職務を全うしたといふことは、實にえらいことです。

萩の下露

糸子が田村と云ふ家に引取られたのは、丁度彼女が十の秋でした。彼女の父母は、娘の糸子を市內なる此家へ預けて、間もなく、滿洲へ旅立ちました。

糸子は、田村の家へ來てみると、丁度糸子の姉さんに好い、三ッ年上の、今年十三になる房子といふ、お孃さんがありました。

糸子は、房子を心からなつかしくおもつて、明けくれ姉さん〳〵と、仕へ慕ひました。けれど、何ういふものか、房子は、糸子の深切で、優しい事を、少しも有難いと思ふ樣子も見えません、却つて素氣なくいたしました。

房子のお父さんお母さんが、糸ちやん〳〵と云つて、糸子を房子と同じ樣に、可愛がるの

を見ると、房子は何となく妬ましい樣な氣さへして、ます〳〵糸子を憎むのでした。

糸子は、それを知つて、悲しくて〳〵堪りません、これ程房子を、お姉さんと思つて、慕つて居るのに、「何うしてこんなに、つれなくなさるのかしら、あゝお父さんお母さんのお傍へ行きたいなあ」と、思ふ事は、幾度か知れませんでした。

或お月のよい晩でした。お庭には、露も重げに、紅白の萩が、今を眞盛りに、咲き亂れて居ります。そこに房子さんは、月影を踏みながら、樂しさうに、よい聲でお歌を唄ひ乍ら、立つて居らつしやいました。

糸子も、小さい聲で、その歌に合はせてうたひ乍ら、房子の傍に近よりました。すると、房子は急に歌を止めて、糸子の方をふり返へりながら、

『糸子さん、何うしてこゝに來たの？』と、かういつて訊ねました。糸子は月明かりにニコニコした顏をしながら、

『あまり好いお月ですから、私もお姉さんと一緒に眺め樣と思ひましたの』かう答へた。

そして思ひもよらず、今宵は、房子さんの方から言葉をかけられた事が一層うれしく、何時になくやさしい房子さんの樣に思はれて、

『お姉さん、さあ少し歩きませう。そして今のお歌の先を唱ひませう。』と糸子はうれしさうに房子を誘ひ立て乍ら、尙ほ言葉を續けた。

『お姉さん、私ね、ほんとに貴女を私のお姉さんの樣に思つて居ますのよ、ですからどうぞ貴女も私を妹と思つて仲よくして下さいね、私はお姉さんの爲めなら、何んな事だつてしますわ』

糸子は親しざうに話しかけると、

『いやな糸子さん！、おべッかばかり云つてさ、私うるさいわよ。あつち行つて頂だい』と險呑に嘔き出す樣に云つた。

糸子は、かうした房子の言葉を聞くと、何時もの事ながら、胸の底から涙がこみ上げて、何も云ふ事が出來なくなりました。

「あゝ、何うしたらお姉さんが、やさしくなるのであらう」と、一人かなしい、さびしい心を抱いて、泣くなく、自分のお部室に戻りました。

房子は尋常六年に、糸子は三年に通つて居ましたが、我儘で、甘つたれの房子さんは、大方毎朝の樣に、髮が何うだのかうだのと、折角きれいにお母さんに結つて頂いたのに髮のお小言を云つてみたり、あれを買つて下さい、これを買つて下さいだの云つては、お母さんに焦れたり、強請つたりして、時間の遲れる事も平氣で何かと世話をやかせる。糸子は別に不快

な顔色も見せず、年下であり乍ら、却つて房子をすかす樣に、機嫌を取つては一緒に出かけるのでございました。學校が濟むと、房子のお當番の時でも必ず待つて一緒に歸へつて居たが、房子の方は、學校の往復の道で、よくお友達に向つて、「此糸子さんはね、家の厄介者なのよ」などゝ云つては、恥かしめたり、泣かしたりして窘めて居りました。

ところが、或日曜日でした。房子の過ちから、お父樣の祕藏の、大切な〳〵お床の置物をつい取落して毀して終ひました。さあ平素から、我儘一方で、怖いものなしの房子さんも、お父樣に申譯がない、お父さまから叱られる事を思ふと、身振ひする程こはい。何うしよう〳〵と、悶えながら、一日泣き暮して居ました。

それを見た糸子は、心から氣の毒に思つて、房子のそばに行きました。そして彼女の肩に手をかけながら、

『お姉さん、そんなにお泣きになつて、お體にさはるといけません。それは私が、きつとお父樣にお詫びを申て上げますから』と、云ひ〳〵一生懸命に慰めました。

其日は、朝早くから、房子のお母さんも留守であつたのを幸ひ、糸子は房子に代つて、其罪を自分が着ようと覺悟したのでありました。

夕方になつて、お父樣のお歸へりになるのを待ち、糸子は徐かに行儀よく、お父樣の前に手をついた。

『小父樣、今日私はお座敷のお掃除をして居ましたところ、過つてお父樣の、あの大切な置物を毀してしまひました。どうかゆるして下さいまし』と、健氣に詫び入りました。

何んにも知らず、ほんとに糸子の過ちとばかり思ひ込んで聞いて居たお父樣は、一時大變に驚いて、糸子を粗忽だと云つて叱りました。けれど終ひには、お父さんも稍、言葉をやはらげて、

『過ちだから仕方はありません、以後は謹んで、何事をするにも注意を怠つてはなりませんよ』と、たしなめました。

糸子は、やうやく安心した樣なものゝ、それでもしほしほと、自分のお部室へ這入うとしますと、今の有樣を物かげから聞いて居た房子さんは、糸子の傍へ駈寄つて來ました。さうまでして、自分に盡してくれる糸子さんの心が分りましたので、手を合せんばかりに喜んで、

『糸子さん、私は貴女に面目がありません、私は、今初めて貴女の誠實に目が覺めました。これからは、きつと姉妹になつて、睦じくしますから、今迄の事はゆるして下さい。私は之れから直ぐに、お父樣の處へ行つて、何も彼もみんなお話して來ますから』と、云つて、糸

子の眞心に感じ、今日のお禮を述べ、また日頃の自分の行をも只管お詫びを云ふのでありました。

やがて立つて、お父さんのお部室の方へ行かうとする房子さんの顔は、糸子の目にも、いつもと違つて、すが〳〵しい柔和な微笑があふれて居ました。

本篇は一の物語である。

おくひの小判

昔、谷村といふ小さい村に、太吉と正吉と云ふ、兄弟者が住んで居た。

兄の太吉は、非常に貪慾で、父の遺言があつたにも拘はらず、弟の正吉には一文も分けてやらず、剩へ正吉を厄介者として、自分の家から追出して終つたのである。

ところが、同じ親の子とも思はれぬ程、正直でおとなしい正吉は、何の不足も言はなかつた。此上は自分で働くより外はないと、他家の野良仕事を手傳つたり、賃仕事をしたりして一生懸命に働いた。

正吉は他家の仕事を、恰も自分のものゝ樣に、蔭ひなたなく、大そうよく働くものだから、村中の人が正吉、正吉と云つて、可愛がつて使つてやつた。

かういふ風だから、今は正吉も、小さい乍ら、自分の住む可き家を買つて、お才といふ、これも働者のお嫁さんを貰つて仲よく暮して居た。

それは十二月も末の、霙のふる、寒い〳〵日であつた。今日も一日、野良へ出て働いて來た正吉夫婦は、圍爐裡に焚火して暖まりながら、炊きたてのお雜炊を食べてゐると、何だか戸口を叩くやうな音がするので、二人は風の音かとも思ひながら、その方へ耳を傾けてよく聞いてみると、コツ〳〵と戸を叩く音につれて　絶え入るやうな弱々しい人の聲がする。

『モシ〳〵、モシ〳〵。』

二人は一寸顔を見合せたが、お才はやがて食べかけのお茶碗とお箸を置いて、立つて行つた。

『どなたですか』と云ひながら、戸口を開けると、ブンといやあな臭ひが鼻を突いた。ランプの灯りに透かしてみると、其處には、汚い〳〵乞食のお爺さんが、杖にすがり乍ら危ぶなさうに立つて居た。お才は吃驚しながらも、何うした人かと、憐むやうな眼付きで、其お爺さんの樣子に見入つてゐると、お爺さんは、次のやうに又言葉をかけた。

『私は、途中から足を痛めて、困つて居ましたが、辛つと此處迄まゐりました。どうか庭の隅でも、何處でもよいから、今晩一晩泊らせて下さい、後生でございます』

と、拜む樣にしてたのむだ。

お才は心から可愛さうに思つて、

『さうですか、それはお爺さんさぞ困つたでせう。では一寸待つて下さい、今うちの人に訊いてみますから』と、言ひながら、お才は正吉の傍へ來て、お爺さんの容子を話すと、正吉も大變氣の毒に思つて、

『それは氣の毒な事だ、早速内に入れておやんなさい』と、云ふので、お才はいそ〳〵と其事をお爺さんに告げて、親切に家の中へ入れた。

正吉はやさしく此乞食のお爺さんに言葉をかけて、

『此さむいのに、さぞ困つたでせうねお爺さん、私の家も御覽の通り狹い汚い家ですが、まあ今晩はゆつくりと足をお休めなさい』と云ふと、お才もまた傍から、

『お爺さん、ほんとに寒むかつたでせう、さあ、遠慮なく圍爐裡の傍へお寄りなさい。若しお飯をまだ食べないのなら、今炊きたてのお雜炊がありますし、何も御馳走はありませんが、暖かいからお食んなさい』と、云つた。すると、乞食のお爺さんは、さも嬉しさうに、

『へェ、ありがたう存じます、實はもう二日も御飯を食べずに居るのでございます』

それを聞くと、正吉も大變哀れに思つて、

『それは〳〵、どんなにか餓じいでせう、ぢやこれをみんな食べて下さい』かう云つて、お爺さんにすゝめながら、二人の食べ前を、みんなお爺さんに與へてしまひました。

お爺さんは、何んといつても、二日も御飯を食べずに、歩いて居るのですから、正吉夫婦の出してくれたお雜炊が、どんな御馳走よりも美味しいので、云はれるまゝに、遠慮なく食べて終つた。

お腹は一杯になるし、圍爐裡の火で暖まつたものですから、お爺さんは、思はず知らず、コクリ〳〵と居眠りを始めた。お才はそれを見ると、氣がついたやうに、

『お爺さん、さぞ疲れて居るでせう。もうおやすみなさい、だけど私の家には布團が一枚しかないので――』と、云ひさして、一寸困つた樣に躊躇つて居ると、正吉が傍から。

『私達は、なに、藁でも澤山敷いて寢れば大丈夫だ。お爺さんは年老で、足もいためてゐるのだから、布團を出してかしてお上げなさい』と云つた、お才も直ぐ其後から、

『さうですとも、私達は達者なのですもの』と云つて、また立つて行つて、押入れから一枚の布團を出して、それを敷き始めると、

『イエ〳〵、どう致しまして、勿體ない。どうか其布團は、あなた方がお敷きなすつて下さい。私はもう慣れて居ますから、板の間でも、何處かお臺所の隅にでも、寢せてさへ頂けば結構でございます。それとも破れた葛籠が御座いますなら、それへ寢かせて下されば、こんな有難い事はございません』

お爺さんはかう云つて、頻りに斷つた。

正吉が、幾らすゝめても、お爺さんは辭退するので、それではと云つて、お爺さんの望み通り、丁度破れた葛籠があつたので、それを出して貸してやつた。

お爺さんは、人の軒下や、吳莚の上に寢るよりも、餘つぽど暖かいと、喜んでその中に入つてねて終つた。

翌朝、お才は早く起きて、お爺さんの分も一緒に、御飯を炊いた。

御飯が出來上る頃には、正吉も起きて、今日も亦二人とも、野良へ出て働く仕度をしてゐたが、それもう出來たので、昨夜、座敷の隅みに、寢かしておいた、お爺さんに、聲をかけてみた。

『お爺さん！〳〵。』正吉が庭からかう云つても返事がない。

『お爺さん、お飯が出來ました。暖かいうちに、起きて、お食べなさい。お爺さん！〳〵。』今度は、お才が代つて呼んでみた。けれど、矢張り返事をしない。

何うしたのだらう、と、お才は氣遣ひながら、座敷へ行つて、葛籠の中をのぞいてみた。すると、お才は、見るなり、其場へ、ドカンと、お尻餅をついた。そして、聲をはづませ乍ら、

教授指針

堅志と共に高尚な希望のなくてならぬこと、凡ての大

『モシ、あなた、！ あなた、！ あなた。!!』お才が、つゞけ樣に正吉を呼ぶので、正吉は何事が起つたのかと思ひ乍ら、

『何うしたんだよ、ェ、何うしたと云ふのだ』

『ま、まあ、ちよッ、ちよつと、來てみて下さい。』と、只事ならぬ樣に云ふので、正吉も不思議に思ひながら、上つて行つてみると、それは、昨夜、乞食のお爺さんを、寢かしたと計り思つた、葛籠の中に、お爺さんの姿は見をず、澤山な小判が、一杯につまつて、ピカ〳〵と、まばゆい迄に、光つてゐたのであつた。

それを見た正吉も、驚いたの驚かないの、眼をまはさん許りに、吃驚してしまつた。

一體、小判は、何の位あるだらうと思つて、お才と二人で、桝を出して計つて見たが、お午になつても、中々計り切れない位であつた。

堅志

ミケランゼロ

人類の歷史が始まつて今日まで大抵三千年になります。三千年以前には埃及だのバビロニヤなどあつて、隨分發達はして居つたが、今日の歷史を檢べる學者は、大抵三千年前の希臘

なる結果は大なる動機の賜なることを知らしむ

希臘、羅馬、文藝復興の後をうけて今日の文明が開かれた概念を明かにし、日本の文明が世界的になつた所以を語る

から始める。それ以前のことは、書物でしらべることが出來ないで、考古學といつていろんな遺物を檢べて、その時代の開けて居た樣子を檢べて居る。

昔一番開けて居た時代は三千年前の希臘で、そこでは學問や藝術が盛んで、特に彫刻や建築は今見ても非常な立派なもので、今日の彫刻や建築はこの時のを手本にしたものである。

希臘以後盛んになつたのは、伊太利を中心として起つた羅馬帝國で、政治上一番開けた國であつた。

それから十五世紀の頃になると文藝復興といふのが伊太利から始まつて、獨逸の方にうつつて行つた。その時の最も名高い人々の中には、伊太利ではダンテといふ詩人や、ミケランゲロといふ彫刻家などが居た。

今日の文明は希臘、羅馬、文藝復興の感化をうけて起つたもので、科學が盛んになると共に、一般の學問が盛んになつた。

こゝに皆さんにお話したいのは、文藝復興期の偉人ミケランゼロのことであります。

皆さん、ミケランゼロは彫刻家でありました。エライ人とは軍人や政治家や發明家や金持になることばかりではないのです。詩人や美術家の中には、非常なエライ人があるのです。

ミケランゼロには一四七四年伊太利に生まれ、子供の時から此の世界が不思議でならなかつた。特に天の星を見ると不思議で不思議でならなかつた。夜になつて、天にキラキラと數へきれない樣々な星が光ると、ミケランゼロは、限りもない嚴かな感じがして、自分はこんな心でよい仕事をしなければならぬと思つて居ました。

ミケランゼロの彫刻を寫眞版にしたのを三四枚見せてその面影を偲ばせる

斯ういふ心を有つて居たミケランゼロは子供の時から聖人が好きで、聖人の肖像の前に行くと座つて拜んで居ました。そして自分は天のやうに崇高い繪を書いたり彫刻をしたりしようと思つて、熱心に繪をかいて居ました。さういふ心がけで熱心に繪をかいたものですからその時分に居られた名高い美術家がミケランゼロの繪に感心しました。

けれどもミケランゼロは人眞似することがいやで、自分で工夫して繪をかいて居ましたから後には、人々からそんな繪は惡い繪だといつて惡くいはれるやうになりました。然しミケランゼロは、人から惡口いはれると猶熱心になりました。普通の人なら世間から惡くいはれると、へこたれてしまうのですが、ミケランゼロはさうではなかつた。

だからミケランゼロのかいた繪は、遂には人々を驚かせて、その繪を見る人は何ともいへない崇高い感じがするのでした。特にミケランゼロの彫刻は、見る人の心に何ともいへない偉大な感じを起させる生きた人間のやうでした。

だからミケランゼロの彫刻は今日まで殘つて居て、世界の寶だとして人々から尊まれて居

ます。そんな立派なものが出來て、後の世の人を感心させたのは、子供の時からの心掛が崇高くて、熱心であつたからです。

本篇は二十年前の事實で、主人公は鹿兒島縣人、その後の消息は不明

破産と復興

九州のあるところに喜八といふ小學校の生徒が居ました。五つの時お父さんがなくなりましたので、お母さんに孝行をして居ましたが、お母さんも病氣になりました。けれども家が貧乏で、お藥ものまれず、食べものを食べられなくなりましたもので、家を賣らねばならなくなりました。

自分の家が他人のものになるといふことを聞くと、喜八は殘念で殘念でたまらず、とうとう泣き出して、佛樣にまゐり、

「私はしつかり働いて、また立派な家を建てます。きつと建てます」といつてはまた泣きました。

それから喜八は元氣を出して、家の仕事を何でも自分でやるやうになり、お母さんを大切にし、學校の勉强もして、猶それから小さな杉苗を自分で植えつけました。ところが、年がたつと、その杉苗が大きくなりまして、幹の周圍が一尺七寸になりました。その杉の木は九百七十本ばかりもあつて、家を建てるやうな大きな木になりました。

公衆のため父の一心を貫徹した、その精神を傳ふるを以つて目的とする

土地の人たちは大變喜八に感心しました。

子供の時分に、しつかりした丈夫な考へをもつて働く人は、ゑらい人になります。大きくなつてから偉らくならうと思つても、仲々偉らくはなりません。

悲しいことや、六ケしいことがありましたら、益々しつかりした心を起して勵み出さなければなりません。悲しいことや、つらいことの多ければ多い程、ゑらくなります。樂なことばかりだつたら決してゑらくはなりません。何事でも、出來ないことはないといふ信仰で、働かねばなりません。臆病な人は偉らくなりません。

燈臺守の兒

外海に面した岬や、大海の中に點々と島のある處に、若し暗礁があつたり、浪が非常に激しかつたりすると、そのあたりを通つて行く汽船は大變に危い。若し暗礁にでものりあげたり突當つたりしたものなら、船は滅茶苦茶にくづれたり沈んだりする。そこで、さういふ處には、燈明臺をたてゝ、日が暮れると火をともし、危なくないやう汽船に警戒をしてやらんとなります。太平洋のある小さい島に一つの燈明臺があつて、燈臺守に作太郎といふ子供を有つた年とつた父親が居ました。寂しい島で親子二人りしか往んで居なかつた。

作太郎は、年老いた父を、「お父さん〳〵」と大切に、朝夕勞はつてくれるので、而も怜悧

でよく立働いてくれるので、父の作兵衛は一圖に作太郎の成長を樂しんでゐた。

それで、此の島の一軒家も、他から見るほど淋しくもなく、親子心を合せて平和に暮らして居た。

作太郎は作兵衛の船に乘つて、毎日本村の師匠樣のところに通つて居た。

作兵衛は息子の作太郎を乘せて行つたその都度に、村から油だの自分たちの食べ物などを仕込んで運び、作太郎が歸つて來るのを待つて、又船にのせて歸つて來るのだつた。

ところが或日作太郎は感冒が原因でひどい熱を病ひ、四五日病床に横はる事になつた。

『作坊や、大變な事になつたのう、苦勞だらうが氣をしつかり持つて居てくれろよ、明日俺が村のお醫者さんへ行つて、良い藥を貰つて來たら、直ぐ癒つて終ふからのう』

『お父さん、水か氷かゞ食べたいからお呉れよ』

と、苦しさうな聲で作太郎が云つた。

それを聞くと作兵衛は、可愛さうでたまらない、水でも氷でも思ふまゝ呑ませてやり度いと思つたが、

『それあ呑みたからうが、お前は熱がひどいから呑みたいのだよ、その熱のある上に、お腹をこはしてチブスにでもならうものなら大變だからのう、今少し我慢しろよ、治りさへすりや作坊の好きなものを何んでもやるからなう』

作太郎はそれを聞きわけたが、默つて眼を閉つた。

父の作兵衛はそれがいぢらしくて、そつと手拭ひで涙を拭いた。

その翌日は、朝から生暖い風が吹いて、空がどんより曇つてゐた。何だか變な空模樣であつたが、

『作坊や、俺ア一寸行つて來るからなう、醫者の所で藥と、作坊の好きな蜜柑を買つて來てやるから、さびしからうが直ぐに歸へるから我慢してゐてくれろよ』

『あゝ、お父さん早く歸つて來ておくれよ』

作太郎はいつもと違つて、一入寂しく思つたが、出て行く作兵衛も何となく足が重い樣に感じた。

『いやな天氣だ、暴風雨にでもならねば可いがなア』

と云ひ〳〵仕度をして出て行つた。作兵衛が出て行つて二時間も過ぎると追々西風が出てそれがだん〳〵激しくなり、雨戸や戸口に衝つて家を搖るかと思ふと、轟々とした海の底鳴りが物凄く聞え出した。

と、大粒な雨がバチ〳〵と板戸を叩く、風は吼え浪は荒れ、作太郎の寢てゐる家は地震の

やうに、グラ〳〵とゆれる。

父の作兵衛は歸らう筈も無かつた。

『あゝ、これではお父さんも歸るに歸られまい』

と作太郎は床の中で、自分の病氣も忘れて父の上ばかり氣づかつて居た。と同時にふと氣づいたのは燈明臺の事であつた。

燈明臺には毎夕點火して、一日として缺かした事は無かつた。またそれが作兵衛の任務であつた。そしてそれを怠つては職務怠慢でひどい罰を受けるのであつた。

『あゝ、お父さんが早く歸つてくれゝば可いに！』

だん〳〵日は暮れて終つた。

『お父さんは迚も歸れまい、よし、私が行つて火を點して來よう！』

作太郎はかう決心すると、むつくと許り起き上つたが、何といつても病體なので、よろよろと倒れる、然し作太郎は勇氣を振つて早く立ち上り雨や浪に打たれながら、這ふやうにしてやつと巖を傳つて燈明臺に辿りついた。

彼は梯子段の欄干を捉んで、一段々々と上り、懷中にシツカとをさめて來たマツチを取出して、バツト擦るなり中央の油皿の燈心へ火をつけた。と其光は風と浪とに荒れ狂ふ暗黑な

海上にさつと流れた。

それを見た作太郎は、莞爾として只一言、

『お父さん』

と叫んだまゝ、どつと後ろに倒れた。

翌日風が凪ぐと直ぐ作兵衛が歸つて見ると、作太郎の體は、燈明臺の上に横はつたまゝ冷くなつて居た。

蟻通の明神

今から千年も昔の事でありました。その頃の法律で、女でも男でも、年が六十になれば、遠い山の中へ捨てられる事になつて居りました。

今では年を取れば、子供に家の後をとらせ、年老は隱居をして、樂をすると云ふ事が普通ですけれど、そのころは年をとれば、役に立たないからと云つて、さうした慘酷しい規則が設けられたのだそうです。

其時分の朝廷に仕へて居た家來で、中納言藤原資明と云ふ人がありました。この人は、非常な親孝行で、たつた一人のお父様に孝養を盡して、何に不自由なく睦まじく暮らして居りました。ところが月日には關守はなく、資明のお父さんも、もう來年は六十といふ年で、山

斯ういふ事實は法律上あつたのであつて、たゞ一篇の物語として傳へられたのであつて、必ずしも一篇の物語は孝行を勸める一篇の物語として適當であるとは限らぬが、正念至誠の情ある時、たとへ代に時代に、そむくことはそれが時代に後れがちなるのために、意味を卑近な物語に示すのである。兒童にとつては、ようである。

の中へ捨てられる期日が、だん〳〵迫つて來たのであります。

親孝行の資明は、その事を思ふと、もう今から心配でなりません、日がだん〳〵經つに從つて、お父さんの前では何時もニコ〳〵してゐる資明の顔色は、何んとなく曇つて參りました。

それを見たお父さんは、或る日、

『資明や、おまへ此頃は、大さう顔色が惡いが、何處か加減でもわるいのではないか』と心配さうに訊ねました。

『いゝえ、何處も惡くはありません』と資明は、わざと微笑にまぎらして答へましたが、心の中では、お父さんにそんな事を話して、餘計心配をかけるのを恐れたのでした。

『それなれば好いが、私はまたお前が、お父さんの身の上を思つてくれる餘り、餘計な心配をして體でも毀してはと、心配してゐるのだよ』と、云ひました。

此お父さんは、中々偉い學者でしたから、倅の資明の顔色を見て、今彼が何を心配してゐる事位は、ちやんと知つてるのでした。

自分も來年は六十になつて、山の中へ捨てられる事は、もはや、迅に諦めて居ますから、別に今更心配する事もありませんでした。けれど、親思ひの倅の心の中を思ふと、不憫でたまりませんでした。

其後資明は、一日〳〵とたつにつれて、顔色もます〳〵惡くなり、三度の食事もだん〳〵減つてまゐりました。それを見るとお父さんは、

『資明や、お前はきつと、私が山へ捨てられるのを心配して、御飯も碌々食べないで居るのだらうが、それでは、お父さんよりお前の體の方が堪らないよ、お父さんを思つて心配してくれるのは有難いが、これも國の法律で見ると、何うする事も出來ない。だから餘り心配せずに、何うか諦めて居れよ、と申しますと、資明は、

『でもお父さん、それが何うして私に諦められませう。この世の中に、子と生れて、幾ら國の法律だからと云つて、みす〳〵親を山へ捨てるのかと思ふと、私は悲しくてならないのです』と、さめ〴〵涙をこぼしました。

その年も暮れて、いよ〳〵お父さんの悲しい六十の年が參りました。他の家では、正月だからと云つて、みんな「目出度い、めで度い」と、喜んで居ますけれど、老人のある家ではあべこべに辛らい厄年が來たので、歎き悲しまないものはありませんでした。

わけても、親孝行の資明は、人の見る目も氣の毒の樣に、萎れて居りました。が、彼は心の中で何か決心するところの有る如く、それからはお父さんと向つても、それ程心配さうな

顔も見せず、愚痴もこぼしませんでした。

いよ〳〵老人を、山の中へ捨てると云ふ二月の、節分の日の前の晩になりますと、資明は窺かにお父さんのお部室にまゐりました。

『お父さん、いよ〳〵明日はお父さんを山へ、お連れ申す日と成りました。それをおもふと私は、もう胸も張り裂けんばかりの思ひで御座います。お父様の仰せに背くやうで御座いますけれど、何うしても私はお父さんを、お捨て申す事は、子として出來かねます。で、いろいろ今迄考へた末、もう何うとも致し方がありませんから、お役所へは、お父さんが急病で失くなつたやうに、お屆けして、一時、お父さんをお隱し申さうと思ふので御座います』と

資明は、一段と聲を低くめて、邊りを憚るやうに、お父様の顔色を伺ひました。お父さんは暫らく思案に暮れてるやうでありましたが、やがて決心の色を顔に浮べて、

『資明や、よく云つてくれた、私も決してお前と別れたうはない。お上の法律に背くやうではあるが、今わしにも少し考へる事があるから、お前への云ふ通りになりませう。どうかいゝ様にしておくれ』と、お父さんは云ひました。

資明は、それを聞くと、小踊りして喜びました。

『それについてお父さんに申し上げますが、私はもう迅うに、お父さんの隱家は拵えてあるので御座います。どうか甚だ狹苦しくて、汚いところで御座いますが、暫時の間御辛抱を願ひます』と、云つて資明が、お父さんを案内した所を見ると、それは土藏の椽の下で御座いました。

其處には、一間四方位の穴が掘つて御座いました。そして中には暖かそうに。藁が敷いてあつて、もう、ちやんと床なども取つてあります。それが表から見ては、誰が這入つて來ても分らないやうに拵えてありますので、お父さんも大そう喜んで、その晩から其穴に寢起きをする事になりました。

資明は、翌日から人に知れないやうに、三度々々御飯を運んで、其日お役所にあつた出來事や、世間話しなどをして、何かとお父さんを慰めて居りました。その事は、世間では誰一人知る者はありませんでした。

資明のお父さんが、穴住居をしてから、もう半年も過ぎて居りました。或日資明は、何時もの通り役所へ出て見ますと、役所の内は、何か事件でも起つたやうに、多くの役人たちが何人となくそわ〳〵して居ります。彼は不審に思ひながら、人に訊ねて見ますと、此度天竺からの王様の使者が、我國へ貢物を獻上に、來ると云ふ事でありました。それ許りでは、何も人々がさうそわ〳〵して驚く程の事はありませんでしたが、此度の其お使は、何んでも非

常に六ヶ敷い質問を、持つて來るといふ噂があるのでした。

資明はそれを聞くと、餘りに好い氣持ちはしませんでした。それもモウ使ひの來るのは、四五日中に迫つてゐるといふので、その方の係りの人は、中々その準備に忙がしいので御ざいました。

資明は、家へ歸へるとその事を、父に話してきかせました。すると、

『さうか、それはまあ、お目出度い事ではあるが、其質問と云ふのは、きつと日本を小國と輕蔑つて、何か六ヶ敷い難題を持ちかけるに違ひない。よろしい、其時が來て、若し、誰にもそれが解く事が出來ない時は、私にその事を知らせなさい。どんな難問題でも、解いて上げるから。』と、お父さんが被仰つたので、資明は大變喜んで、その日の來るのを待つて居ました。

それから四五日過つと、案の如く天竺の使ひの者は、澤山な貢物を携へてやつて參りました。宮中の大廣間には、時の天子樣が大勢の家來を從へて、親しく天竺の使者に謁見を賜ひました。

天竺の使者は、いろ〳〵の寶物を獻上して、王樣からの傳言を謹んで天子樣に申し上げた末に、傍の錦の袋の中から、丸く削つた一本の樫の棒を出して、

『謹んで日本の天子樣に申し上げます。この樫の棒、何ちらが末で、どちらが根で御座いますか、お敎へ下さらば有難き仕合せに存じ奉ります』と言つて、その使者は心の中では、これのわかる者は何うせ日本などに、居て堪るものかと言ふ樣な顏付きでした。

天子樣は、それをお聞きになると、お心の中では使者の、さうした無禮の言葉に少なからずお怒りになりましたが、さあらぬ體で、『誰かこの問ひを、解いて上げるものは無いか』と大勢の朝臣を御覽になりました。が、誰一人、顏を見合す許りで、それに答へるものはありませんでした。

其日、資明はその席場に、連なつて居りましたが、私かにその席を拔けて、大急ぎに家に戻り父にその事を申しました。

『さうか、それは譯はない事だ。その棒を水に浮べて見て、少しでも底に傾く方が根であるのだ。』と、敎へてくれましたので、資明は大喜びで直ぐ宮中に引返へし、そのまゝ答へました。すると、果して其通りであつたので、天竺の使者は少なからず驚いて終ひました。其日はその儘で濟みましたが、翌日になると、今度は二疋共同じやうな蛇を持つて參りまして何方が雄であり雌であるかと云ふ、六ヶ敷い質問でした。資明は、またその事を父に話しますと、梅のずいきを押し付けて見て、それにからみつく方が雌であると、敎へてくれましたそ

の通りにして見ますと、矢張りそれに違ひありませんでした。

流石の使者も、これ許りはわからぬものと思つて居りましたのに、すつかり當てられて終つたので、いよ〳〵驚きました。

又、其翌日になると、今度は水晶の丸い玉に、螺旋型に穴のあいてあるのを持つて來て、これに絲を通してくれと云ふ事でした。

それは、玉の一方の穴の、口に砂糖を塗り置き、片一方の穴の口から、絲を結んだ蟻を這はせてやれば、自然と絲が通ると云ふ事を、父から敎へられて資明は、早速その事を天子樣に申し上げその通りに致して見ましたら、美事に絲が通りました。其時の天子樣のお喜びは譬へやうもありませんでした。

ところが、天竺の使者は、三ッの難題を、三ッともわけなく解かれて終つたので、日本にもかうした智者が有るかと思ふと、心中大に恐れをなして、這々の體で本國へ立ちかへつて終ひました。天子樣は、其後改めて資明をおよび出しになり、

『此度、汝がなかりせば、朕は申すに及ばず、日本國中天竺のために、大變な恥をかくところであつた。』と、被仰つて、資明の手柄を非常に御嘆賞になりました。そして、どんな御褒美をも望み次第に取らせるから、と云ふお言葉に、資明は有難涙にくれて居りましたが、聽

て恐るおそる面を上げ、

『斯程迄の思召し、臣の身に取りて何んとも畏き次第で御座います、私は、決して何の望みとてござりませんが、茲に、陛下に折入つてお願ひが御座りまする』と、云つて資明は、あの解答は父に敎へられた事の、一分始終を申し上げた末に、父の命乞ひをお願ひしたので御座ります。

天子樣は、それをお聞きになつて、資明の親孝行を大變御感心遊ばされ、また老人を山へ捨てるやうな法律の、大變間違つてる事をお悟りになつて、早速その法律をお廢しになりました。

その後資明も、資明のお父さんも、大そう出世を致しまして、天子樣に大變忠義を致したそうです。そして、資明のお父さんが失くなつてからは、天子樣は大そうお歎き遊ばして、畏けなくも、蟻通し明神といふ神樣にまで祭られまして、後世までも多くの人々に崇拜されたといふ事であります。

教授指針

青島の戰爭に就ての觀念を明かにさせる

世界戰爭の原因及び導火線如何を明かにする

儉約

興國と儉約

青島の戰爭で、日本は獨逸の將卒を捕虜にして、ワルデック將軍以下の將卒が福岡に收容された。ところがその後此の度の世界戰爭が初まつたので、日本は獨逸の捕虜を收容したまま本國にかへしてやらなかつた。

日本の方では此の捕虜をまかなつてやるのに、豫算を立てゝやつて居た。戰爭中で、敵國といふことになつて居るから、日本がまかなつてやつたものは、有らむ限り食ひ盡してよさそうなものだといふのが人情の常である。けれども獨逸人は、豫算だけの食べものを食べなかつた。日本のまかない係では、豫算の金が餘つて仕樣がなかつた。何故かといふと、獨逸人は芋の一片でも、パンの屑でも、出されたものは決して食べ殘さなかつた。もう腹一ぱいだと思ふと、殘つたものは皿のまゝ決して棄てないで、ちやんとしまつて置いて、後の食事の折、前の殘りを先に悉皆食べてしまつた上で、新らしい食べものに手をつけた。斯うして始終食べ殘しをとつて置いて、次の食事の時に食べて居たので、豫算だけのものを食べることが出來ず、日本のまかない係は、豫算だけは食べて貰はないと困るので、時々大變な御馳走をしてやつた。敵國にありながら、獨逸人はどんなに嬉しかつたらう。

それから獨逸人は、日本の兵隊の酒保で、菓子を買ふことがあると、菓子を入れて貰つた紙袋を一枚一枚叮寧に擴げて、しまつて置いて、その紙に本國の父母、妻子、兄弟、朋友などに手紙を書き狀袋などは別に買はず、やつぱりその紙を狀袋につくつて送つて居た。

何年か經つて、この捕虜達は、福岡から習志野へ移された。福岡は風景がよいので、捕虜達はそこを去り行くことを殘念がつて居たさうだが、いよ〳〵移されることになつて、出發した後で、捕虜たちの居た室に行つて居ると、紙片一つだつて、塵埃一つだつて取り殘されたものはなく、何もかも悉皆持つて行つて居たといふことである。その外いろ〳〵獨逸人の儉約をして居たことに就ては、日本の兵士を感心させたことが澤山ある。

習志野に移されると、シーメンス會社といつて獨逸人の經營して居る會社から、お見舞だといつて百個位の鷄卵を捕虜に送つたさうである。並大抵なら、貰つたその卵を喜んで食べるのであらうが、捕虜達は貰つたその卵の大半を賣つて貰つて、親鷄を買ひ、そして殘りの卵を孵化させ、澤山の雛が出來たのを喜んで生長さしたとのことである。食つてしまへば、何のたしにもならぬ少しばかりの卵を、斯うして孵化させて置くと、澤山の鷄が出來、それがまた澤山の卵を產む。何と見上げた殖產的精神であらう。

教師の參考書
獨逸國民に告ぐ（文部省譯）
教育文學十講（三浦氏著）

どころが、こんなに儉約し、またこんなに殖產的の精神を有つて居るのは、この捕虜達ばかりではないのだ。獨逸全國の人民が皆斯うして戰爭の初まる早い以前から力をつくして來た。

五十年位前、獨逸は佛蘭西のナポレオンから打破られ、散々な目にあつて困つたことがあつた。戰爭にまけた獨逸は、眞から覺悟を据えた。どういふ覺悟をして來たかといふに、

「獨逸は外國よりも、ふらい國柄であるから、今度はまけても、また大に勝つことが出來るだから外國の眞似をせず、獨逸人に必要なことは、獨逸人の力でやつて行かねばならぬ。だから、學問でも、食べものでも、着物でも、器械でも、何でも外國から買ひ込んではならない。食べもの、着物は勿論凡てのものを質素にしなければならぬ。獨逸人は農業を盛んにやれば、外國から買はなくても食べる丈とれる。で農業を盛んにしなければならぬ。それと共に學問工業を盛んにして、どし〳〵發明をし、そして小學校生徒の時から、立派な獨逸魂をもつた軍人精神を養つて行かねばならぬ。そうすれば、」「次の大戰には屹度勝つ。勝たねばならぬ」と斯う思ひきめたのです。（フイヒテの「獨逸國民に告ぐ」は文部省からも出て居る、また三浦氏の「教育文學十講」にも出て居るから教育者は是非精讀を要するものである國民としてこんな昂奮力のある言葉を語つたものはあるまい）フイヒテといふ哲學者で豪傑だ

といはれた人なんか、切りにさういふ演說をして、そのために獨逸人が皆奮起して、「さうださうだ、其の通りにやつて行かねばならぬ」といふことになつた。

その覺悟を實行する爲に、實際獨逸は外國のものを買入れなかつた。そこで、英國などは自分の國に出來たものをはねつけて買つてくれないとは何のことだと大變怒つた位です。その頃から英國と獨逸は祕かに、睨み合ひはして居たが、何せよ獨逸の奮發は大變なもので、一方にはどし〳〵學問工業をはげまし、農業をすゝめると共に、一生懸命儉約して、まづいものを食つて行つた。その爲め世界第一といふ程に學問が起つて來た。あなた方が勉强して居る理科の學問は獨逸が一番です。理科といふのは子供がやる學問であるが、獨逸ではその學問で、世界で一番すぐれた樣々な機械をつくるやら、潛航艇や、飛行機や、三十里も玉の飛ぶ怖ろしい大砲をつくるやら、醫學を進步させるやら、何せよ何も彼も大變な進步で、學問では世界の中心になつたのです。その大きな勢と共に軍隊を强く養つて行きました。

だから、世界を相手に何年間も、あゝいふ大戰爭をして仲々負けなかつたのです。で、諸君も大奮發をするには、また儉約をして行かねは何事にも成功しないといふことを始終心得て置かないとならん。品物でも、食べるものでも何でも、おろそかにしてはならない。不必要なものを欲しがつてはいけない。飾りだてをしてはいけない。おごりとおしやれは人を弱

平和時に於ける忠義の精神

忍耐と倹約を説いたその二者を綜合して國家的精神を振起すると共に人格力を發揮せしむることにつとめ

くし、國を亡ぼすものです。エライ人は決して、不必要なことに物や金を費しませぬ。

どんなに強い荒つぽい人間のやうにいはれても、忍耐と倹約の出來ない人は眞當の強い人ではないのです。最も強い人は、最も忍耐が出來、また倹約をする人です。これから先の人は、強い人でなくては、一人前の生活が出來ませぬ。ぐらつく人間や、金つかひや、見え坊は決して成功は出來ないのです。人の厄介で飯を食ふ者は、奴隷よりも賤しいのです。外國の厄介にならぬばならぬ國は進歩もせず力も無くて、何時までも外國にまけるのです。日本はこれから世界で一番強い國卽ち獨逸、英國、米國の三つの國を相手に、非常にエライ奮發をして働き、また忍耐、倹約をして行かないと、ならないのです。日本を強くすると否とは、全くあなた方の力によらんとならぬ。あなた方が大きくなつた時に、日本は世界で一番進歩した強い國になることが出來るやうに、よく〳〵心掛て置かんとなりませぬ。それが一番大切な忠義です。その忠義の出來ない人は、決して成功はしないのです。

今後の世界と日本國（奮勵、忍耐、倹約）

世界戰爭が始まると、日本は船成金といつて、安い値で造つた船を、素敵に高い金で賣つたり、船の運賃で澤山の利益をしめたりして、大金持が澤山出來た。それから又一時は、外國貿易で澤山の金が流れ込んだ。西洋では戰爭で金が無くなるばかりだのに、日本ではどし

どし儲かるばかりであつた。

そんなに金が出來たから、日本には貧乏人が無くなつて、皆旨しいものを食べられるやうになつたかといふに、さうでない。大正七年の夏になると、米の値段が一升五拾錢になつて食べて行けない者が澤山に出來て、富山縣を初めに、名古屋、京都、水戸、大阪その他日本の到る處に、大騷動が起つて、こんなに食べ物が高くては生きて行かれないから、米を安くせよと騷ぎ、大勢の人民が集まつて、米屋をたゝきつぶすやら、警官と衝突するやらした。

さうして見ると、日本には澤山の金は出來て、昨日の貧民が今日は自動車に乘つて遊びに出かけ、昨日は一家まづいものを食べて居たのに、今日は一夜に、何百圓といふ散財をして遊ぶ者が出來たけれども、それはほんの一部分の人々で、全體からいふと反つて大變に苦しい貧乏人が出來たわけです。國に金が澤山出來て、食べられなくなる貧乏人がどし〳〵出來て來るといふことは、何と理窟に合はぬことだらう。然しこれは實際さうなるもので、一方に大金持が出來ると、一方には食べられなくなる人民の出來ることは、確かな事實である。けれども日本國を強くするには、こんなことではならない。食べられなくなる人が澤山出來るやうでは、人民は賤しくなつて、進歩は出來ず、只食ふことにばかりに骨折つて、世の中のためにつくすことは出來なくなるものです。

だから、諸君、日本國の人が皆安全に食べて行かれて、皆が各々その仕事をはげむで行かれるやうにするには、第一澤山の食べ物をつくり出さねばならぬ。外國から食べ物を買ひ入れるやうでは、大きな戰爭があつたら、飢死しなければならぬ。だから學問工業をやると一緒に、贅澤なものをつくることを止めて、農業を盛んにして行かなければならぬ。日本はこの儘では、早晩食つて行けなくなるのです。諸君は毎年日本の本國だけで、どれ程人數が增えて行くかを知つて居ますか？一年に八十萬から九十萬人程增えて行くのです。この人數は岩手縣の人口です。そして見ると、日本は毎年、一人も人間の居ない岩手縣だけの廣さある土地を擴めて、それだけの食べ物を造つて行かねば、食べものは益ゝ足らなくなつて、米ばかりではなく何でも値段が上つて行くことになるのです。

日本地圖を示し、岩手縣と自分の縣とを比較させる

然し人數が多くなることは、國を强くするに一番大切なことです。人數が多くなければ、國は決して强くならない。だから戰爭にも勝つて行くことは出來ない。世界の何處へ行つても、日本人が一番優れて、素破らしい勢で働いて居るといふことにならなければ、日本は決して世界的に强くならない。その爲には、人間の數が多くなくてはならない。世界で一番人數の增えるのは、日本と獨逸である。佛蘭西のやうな國は年々人數が減つて行くから、決して强い勢力の國にはなれない。

人口と進歩との關係をよく知らしめる

けれども人が多くなれば、それだけ國民が一致して奮發しないと、食べ物がなくなる。だから日本人は金をつくるど共に、食べ物をどし〳〵造つて行かねばならぬ。金をつくるには學問と工業が大切である。食べ物をつくるには農業が大切である。學問は國の品位をあげ、工業は國のそなへつけをするばかりではなく、樣々な物品をどし〳〵外國に賣り出して、金を儲ける。農業は食べ物ばかりではなく、また工業品をつくる原料をつくり出すためである。

ところが、只今日本は、それだけの用意が出來て居るかといふに、まだ十分に出來て居ない。このまゝで行つたら日本は大變なことになる。獨逸があんなに意地强い戰爭を始めたのは、食べられなくなるおそれがあつたからであつた。露西亞があんなに亂れたのも、いろいろなわけはあるが、一つは多くの人が食べられないからだ。で農業は大變に大切である。農業をして、どし〳〵食べ物が出來、工業の原料品が出來れば、その勢で外國貿易も盛んになつて來るのは分つたことである。ところで日本人の農業はどの位なところにあるか、一つ玆に繪を書いて、皆さんに考へて貰はねばなりませぬ。

本圖は志賀重昂氏著世界富代地理による これを大きい掛圖にして示し、説明をする

ウルグワイ（南米の最小國）日本の三十八萬四千倍といふ羊の數：二、四〇〇頭

濠太利（所謂世界一の牧羊地）　二、二〇〇頭

人←

この圖によると、日本で飼つて居る牛と羊の數を、外國に較べると、全然お話にはならぬ程の、なさけない有樣である。こんな有樣だから、日本では牛肉の値段が東京では百匁一圓もする。三十圓の月給をとる人は、牛肉百匁食へば、その日は飯一粒も味噌汁一椀もいたゞけず、家にも住はれないといふわけである。滋養物がこんなに高くては、菜葉ばかり嚙つて

居るより外はない。それから羊だ。日本にはこんなに羊が居ないのに、西洋で出來た羅紗の洋服を着るとは間違つた話だ。日本人は洋服を着るなら、木綿で製つた洋服を着なければならぬといふ理窟になる。五拾圓そこらの月給をとつて、決して立派な羅紗の洋服が着られるといふ道理はない。けれども日本人は三十圓の俸給をとつても五拾圓の俸給をとつても、立派な羅紗服を着て居るのだから、その見え坊なことゝいつたらない。まるで倒立ちをして歩いて、それを倒立とは思つて居ないのと同じで、あぶなつかしいことを平氣でやつてる。

羊と牛だけでも斯うだ。その他の日本の殖產が、振はないこともこれで想像される。殖產が振はなければ、日用品や、食物を外國から買入れなくてはならなくなる。そうすると値段が高くなるばかりでなく、若し外國と戰爭をしなければならぬ樣な事になつたら、飢死しなければならなくなる。だから日本人は自分で食べるものや、着るものは日本でつくらなければならぬ。人口がふえて本國ばかりではとても十分な食べ物が出來なくなるから、外國へ出かけて、金儲けをするなり、農業をするなりして働かねばならぬ。日本人は支那滿洲へも、サイベリヤへも、南洋へも、何處にでも行つて働かねばならぬ。戰後は乾度米國人と、英國人が段々世界中に手を擴げて、非常な働きをするから、油斷をすると、日本は大變困つたことになる。吾等は大奮發をしなければならぬ。

地圖に依つて英米獨の植民政策を明かにさせる

もつと委しくいへば、英吉利人はこれからどうしようと思ふのだらう。英國人は、アフリカの喜望峰から、埃及のカイロといふ都まで六千哩の鐵道（三千五百哩は已に落成、二千五百哩は大河や湖に汽船を浮べる）を、更に東の方へ向けて、印度のカルカッタまでのばし、盛んに働かうとして居る。その鐵道は實に偉いもので、あの名高いアラビヤ砂漠を横切らなくてはならぬが、英國は元氣よくそれを實行して大きな利益を一國で貪ぼらうとするのである。

△然し獨逸の殖民政策はどうなるか講和の結果を待たねば分らない

それから獨逸人はどんなことを考へて居るかといふに、今迄は都のベルリンから、バグダッドに出で、それから波斯の方へ一直線に進んで行つて、利益を得ようとし、戰爭中にも關らず大トンネルをつくりあげた。けれ共バグダッドは大正六年三月英國軍に陷つたので、その方向へは手を擴げることが出來なくなつた。

けれども、獨逸は自分の勢力範圍に這入つたオデッサ港とコンスタンツア港から、黑海を渡つて、バツームに出で、波斯に出來る產業物を吾がものにし、進んで印度に出ようとして居る。それとまた獨逸は、露西亞のバルト海岸をとつて、東の方へ進んで、バイカルコに出で、サイベリヤの方へ手を出さうとして居る。すると日本は大變なことになる。何故かとなれば、獨逸が印度の方へ出て來ると、日英條約で日本人は印度防備の半分を引受けなくては

ベーリング海峽は三八浬と英國海軍省の地圖及びフインドレー氏の說によると五六浬

ならぬことになつて居るから、獨逸人を防ぐ爲、印度まで兵を出さねばならなくなる。それから、サイベリヤの方に獨逸が出て來たら、日本領の朝鮮や樺太をおどしつけて利益を得ようとする。（本原稿は講和問題の起る以前に書いたのであつたから、獨逸の部に關しては、豫想違ひをして居た點もある。）

それから今度は、アメリカは何うするだらうかといふに、南アメリカの方に雄飛するのは勿論だが、また非常な熱心を以つてサイベリヤの方へやつて來て、事業を起し、莫大の利益を獨占しようとして居る。その爲にはアラスカから、ベーリング海峽の海の底にトンネルをつくつて、サイベリヤの奧の方へと進まうとして居る。巴奈馬運河を開いたり、玖瑪に到る海上一一四浬の架橋をかけて汽車を通じて居る米國人のことだから、その位の工事が出來ないことはあるまい。

諸君、世界の三大强國は斯うして東洋の方に向つて、利益を獨占しようとし、日本がその勢力の渦卷の中にあるのです。諸君は日本人たるの大元氣を以つて、外國人の勢力をしのぎ北の方へも、南の方へも、どし〳〵行つて働き日本を益々强い國、富める國にしなければならんのです。日本人ほど熱さにも寒さにも堪え得る身體をもつた國民は無いから、日本人は外國に負けない勢力で働かねばならない。南洋にもサイベリヤにも多くの寶がある。それを外國人にとられて、負けをとるやうな弱いことではならない。日本魂の動き行くところには

必ず大勝利があるとの確信を以つて、何處へも出かけて、寶をつくらねばならぬ。そして日本人がどんなに增えても、皆元氣よく平和に食べて行くことが出來、學問工藝をどし〳〵進めて行かなければならない。

教授指針

地圖の準備落政時代の教育この不備なる平民のこと、間に寺小屋主は儒者を志あり、遠くかへる武士は師を求め學ぶ一般に學問を倡なりしことなどを語り、今日の少年少女が得た教育及び立身の自由の幸福と比較させる

孝行

近江聖人の幼時と立身

近江聖人、姓は中江、幼名は藤太郎とよばれ、慶長三年江州高島郡小河村に產れた。

藤太郎の祖父さんは、伊豫國大洲の城主加藤遠江守泰興にお仕へして居られた。藤太郎のお父さんは、國の方で農業をしながら、ひまひまに本を讀まれて居た。ところが藤太郎が七十八歲の折、お父さんは亡くなられたから、お母さんは藤太郎を祖父さんの處へ學問に送つて自分一人故郷に殘られた。それは藤太郎が、九歲の折であつた。家を出る時、お母さんは、

「藤太郎や、お前は祖父樣の敎へをよく守つて、立派な人にならなければならないのよ。學問が上達しないで中途で歸つて來ることがあつたら、お母さんは會ひませんから、女々しい考を起さないでお出でよ」といはれた、

故郷を遠く隔つる大洲に行つた藤太郎は、祖父さんのところで養育されては居たものゝ、お母さんのことが毎日思はれてならなかつた。そして心掛のよい藤太郎は、人々に秀でゝ學問が上達した。その頃の少年は武藝を學ばねばならなかつたが、藤太郎は武藝に於ても人に長じて居た。

或る日、同じ年頃の少年達と庭に出て遊んで居ると、家から祖父さんが、「藤太郎々々々」と呼ばれるので、「ハイ」と答へて祖父さんのところへ行つて手をついた。机の前に坐つて居られた祖父さんは、此方を向いて、

「お前のお母さんから手紙が來たよ」といつて手に一封の手紙を持つて居られた。

藤太郎は胸をどきつかせて、

「お母さんは御達者ですか？」と尋ねた。

「ああ御達者ださうだ。そしてお前が學問武藝を勵むで居るかと尋ねて被居る、祖父さんがその手紙を讀んであげるから、聞いてお出でよ！」

藤太郎は疊に手をついて祖父さんの讀みあげられるのを聞いて居た。

「おひ〳〵寒さに相向ひ候處、皆さまには御機嫌美はしく被居候哉、御伺ひ申上まゐらせ候御蔭樣にて藤太郎も學問武藝日に增し上達のこと、陰ながら樂しみ居り候。若し御教訓に從ひ申さずば、嚴しき御折檻御加へ被下度、學ならずして、藤太郎が中途に歸り來るやうのこ

と有之候ひても、母は決して相達申さず候へば、その儀何卒藤太郎へよくお傳への上、女々しき振舞ありて、武士の名を汚すことのなきやう、一重にお願ひ上まゐらせ候。藤太郎の父亡くなつてより、寂びしさわび住ひに、只々案ずるは、藤太郎の行末にて、父祖に耻づかしからぬやう名をあげ、身を立てるやう、一向祈りあげまゐらせ候。下つて私こと、何事もなく日を暮し居り候へば御安心下され度、只寒さに向ひ候ことゝて、馴れぬ水仕事に、先頃よりあかぎれ輝とか申すものゝ手にも足にも出來て霜の朝、風の夕にはいたく身にしみ候、されど……」

疊に手をついて聞いて居た藤太郎は、涙をハラ〳〵流して、居たが、祖父が手紙をよみ終ると、涙をおし拭うて、

「祖父さま、私はお母さんの手傳ひをしたう御坐いますから國にかへして下さい」とお願ひした。

祖父さんは、嚴かに、

「お前が聞いたやうに、お前のお母さんは、お前が立身する迄は決して歸つて來てはならぬと被仰つて居るではないか？そんな女々しい考を起してはいけない」といつて許して下さらなかつた。

當時基督教が天草を本陣として幕府に對せしこと、德川幕府が基督教を排斥せしことを宗教的偏見に捉はれず史實としてよく語りきかせ

それでも、また小さい藤太郎は母に會ひたくて堪らなかつた。特にお母さんに輝が出來て難儀して居られることを思ふと、悲しくなつて、どうかして輝の藥を求めて國に歸りたいと思ふやうになつた。下男や下女に、何處にか輝の藥はないかと尋ねて見たけれども誰も知らなかつた。漸く水汲む男に尋ねあて「新谷といふ處に中田長閑齋といふ老人がありまして、その人が輝の妙藥を持つて居られるといふことですが、その人は切支丹宗門の人で、お上から詮議されて居られるとかで、藥は人にやらない相ですよ」とその男は敎へてくれた。藤太郎は如何にもして、その老人に會つて、藥を貰はうと決心し、明くる日早く起き、新谷をさして出た。

新谷まで六里の道を尋ね尋ね歩いて行つて、長閑齋の邸へ行くと、上から武士が生どりに來るといふことで、村の百姓が竹槍をもつて待伏せして居たし、また甲冑をつけた家臣が邸を守つて居たので、いたく心にまどうたが、決心してッカッカと門まで進んで行つて、長閑齋にお目にかゝりたいというた。玄關に居た長閑齋は、門前に武士の子が來て居るのを見て、何事かと呼びよせた。

藤太郎は前に進んで行儀よく、地に跪き、母のために輝の妙藥を頂きたいため大洲から來た藤太郎であることを告げた。

老人は藤太郎の孝行に感心して、家臣に命じて、匱の中から取り出させ、それを藤太郎に渡した。藤太郎は嬉しくてならず、よくお辭儀をして勇ましく、そこを立去つたが、後から長閑齋の使だといふ男が走つて來て、

「早く此の地をお立去りなされ。際どると危いですから」と告げて呉れた。

藤太郎は長閑齋のやうに、善い人が何故捉はれなくてはならないかと不思議に思つて、北條山にのぼり、そこから中田の邸を見おろすと、早その一家は海邊に落ちて行く船にのつて居られた。それは肥前の天草指して落ちて行かれるのであつた。

藤太郎は一日も早く、此の妙藥を母上にまゐらせむと大切に懷に收め、母住む里へと出立した。もとより携へる金もあつたので、或る驛で宿を求めたけれども、泊めてくれず、疲れてたふれるまで歩みつゞけたが、足は痛み腹は空になり、夜は寒くなつて來た。路傍の石に腰掛けて、苦しい息をついて居ると、つひそのまゝ睡氣がさして來た。

すると子供の名を呼ぶ母親の聲がしたので、パッと目が醒めると、何處かの母親が自分の側に立つて居て、

「お前樣はどうしてこんな處に居られるのか」と尋ねたから、藤太郎は、

「大洲から發つて、江州の母上のもとに輝の藥を持つて歸るところです」と答へた。

「今晩はどこに宿られのるです？」と尋ねられたので、「宿は拒まれましたから、こゝに眠つて居ました」と答へた。

その母親は大變氣の毒がつて、藤太郎を家につれ行き暖かにして泊らせた。藤太郎は行儀よくねて、明くる日早く起き、深くお禮をのべて立去らうとしたが、その母親は藤太郎の孝心に感じて、旅の費用に、「これを持つてお出でなさい」とて金の包みをさし出した。藤太郎は幾度も辭はつたが、是非持つて行けと奬められるので、厚くお禮をいうて頂いた。

それからまた一日歩いて松山の城下に一夜泊り、松山から今治の港に着き、船にのつて兵庫に渡り、遠い路をスタ〳〵歩いて、山一つ越ゆれば、間も無く、自分の故郷に着くといふところまで辿りついた。夜が更けない內に此の山を越さうと思つて元氣を出し、山路にかゝつたが、日は暮れ、雪は深くて、物凄く、足も手も凍えて泣きたくなつて來た。藤太郎は遂に氣が遠くなつて何が何やら分らなくなつた。

若し助ける人が無かつたら、雪に埋れて死んで居たかも知れない。ところが山に辻堂があつてそこに住む僧が黑犬を飼つて、峠を越す旅人の雪にたふれたのを探させて居た。折よくも、その犬が今雪にたふれて居た藤太郎を見出し、辻堂にかへつて哮えるので、僧が犬について出て見ると、武士の子がたふれて居た。だから僧は抱きかゝへて辻堂にかへり、火をた

いて暖めてやつた。

藤太郎は漸く氣がはつきりして眼をさますと、思はぬところに助け出されて居たので、不思議な氣がするやら嬉しいやら。僧のすゝむる粥をすゝつて、お暇しようとすると、「夜があけてお發ちなされ」といつて僧がすゝめる。

「もう小河村も近いから早く歸りたいと思ひます」とて藤太郎は犬にお供されて出立した。山を下ると犬をかへしてやり、足もいそ〳〵進んで行くと、夜は明けはなれて、自分の村に久しぶり歸つて來た。

門を入ると、井端に水汲む音がして居たので、見れば母上である。藤太郎は側に走つて行つて、「お母さま歸つてまゐりました」嬉しさにせき込んだ。

母は吃驚して見ると、藤太郎である。

「何のため、歸つた來たのです」と母は落ついて藤太郎の樣子を見られた。

「お母樣が、輝で難儀して被居るといふことでしたから、輝の藥を持つて歸つて來ました」と藤太郎は涙を流して云へば、母親の胸も熱い涙で一ぱいになつたが、强ひて涙をおさへて、「學問中途で歸つて來ても、お母さんは會つてあげないといつてあげたのは忘れてしまつたか？」と嚴しくいはれた。

「お母樣御免下さい」と藤太郎は、聲をふるはしてむせかへりながら、そこに跪いた。

母は、遠く慕つてわざ〳〵歸つて來た藤太郎が、今自分の前に罪をあやまつて泣いて居ると、可愛想で可愛想で、心も亂れむばかりであつたが、日頃敎へさとして居たそのことを水の泡にしてはいけないと思つて、胸の涙をおさへ、

「祖父樣には何と申上て歸つて來ました」

「默つて歸つて來ました」と藤太郎は包まず答へた。

「あれ程云つて置いたのに、何といふ意氣地のない武士でせう。そんなことでは身を立てることが出來ません。これから、また直ぐ伊豫に一人でお歸りなさい。お母さんはもう會ひませぬ」

「はい。お母樣まゐります」と藤太郎はすゝりなきしながら、「輝の藥をもつてまゐりましたからこれだけはとつて下さい」とて、大切に持ち歸つた輝藥を差出した。

母はそれを受けて、家に入り、また出て來て、「これは輝の藥の代にあげるから、歸りの旅費にしてお出で」とて幾何かの金を與へられた。

藤太郎は、「いりませんから、それで水仕事の下女を雇つて下さい」とておしかへした。

流石の母親も胸に迫つて涙を落しながら、

「それを持つて早くお戻り！」と云ひつけた。

藤太郎は涙を呑みながら、それをおし頂いて、また旅の途に出た。

母はそこらまで見送つて下さつて、久しく立とまつて藤太郎を見て居られた。藤太郎はふり返へて見る毎に、涙がハラ〳〵出て、堪らなかつたが、もう何時の間にか母上の姿も見えなくなつた。人目無いところで、また一しきり聲をあげて泣きながら歩いて居たが、思ひ返へして、勇氣を出し、母上の言葉に感じて、これからは、もつと雄々しく奮勵して立身しなければならないと心を強めた。

○

母を思ふ心に勵まされて大洲に歸つた藤太郎は、日夜奮勵して、その樣子が他の兒童にずつと違つて居た。その翌年十一歳の折、藤太郎は大學といふ書物を讀んで大變感じ、自分も聖人にならうといふ志をたてて、聖人の書かれた書物を切りに讀んだ。

その頃の少年は專ら武術の稽古ばかりして、學問に心をひそむる者がなかつたばかりか、學者といへば江戸に幾人かある位で、藤太郎は師に就て學問することが出來なかつた。

藤太郎が十七歳の時、京都から、大洲に一僧侶が來た。その時分學問といへば、僧侶しかしないといふ有樣だつた。藤太郎はこの僧侶に就て論語といふ聖人の書を學び、大變に感心し、それから後は自分一人で勉強をした。けれども一冊の本を求むるにも、今日のやうに手易く得ることが出來なくて、方々に尋ね廻らねばならなかつた。

斯うして勉強した藤太郎は、いろ〳〵なことを知るばかりではなく、善なりと知つて居ることは必ず實行した。何一つとして間違つたことをしなかつた。だから年二十になつた時には、その人物といひ、學問といひ大洲城中、藤太郎に及ぶものはないやうになつた。

城主は、藤太郎の才學衆に秀でゝ居るのを見て、百石の祿を賜ふて、經書の講義を聞かれることになり、それから藤太郎は藤樹先生とよばれるやうになつて、誰でもその學問に感心し、その德行に敬服しない人はなかつた。

これ程立身したけれども、小さな時に別れたお母さんを思うて、暫らくも忘れることが出來ないので、母上をよんで孝養を盡さうと思ひ、幾度も手紙を出したが、母上は國を出ることがいやだといはれるので、食祿の半分程を母上に送つて居た。

然し藤樹は、永く母と離れて住むのを心苦しく思ひ、城主に屢々そのことを申し上げて、暇を貰はうとしたけれども、城主は藤樹を歸んすことを惜んで許されなかつた。

だから藤樹は、暫らくの隙を戴いて、故郷にかへり、母上を大洲に供ひ行かうと說いたけれども、母は依然故郷を出ることを好まないで從はなかつたから、仕方無く大洲に一人で

歸つた。その後また城主に情を陳べて故郷に歸り孝養を盡さむことを許されるやう願つたけれども、これまた許されなかつた。

その後、永い間自分を敎へ育てゝ呉れた祖父さんが亡くなられたので、藤樹は母を思ふ心益々深くなり、二十七の歳、家具一切を賣り、その年城主に頂いた俸祿をおかへしするため米穀を家に積み、一書を殘して二姓に仕へざることを誓つて大洲城を出た。

國に歸つた藤樹は、何處の城主から聘を受けても行かず、母に孝養を盡すため、刀劍調度も皆賣り拂ひ、それで田地を買うて、自ら田を耕し、農業の餘暇、近隣の人々を集めて道を敎へて居られた。するとその敎化は方々に擴がり、先生の德を慕つて四方から人が集まつて來た。

立身出世するに必ずしも學校に學ぶこと必要なし、その志一つで丁稚をしつゝも必ず立身して途方學問は書物の事、上學問は實世間を知つて實世間を行きぬいて行く智慧を養

炭屋の雇人から百萬長者

光村彌兵衛は、文政十年五月、周防の國熊毛郡光井村の農家に產れました。小さい時から人と違つて思ひきりがよく、一度思ひ立つたらば、どんなことがあつても、吃つかずに、一生懸命、頭も身體も動かして働く、すばやい男であつた。

十二三歳の頃であつた。彼は自分の家が貧乏なのを氣にして、「自分はこれから商人になつて、立派に家を興してやらう」と思ひ立ち、父にその事を話して、初めは他家の丁稚に雇はれて働いて居たが、商賣のことがよく、のみこめると、今度は自分で貯へた少しばかりの金に、多少の借錢を加へて、肥料商をやつて見たが、思ひにまかせず、今度は資本をつくつて、製鹽業を營んだが、これにもまた失敗してしまつた。

ふことの大切なるを以つて主眼とする

然し、幾度失敗しても、少しも志を屈しないで、「男たるものが、二度や三度の失敗で、消氣こんで志をまげるやうなことで何にならう。七轉び八起きだ。もつと〳〵やつて見よう」彌兵衛は、二十六の時志を決し立身して孝養を盡さむものをと鄕里を出で、その頃江戸の親戚を尋ねて參りました。江戸へ來てからの彼は、決して安閑とはして居ませんでした。彼は、親戚に身を寄せてる中にも、少しばかりの資本で、或る行商を初めました。その後彌兵衛は獨立して、雜貨商と、土木業を開店いたしました。

其頃、世間に「このごろ、伊豆の下田に於て、外國との通商が許可される」と云ふ噂さがあつたのを聞いて、

德川末に於ける外國との關係を明かにする

「これはこんな所でグズ〳〵しては居られない。天が此度俺に一大飛躍を與へてくれるのだ」と、心の中で叫びながら、開店した許りの店を疊んで、早速、下田へと出かけて參りました。ところが、互市場は下田ではなく、横濱に定められたので、彌兵衛は此度は横濱に引返へして參りました。そして彼は或る時期を待つために、薪炭商の雇人に住み込み誠實に働

いて、僅かの間に六貫文を得ました。

そのころ或人から「芋を賣つてはくれまいか」と、たのまれましたので、其利得の多い事を知つて、早速芋賣りに變化しました。そして三日の中に、十貫文を儲けました。彼はその中にも何うかして、外國人と直取引をしたいと心に思つて居ましたが、さつぱり案内がわからぬので、空しく時日のたつてゆくのを、非常に殘念に思ひました。

處が、ある支那商人に傳手を得て、馬鈴薯の注文を受けました。それが爲に可成りの利益を得ましたが、まだ〳〵此位の事では彼は承知しませんでした。そのころ、軍艦の賣込みは大變利益があると云ふ噂を聞いて居りましたが、中々その手蔓がありませんでした。

其後、彼に取つては天の助けとも云ふ可きものは、ある佛國の宣教師が、過つて水に溺れるところを救つた事でございました。それからと云ふものは、その宣教師の周旋で、佛國軍艦に入り込む傳手を得て、やうやく軍艦賣込商を營む事が出來ました。そして僅か一二年間に、三四百圓の利益を得ました。その間彌兵衛は堅忍不拔の精神と、誠實とを以て、數年の間奮闘いたしましたから、外國人にも非常に信用を得る樣になり、從つて巨萬の財產を作る事が出來ました。

彌兵衛は、其後三十九才の慶應元年には、兩替店を開きました。明治元年に、神戸が開港場となるに及んで、機敏な彼は横濱を去つて、神戸に參りました。

勞働の間に勤學の功

そして、海岸通りのある家を借りて、雜貨商を營みました。以前外國人に關係のあるところから、直接外國人から雜貨を仕入れる事が出來、それを本邦人に賣りましたから、非常の繁昌を來たしました。その上彼は佛語や英語が、ぺろ〳〵喋舌れる樣になつて居ましたからいろ〳〵の利益がありました。

其後、彼は神戸でも有名の人物となり、政府から海岸一帶の取締りを命ぜられ、帶刀御免迄になりました。そして運送業を兼ねて、諸國諸藩の用達をも務めました。

當時、何人でも外國船に乘込む免狀を得んとするものは、みな彌兵衛の保證を受けねばなりませんでした。また、それ等から得る手數料は莫大の額に上りました。後、政府が官通商司を置くに當り、狩野治郎右衛門を東京の取締りに、岸田吟香を横濱に、光村彌兵衛を神戸大阪の取締役に選定されました。

これより彌兵衛は、阪神間の外國貿易の、主權を一手に握る事が出來たのでありました。

彌兵衛が之れ迄になるには、日夜志を堅固に持ち、凡ゆる千辛萬苦を物ともせず、奮闘努力したお蔭で、彼は明治の實業界に、非常な貢獻をなしたのであります。斯くて彼が衰へ果てた家を興して大富豪にしたのは、彼に大なる孝心があつたからです。

教授指針

この詩は勿論教訓的に兄弟の情愛を説いたものではない。あどけない娘亡き妹弟を矢張生き生きと居て居ると信じて居る可憐な情、母親と兄弟たちまつはるこの生活の様を美しく描いたものであるが、あまり説法がましい教訓よりは、こうした情味の方はたつて反つて心を動かすものである。

兄弟

吾等は七人（英国詩人ウオーヅオス作）

私はとあるあばら屋の娘に遭ひました。
いくつだと尋ねると娘は八歳だと答へました。
髪がこゆくてきれいだつた。
それをくるくると束ねて居た。

その娘は何のかざりもなく、
野育ちの可愛いゝ兒、
その眼はほんとにきれいだつた。
いぢらしい程可愛かつた。

嬢ちやん嬢ちやん、
お前は兄弟が何人？

何人ですつて？七人ですわ！
娘はさういつて不思議相にして居た。

その兄弟は何處に居る？
二人は家にお留守だわ、
二人は海に行つて居ます、
私の兄弟は七つです！

外の二人はお墓の中よ！
お墓には妹と弟が居るわ！
私の家はお寺のよこで、
母ちやんは家にねらつしやる。

何だつて、二人は家に居て、
また二人は海に居るつて、

それでも矢張七人なの？
どうしてそれが七人なの？

すると娘が答へていふやう、
私共は七人の兄弟だわ、
その中二人はお墓の中よ！
お寺の墓場の木の下に居てよ！

嬢ちやんお前はよく走るのね、
生きて居るから駈けられるのね、
二人は墓場に居つたなら、
兄弟は五人ではないのかね？

でもねお墓は草が青々(あをぐ)で、
石がちやんと立つてます。

うちの家から直ぐそこに、
二人はちやんと並んで居ます。

わたしはそこで編物と、
またぬひものをよくします。
またその上に腰かけて、
歌をうたつてきかせます。

また夕方になつてから、
空がきれいになる時に、
私はお椀をもつていて、
そこで御飯(ごはん)をたべますよ。

さつきに死んだのは妹で、
ね床の中でうめいてゐましたが、

あとではいたみが消えていて、
静かにあつちへ行きました。

だから墓場にうめられて、
草葉の露が消えた時、
私とヂョンと二人して、
お墓のまはりで遊ぶのよ。

雪が眞白に降る時に、
私がすべつて出て行くと、
ヂョンも走つてついて來て、
お墓のそばにころびます。

ねえ、嬢さん、二人が天に居るならば、
あなたの兄弟は何人なの？

あら叔父さん七人ですといつてるのに、
娘はすかさず答へていうた。

「でも二人は死んで居る。
二人の靈は天にある。」
と私がいつても動かずに、
矢張七人だといひはつた。

國士の友愛

徳川時代と今日との文明の差異を明かにする

明治維新の前には、徳川幕府が天下の政をして居た。徳川幕府は外國との交際を禁じて、國に事の起らないやうに用心して居たが、幕府の末代になると、今迄日本に來なかつた米國や英國や露國の軍艦が切りに日本に來て交際を求めた。その時の人は外國が日本を攻めとるために來るのだと思つて騒いだ。西洋人は日本人が見たことの無い大きな軍艦に乗つて來るのであつた。それに西洋の文明は大變日本の文明よりも進んで居たので、日本人が騒ぎ立てたのも無理はない。

その時、尊王愛國の偉人は、日本の文明をもつと盛んにしなければならぬ、また國防を嚴

重にしなければならぬと說き立てた。さういふ人々の熱心な精神は、とう〳〵幕府の政治を、天皇樣にお返へしゝて、明治大正の今日のやうな世界一等の國に日本を進歩させた。幕府の末に起つたそれ等の偉人の中、一番年が若くて偉らかつた人は、長州の吉田松陰先生であつた。

先生は本當の日本魂を有つた豪傑であり、學者で、日本を西洋以上に進歩させようと思はれ、一時外國に行つて學問をして來ようと思はれた。その頃は今日のやうな學問がなかつたばかりか、日本には汽車も汽船もなかつた。アメリカ人が初めて汽車のヒナガタを持つて來て、小さなレールを敷いて、そのヒナガタの汽車を走らして見せたことがあつたが、その走り行くのが非常に早いので、其の時分の官吏達は皆吃驚して居た。或る官吏はそのヒナガタの汽車に馬のりに乘つかつて見たらエライ勢で汽車が走り出すのでガタ〳〵顫えて居たといふことである。

その位なことであつたら、松陰先生が眞先に西洋に行つて、學問をして來ようと思はれたことは大變に日本のためになることであつた。けれども德川幕府は、日本人が西洋に行くことを嚴禁して居た。若しそんな人があつたら、幕府はそれを捉へて獄に入れたり、殺したりするのであつた。

伊藤公爵が日本憲法編成をされた功勞を語る

安政元年十二月野山の獄中より（二十五歳の折）この手紙は謄寫版ですつて生徒に講讀させるがよい。

然しそのまゝにして居れば、日本はいつまでも進歩しないで、外國人にあなどられるから松陰先生は意を決して、米國に往かうとし、一夜下田港に淀泊して居たペルリの軍艦に一漁舟をあやつつて、辛くもたどり行き、艦長に說いて、米國に連れ行かれることを求めたけれども、艦長は日本幕府との違約になるからとて連れて行かなかつた。

斯ういふ立派な志があつたにも關らず、松陰先生は遂に捉はれて獄に投ぜられた。それは二十五歳の時であつた。明くる年松陰先生は獄を出て、故郷に松下村塾を開き、弟子を敎へて非常な感化を與へられた。あの有名な伊藤公爵は、その松陰先生の弟子であつた。

けれども先生は餘りに忠君愛國の心が强かつたので、危險な人物だと思はれ、また獄に投ぜられ、ついで死刑に處せられた。先生は年三十でなくなられたけれども、先生の精神はその時分の、志ある天下の士の精神に燃えついて、遂に先生が思つて居られた通り、明治維新となり、明治大正の開けた世の中になつたのです。

先生はそんなに偉い人であつたが、また父母には孝に、人々には思ひやりが深かつた。先生が獄中から妹に送られた手紙に斯ういふのがある。一度讀んで聞かせますからよく聞いて居て下さい。

「十一月廿七日と日つけ御座候御手紙並九年母、みかん、かつをぶしとも昨晩相とゞきかこ

ひ内はともしびくらく候へ共、大がい相わかり候まゝ、そもじの心の中をさつしやり、なみだが出でやみかね夜着をかぶりてふせり候へ共、いよ〳〵涙にむせび、つひに夫なりに寢入候へ共、まなく目がさめ、よもすがら寢入り不申、色々なる事思ひ出し申候。そもじや父母様や、兄様の御かげにて、きものもあたゝかに袷物もゆたかにあまつさへ、筆紙書物まで何一つふそくこれなく、寒さにもまけ不申候間御安心可被成、そもじ御家おばさまも御なくなりなされ候事なれば、そもじ萬たんお心懸候はでは相すまぬ事、ことにおぢさまも年まし御よわい高く被爲成事ゆゑ、別して御孝養を盡したべかし。又萬子も日々ふとり可申候得ば心を用ゐてそだて候へ。赤穴のばあさまは御まめに候哉御老人の御事萬事氣をつけて上げ候へ。かゝる御老人は家の重寶と申ものにて金にも玉にもかへらるゝものに無之事、そもじ事はいとけなき折より心得よろしきものとおもひ、一しほ親しく思ひしが、此ほど御文拜しいらざる事まで申遣し候なり。

別にくだらぬ事三四まいしたゝめつかはし候間、おとゝさまか梅兄様に讀よき様に寫しもらひ、少しは心得の種にもなり可申候。扨御たよりの中にも手習よみものなどは心がけ候へ。正月には一日はやぶ入り出來可申哉あに様の御休日をえらび參り候て心得になる噺ども聞候へ。拙者其日分り候はゞ昔噺しなりとも認め遣し可申、又正月にはいつくもつまらぬ遊び事をすることに候間、それより何か心得になるほんなりとも、讀でもらひ候へ。貝原先生の大和俗訓、家道訓などは丸き耳にもよく聞ゆるものに候。又淨瑠璃ほんなども心得ありて聞き候へば隨分役にたつものに候。扨又別に認めたる文に付うたをよみ候。こゝにしるし侍りぬ。

頼母しや誠の心通ふらん文見ぬさきに君を思ひて

右したゝめたるは、そもじを思ひ候より筆をとりぬるが其夜そもじの文の到來せしは定めて誠の心文より先に參りたる哉とたのもしくぞんじ候まゝかくよみたり。」

同書狀に附したる別紙の文面は略す。

これは讀んで聞かせる。修身教授の材料としては、子供がその兄弟に送つた手紙や、父母がその子供に送つた手紙などから好材料を選んで讀むこと。聞かせる方法で兒童の心を動かす方法である。

妹の手紙

佛蘭西の或る飛行隊の一兵士は左の手紙を妹から貰つた。

「兄さん。私共はシャアル兄さんと、リユシアン兄さんが去る八月二十八日に名譽の戰死をされたといふ知らせを受けました。ユージエニィ兄さんは大變重傷を受けなすつたといふことであります。ルイ兄さんと、ジャン兄さんは、もう疾くに戰死されたので御座います。ローズ兄さんは行方が分りません。

お母さんは泣いて居ます。そしてあなたが一番丈夫なんだから、どうか兄さん達の仇をうつて下さるやうにと毎日々々口ぐせのやうに仰しやるんですよ。

お願ひをしたら、隊長さんだつて許して下さらないことはありますまい。ジャン兄さんは

勳章を貰ひました。あなたもまけないやうにジャンさんをお手本にして下さいませ。獨逸は私共の家から、何でもかでも奪ひとつてしまひました。十一人の兄弟が戰爭に出て、八人まで名譽の戰死を遂げました。どうぞ、お兄さん、あなたの戰務をおつくし下さい。只これだけのお願ひで御座います。

神樣があなたに命を與へて下さいました。だから神樣には、あなたから生命をおとり上げになる權利がおありになると、母さんは仰つしやるんです。

またお兄さんにお目にかゝりたいのは山々で御座いますけれども、私共は心から只々お兄さんの武運を祈ります。プロシャ人は此處へも來ました。ジャンドンの息子は殺されました。プロシャ人は何も彼も分捕するんです。私はジェルブィエに歸つて來ましたが、町はすつかり荒れ果てゝ空虛になつて居ます。まあ何といふ卑怯なことでせう。

お兄さん！　勇ましく、あなたの命を犧牲にして下さい。私はまたあなたに會はれるやうな氣がします。

私共は心から、あなたの武運を祈ります。さよなら。若し神樣がお許し下さるならば再びお目にかゝります。

千九百十四年九月四日　モイレイにて　あなたの妹たちから

信長が、安土にゐた頃の天下の大勢を先づ示すべし

なつかしいお兄樣

フランスのためです。私どものためです。

あなたの兄弟のことを思つて下さい。七十になる祖父さんを思つて下さいませ。」

佛蘭西のエルネルス、ライヴィッス博士は、此の手紙を見て、

「佛蘭西魂の尊いことをしらべるには、これが一番先に大切である」と學者仲間にいはれたさうです。

阿能局

阿能局は丹波の人後藤六郎太夫の妹であつた。

ところが兄の六郎太夫は、信長の敵福井主水の御恩をうけて居たが、主水が死ぬる時、六郎太夫に信長を殺してくれと賴んだ。主水は信長を殺す理由があつたのである。六郎太夫は主人の遺言にそむきかねて、信長を殺さうと思つて、或る夜信長の邸に忍び入り、その寢室に入り、刀を拔いて、夜具の上から刺し通した。けれども信長はそこに寢て居なかつたので、六郎太夫は遂に信長の家臣に捉へられ、獄にひかされて行つたが、途中自分の舌をかみ切つて死んだ。

市中（安土）

信長はその屍を市中に晒し、この男の名を知らしてくれた者には褒美を與へようと令れた。けれども誰も知つて居る者がなかつた。阿能局は、もしか自分の兄ではあるまいかと思つて、安土に行つて見たらば、果して自分の兄であつた。「これは自分の兄だ」といへば、その妹なる彼女も殺されるか獄に入れられるかに定つて居る。

けれども兄を愛して居た彼女は何で嘘をいふことが出來よう。局は兄の屍に取りついて、

「これは私の兄後藤六郎太夫と申すもので御座います。兄さんは、お母さんに大變孝行で、友人のためには身を忘れて勇み立つ義心の堅い武士でした。こんな有様をして死に、世間に恥を晒して居ますが、決して恥かしい武士ではありませんでした」と泣いて云うた。

そこに立つて居た守吏は、局を捉へて、

「どうしたわけだ？」と尋ねましたけれども、局は、「信長公にまみえなければ、そのわけを申しませぬ！」といつて少しも騒がなかつた。

だから城中に引入れられ、信長の面前に出された。信長は、

「汝の兄は何故に吾を殺さうとしたのであるか？」と尋ねられた。すると局は落ついて、

「兄の友に福井主水といふ方がありまして、貧しい中に育ちました兄の人となりを見ぬき、厚く恵んで、私共母子三人を安々と生活させ、兄を立身させて下すつたので御座います。兄

信長を殺した明智光秀は基督教徒だつた信長とは仲が惡かつたしま

はその御恩に感じ、主水殿にかはりて主水殿の仇なる、あなた様を殺さうと誓つて居たのでとが出來ませんで、今日まで躊躇して居ました。その中に、主水殿は兄を疑つて、大變殘念がつて死くなられました。よし主水殿は亡くなられても、武士たる私の兄は兼ての誓ひを破ることが出來ませず、先頃母もなくなりまして、後に殘る心配がなくなりましたので、友のため義のため、あなた様を殺さうとしたので御座います。兄は決して惡い精神の武士ではありませぬ。義に勇む天晴な武士で御座います。兄はたとへこゝに晒されましても、決して恥しい者では御座いませぬ。私はその妹で、あなた様を殺さうとした者と同じ心の妹ですから、さあ、どうぞ私の頭を落して下さいまし」と雄々しく申しのべた。それを聞いて居た人々は、優しい妹の心掛けに感じて泣かない者はなかつた。

信長もいたく感心して、

「お前達兄妹は、實に立派な天下の義人だ。天下の政をする吾は、さういふ立派な義人を殺すわけにはいかない。兄六郎殿は死なれたから、何とも仕方はないが、お前は死なゝいで、兄の面目をあげなくてはならない。お前の兄は、お前あつて初めて其の義名を後世に殘すのであるから、お前の手柄は貴いのである。私はお前の兄の罪を許してあげる。そして立派な

葬式をしてあげる」といはれた。それから信長は阿能局を奥に召しつかつたが、元より常並の婦人ではなかつたので、總女中の頭となりよく信長にお仕へした。

その後信長が本能寺で、敵手に攻められた時には、局もそこに居たので、薙刀をふるつて敵を薙たふし、遂に信長の殺されたことを知ると、自分も眞先に自殺をしたのである。

教授指針

光秀は人を助ける爲母を人質にやつたが、遂に母が殺されなくてはならなくなつたので個人としても信長をうらんで居た。

德川時代に外交を禁ぜしぜ理由、鎖國主義より來りし日本の非進化、海外發展の不振を語りきかせる。

思想家と實業家とが居て國家が開けること、商賣は錢をもうけるためばかりでなく、外國の事情を國に知せることが出來る事を念頭に有たなければならぬ。

進取

錢屋五兵衛

六十年前迄日本は尊王攘夷を稱へて、外國人は皆日本の敵で、日本を亡ぼすものだと考へて居た。その時分に、「いや日本は外國と交際して新らしい學問をしなければならぬ。又外國と貿易して國益を計らねばならぬ」と主張して居た人は、皆殺されたり苦しめられたりした。其の中でも有名なのは、あの吉田松陰先生であつて、先生は其時分まだ若い人だつたが、國論を排して、外國と親密な交際をしなければならぬと主張されて居た。其爲に先生は獄に投ぜられて死なれた。松陰先生のやうに學問は無かつたが、それより少し前、外國と貿易をして、日本の道開きをした人に錢屋五兵衛といふ人がある。松陰先生は、學者であつたが、五兵衛は船乘りの親爺で、非常な豪傑であつた。先生は思想家で、五兵衛は實行家であつた。

その時分天下の士は皆鎖國攘夷を唱へて居たが、とう〳〵松陰先生や、五兵衛たちの考へて居た通りになつて、明治維新となつて、それからずん〳〵日本は開けて來て、今日では世界の最強國となつた。

どんなことでも、非常に國のためになることを初めて云ひ出したり、行つたりする人は國中から苦しめられることがある。特に昔はそれが甚だしかつた。私共が今日の自由な生活が出來るといふのは、さういふ昔の人が苦んで下さつたり、血を流して下さつたりした賜であります。だから私共はその恩に感じて、これから益々國のために働く人にならなければなりません。そのために私共が大變苦しいことがあつても、その苦しいことは、後の世の若い人々に非常に偉大な力を與へることが出來るのです。

今日は錢屋五兵衛のお話をして、この人がどれ程、私共のためになつた人であるかを皆さんに考へて頂きたいと思ひます。

○

五兵衛の先祖は、加賀の能美郡清水村で農業をして居ました。七代目になつて、宮の腰といふところに移轉して、清水屋といふ屋號で兩替業を始めました。けれども兩替屋だつたので、土地の人は錢屋々々といつて居ました。錢屋は養子を貰つた後に子供が出來たので、そ

の子供が大きくなると財産を分けてやつて回航業を開かせた。錢屋五兵衛はその孫だつたのであります。

五兵衛は十四歳の頃、加賀藩で一番大金持の木谷（きたに）といふ商店に丁稚奉公をしました。皆さん、五兵衛は大變ふらい豪傑になりましたが、學校にいつて勉强したのではなく、大學者の弟子になつたのではなくて丁稚になつたのです。學校に行つたからとて人は必ずしもエラクなるものではありません。貧乏で學校に行かれなくても、すぐれた心掛と勇氣さへあつて、大膽に働けば、きつとエラクなるのです。今日日本の大富豪でも大抵は學問をしなかつた人ですが、その學問をしなかつた人が、反つて學問のある博士や學士を使つて居るのです。今は昔と時代が違つたとはいふものゝ、矢張、學校に行かなくても、自分で學問し、自分で進んで仕事をすればエラクなるのです。

五兵衛は十四歳から二十八歳になるまで、木谷に居つて一生懸命働きながら、海をわたる貿易事業をしようと始終考へて居ました。丁稚をして居た時分、大變人々から惡口をいはれた事がありましたが、默つて耐へて居て、今にエライ事をしようと何時も心掛て居ました。

然しその頃、徳川幕府は勿論、加賀藩でも回航業を禁示して居ました。だから船に物をのせて、遠い處に行つて商賣をして來るといふことが出來なかつたのです。國が開けるには商賣といふことは大變大切なものです。それは遠近の產物を交換するからといふばかりではなく、遠い處と近いところと交際をすると、知識が開けて來るからです。でもその頃は、遠い處と交際するのは惡いことのやうに考へて居たから、回航業を禁じて居たのです。

ところが、五兵衛が二十九歳の年、加賀藩では、今迄の嚴禁をといて、回航業を少しばかり許してやりました。五兵衛は大變喜んで、多年自分の思つて居たことを、今こそは實行して大きな手柄をしようと思ひました。

そこで船に米穀を積み込んで、北の方なる松前に行つて、そこに出來る干青魚（ほしにしん）と米とを代へて來て、干青魚を藩内で賣つたら大變な利益になるだらうと思つて打喜び、早速水夫四人をつれて、船に帆をあげました。

天氣はよし、風は穩かであつたので、今迄人が恐れて行くことの出來なかつた海の上を十日ばかり平氣に船を進めて、松前の港につくと、先方では大喜びで、米を買つてくれたので、今度は安い干青魚を澤山買ひ集めて、船につみ、無事宮の腰に歸つて來ました。すると、今迄こんなことをした者がなかつたので、五兵衛の評判は忽ち高まり、おまけに買つて來た干青魚は皆賣れ盡して大變金が儲かり、今迄丁稚をして居た五兵衛は、もう立派な實業家としての基礎が出來ました。

五兵衛は嬉しくてならなかつたが、此の位なことで滿足する男でなかつた。まだ人の行かない珍らしい處へ行つて貿易をして見たいとの考へで、盛んに船をつくり、日本の彼方此方へと廻つて商賣を續けました。その內に松前、函館、長崎に支店を出すやうになつて、商賣は益々繁昌し、日本國中の大商賣人たちと仲よく交際をするやうになりました。その中でも、京都の近江屋、萬屋、大阪の加賀屋などとは特に親しい取引をして居ました。

三宅島八丈島の位置を地圖にて示す。

それからだん〳〵商賣を擴めて、三宅島八丈島まで行くことになりました。三宅島八丈島は、遠いはなれ島だから、五兵衛が船に物を積んで行くと、皆なつかしがつて、買つてくれたので、金はずん〳〵と儲かるばかりであつた。

エトロフの位置を地圖にて示す。

それから五兵衛はずつと北の方なるエトロフの方へ船を進めて、そこの土民と貿易を初めた。土民との貿易であるから、もとより金をとるのではなく、土民の持つて居る珍品と、こつちから持つて行つた品物とをかへるのであつたが、土民は獸の皮や、香木、藥草、羽毛、貝殼など珍らしいものを持つて居たので、それと代へつこをして、それを國に持ち歸つて、よい値段で賣つて、また澤山の富をつくつて居ました。

或る時、五兵衛はまた船に品物を積んで、エトロフに赴いて居たが、日本を遠くはなれた海の上で、山のやうな大きな船が、その煙突から長蛇のやうなおそろしい煙を吐いて、はしつて來るのを見ました。

五兵衛達は今迄蒸氣船を見たことはなかつたのです。だから吃驚して見て居ると、その船がおそろしい速力で近よつて來ます。見れば船の上には今迄見たことの無い奇妙な大男が澤山乘つて居ます。暫らくすると、その船がとまつて合圖をすると、一艘のボートが浪の上につりおろされ、そこに鬼のやうな大男が四人乘つて此方にこいで來ます。「やつ、これは俺等を退治するのぢや。さあ逃げろ逃げろ」で五兵衛たちは、さつさと逃げて行きましたが、ボートは帆前船よりも早く矢のやうに近づいて來ましたので、仕方がないから組み合はうと思つて、身構へをして居ますと、やつて來た男達は、別に惡いことをする樣子でもなく、何か切りに言をいふけれども何をいつてるのやら分らない。だから手まね足まねをする彼等の樣子を見て居ると、「あの大きな船まで一寸來てくれ」といふのらしかつたので、五兵衛達は安心をして、行つて見ることにしました。

この大船は露西亞の船で、五兵衛達は初めて露西亞人を見たのですから、かく驚いたのも無理はないのです。その頃、露西亞の本國では、思ふやうに、五穀がとれないで、人民の暮しが苦しかつたので、南の方へとやつて來て、商賣をしたいといふのでしたが、日本は露西亞と貿易をしなかつたものです。

さて五兵衛は、露西亞人のボートにのつて、大船に行つて見ると、自分達の帆前船とはまるで、比べ物にならない程の大きな船で、船の中には、幾つも立派な部屋があり、大きな機械があり、そして船底には澤山な品物が積んでありました。見るものとして驚かされないものはありませんでした。

大船の船長は、惡人かと思つたら、それは感違ひで、深切な男であつたので、五兵衛の喜び一方ならず、早速思ひついて、この船に積んである品物と、自分の品物とを交換しようと相談を申込んだ。船長も大喜びで交換しようといふことになり、それからまた此の後とても時を定めて、この船の上で、こゝらあたりの海の上で、貿易をしようといふ約束が出來ました。

○

その後五兵衛は、松前に行くのだというて、幾度もエトロフ海上で露國の商船と密會し、澤山の利益を得て居たが、或る日朝鮮近海で大風に遭ひ、二千五百石積の太平丸は、大浪に弄ばれて、木の葉のやうに廻り、檣は折れ、艤は挫け、幾度か海の底に沈まうとした。五兵衛達はもう致方がないので、唯風のまに〳〵流れて居たが、或る島に流れついた。そこは人間の居ない離れ島で、何處も此處も竹ばかり生い茂つておそろしい處であつた。九死に一生を拾ひ出した五兵衛たちは匐ふ匐ふの態で、この島に上陸はしたものゝ、食ふものも無く、さて何うなることかと心配して居たら、嬉しや、或る日の事、大きな外國船が島の附近を通りかゝつた。

五兵衛達は大聲をあげて救ひを求めたが、船の方でもこれに氣づいて、錨をおろし、一艘のボートが下ろされて、こつちにやつて來ました。

見ればボートに乘つて居る者はあの露西亞人によく似た大男で、そのいふ言葉が少つとも分らない。

五兵衛は手を合せて助けてくれといつたが、西洋人は何を思つたのか、またボートにのつて本船の方へ歸つて行つた。何といふ情ないことだらうと歯がみして眺めて居ると、一度歸つたボートは、今度また一人の日本人をのせてやつて來た。

さあ、五兵衛達の喜びは一方ではない、ボートに乘つて來た日本人は、西洋人に使はれて居る者だつたから、五兵衛は難船したことを語ると、氣の毒がつて皆をボートに乘せて本船につれて行つた。

船中に居た日本人の話によると、此の船は米國の船であつたのである。船長は大變に優しい男で、五兵衛達に澤山の御馳走をして出した。永い間食べないで居た彼等は、舌づゝみ打

つて食べると、今度は「つかれて居ようから、休んだらよからう」とのことで、立派な夜具につゝまつてグウグウと久しぶりによくねむつた。

一夜グッスリ寢て夜が明けると、彼の日本人が來て、

「五兵衛さん、船長さんが御用ださうだから、疲れが收まつたら一寸行つておくんな」といひに來たので、五兵衛は何ごとかと思つて行つて見たら、船長は旨い茶を出すやら、菓子をすゝめるやらして、もつたいない程の叮嚀な挨拶をして、

「私共は神の惠みで、あなた達の命を救つてあげることが出來て、大變に嬉しいが、またこれをよい機會にして、あなた達と貿易をすることの出來るのが嬉しい。だから、どうぞ、これから、あの無人島を貿易場にして、毎年時日を定めて定期の貿易をするやうにして下さらないか」とのことであつた。

五兵衛は大變喜んで、それは兼々からの望みだといつて快く承知した。船長は躍りあがつて喜んだ。

それから何日か此の船にお邪魔をして、さて本國に歸らうといふ日には、船長が食べ物や品物を呉れたので、五兵衛は夢に夢みる嬉しい心地して宮の腰に歸つた。

その頃は勿論、日本の幕府は米國との貿易をも禁じて居たので、米國人と貿易するといふことは祕密にして居たが、約束の期日の來るのが待ち長く、やう〳〵その時が來ると、五兵衛は船にいろ〳〵なものを積み込んで、あの無人島にわたつて行くと、早くも米國の船は來て待つて居たのです。

竹島松島の位置を示す

斯うして米國人と幾度も貿易をして、その利益もまた仲々大きいものであつた。その無人島は朝鮮の東北に在る竹島か松島かといふことである。

○

斯うして、五兵衛は日本國中は勿論、露國人とも貿易をして、非常な繁昌をしたが、その位なことではまだ滿足しなかつた。五兵衛は遂に一般の小船で、アメリカまで航路をおしすゝめたのである。これは日本人が初めて舟にのつてアメリカに行つたのであつて、その大膽な手柄はコロムブスがアメリカを發見したのと同樣に、エライことだつたのです。それは五兵衛が六十二歳の折で、十二人の水夫と一緒にエトロフに行つて居つた海上で難船に遭ひ、檣も艪もとられてしまつた。明くる日風は止んだが、檣も艪もないので、浪のまに〳〵漂うて居つたが、何處までたつても陸は見えない。積み込んで居た米はあつたが、薪がないので、生米を嚙んで暮して居た。斯うして一日二日と經ち、海の上で春は暮れて夏となり、夏も暮れて秋となつたが、船は依然として浪の上を流れて居た。斯うして百五十日たつて、水夫達

サンフランシスコの地位を明かにす。且つ同じく太平洋沿岸の港に於ける海路交通の中心點なることを示す。

はもう生きのびる望もなく船の底にたふれて居たが、或る日の事、水夫の一人が、

「陸が見えたよ、あれは陸ぢやないか？」と叫んだ。この一聲に死んだやうな水夫が皆船の上から彼方を見ると、いや、確かにそれは陸であつた。一同の喜びとてはなかつた。

船はいよ〳〵陸に近づいた。そこはサンフランシスコから五里あるプレイタンといふところであつた。

五兵衛はこゝに數十日滯在して、米國の商業の大仕掛けなのに感心し、いろ〳〵學ぶところがあり、また米國人と貿易の約束をして、便船にのつて歸國しました。

その明くる年、即天保四年、五兵衛は、米國人の珍らしがり相な品物、即ち提灯や、傘や、扇、團扇の類を澤山買入れて米國に行つたら、米國人は大喜びで買つた。

五兵衛が米國に居つた間に、サンフランシスコの豪商フレンチ、アンクスといふ人が、五兵衛の噂を聞いて會ひに來て、五兵衛がはる〳〵小さな船にのつて、國をぬけ出て來た膽力を賞め、また

「東洋諸國の率先者として歐米列國と交易を開いて呉れるやう骨折つて下さい」と頼んだ。

けれども五兵衛は幕府が海外貿易を嚴禁し、嘗つて英露も貿易を相談したけれども許されなかつたこと、若し此の嚴禁を犯したことが分つたらば死刑に處せられることを話した。アンクスは日本のために大變それを殘念がつたが、惡いことではないから、大膽にまた出て來るやうに奬めた。五兵衛は他三郎といふ同行の男をアンクスに托して歸つた。その後弘化二年米國の使節が浦賀に來た時分、他三郎はアンクスに從うて久しぶりに日本に歸つて來たといふことであつた。

○

その後二三年して、即ち天保七八年には日本國中が大饑饉年であつた。今では饑饉でも、米は方々からとり寄せられるけれども、その頃は海外との貿易は勿論のこと、國の内でも交易をしなかつたので、船がないのみか、陸路の便も甚だわるかつた。そのために、餓死する者が方々に數へもきれず、下々人民のみでなく藩主に至るまで非常に困られた。その時、船を浮べて支那印度から外米を日本にとり寄せた者は、日本に於て只加賀藩の錢屋五兵衛ばかりだつたのです。その爲に加賀藩が助けを得たことは非常なものであつた。

斯る功勞のため五兵衛は、藩主から御用金御用達方に任ぜられた。今迄加賀藩では、あの富豪の木立家が御用金御用達を務めて居たが、それ以來二人の御用達方が出來た。しかも木立家は、五兵衛の主家で、幼時五兵衛はそこに丁稚をして居たのである。ゑらい人の立身といふものは、實に素破らしいもので、幼時の丁稚が今日は富豪となつて、主家以上な勢力を

得るに至つたのであります。

錢屋五兵衛の商賣は、ちやんと組織立つて(すぢ道が立つて)その活動は少しも亂れなかつた。五兵衛は宮の腰なる本店で、總事務をとり、息子の要藏と番頭の市兵衛を除いた外は、一切商賣上の祕密を語らず、日本全國の主要な港に支店を出し、またあのエトロフ、竹島、三宅島八丈島にも相變らず定期の貿易に出かけて居た。そして外國との貿易では生絲が一番大當りであつたが、今でも日本の主要輸出品は生絲である。それから木材の如きも澤山外國に賣り、又海獸の毛皮を北海道のアイヌから買つて、外國の珍品と交換して居た。外國から輸入したものには、羅紗、毛氈、毛織物、玻璃器、器械、時計、藥品、裝飾品などで、兵器の如きも和蘭陀葡萄牙人の手よりでなくて、英露米の諸國から密輸入をして居た。五兵衛が日本のために盡した功勞は實に偉大なものだつたといはねばならぬ。

○

ところがその後弘化元年江戸に大火事があつて、大都會が丸つぶれをしようとした。そのため土木工事が盛んに起され、森林の多い會津藩に、木材伐出の命が下つた。

すると會津藩の方では材木商に命じて、木材を切り出すべき命令を下したが、商人共は切り出すべきものがないとお答へした。なる程山林は多かつたが、官林を除いて、その他は加州藩と賣買契約濟になつて居た。

そこで、會津藩は加州藩に向つて、約束濟の山林讓渡請求をした。

加州藩では大變狼狽した。藩内の官吏は、これ全く錢屋五兵衛の罪だとして、彼を罰し、自分達の安全を計らうとした。勿論その材木は五兵衛が買つて居たのだけれども、行政上少しも不都合でないやうにして買ひ込んで居たのであるから、五兵衛は罰を受ける理由が無かつたのである。

それでも五兵衛を罰しなければ、藩の面目がたゝないと思つて、藩の官吏達は五兵衛に失策あれかしと待つて居たが、或る時河北潟埋立の事件があつた時、官吏達は得たりとして五兵衛に罪の宣告をした。然しそれは別に罪ではなかつたのである。

錢屋五兵衛は、河北潟埋立工事を藩に出願したら、許しが出た。彼は河北潟を埋立てゝ周圍を開墾しようとしたのであつた。河北潟は周圍七里、水が淺くて大きな船を入れることが出來ないので、寧ろ埋立てゝ田にした方がよいのであつた。

いよ〳〵工事に從事すると、仲々容易なことではない。それに魚が多くて打杭の間から土を流し、土俵に穴を穿つて、埋立を障害したので、息子の要藏が父五兵衛に、どうしたらよいものか相談すると、石灰とアイゴ油を湖に注げば、よからうといつたので、その通りやつ

て見たら、湖の魚が澤山死んで浮んだ。その死魚を拾つて魚屋が方々に賣りあるいたため、魚の中毒を受けて一時流行病のやうに人々が病氣をした。

兼々此の湖で魚をとつて生活して居た漁夫達は、五兵衛を日頃惡んで居たので、五兵衛を人命傷害者だと騷ぎたてた。

藩の方では、此の工事を許して居ながら、それだけのことで、五兵衛を罪人だとし、遂に彼を捉へて獄に投じた。五兵衛はその時八十二歳であつたが、ビクともしないで縛につき、獄中で病死した。

南洋植民の實際的必要をのべ、その知識と相俟つて本編を授く。

南洋の一成功者

文治は、尋常小學校を卒業した。

親友の爲ちやんも、友ちやんも、首尾よく中學校の入學試驗に合格した。

けれど、自分丈けは、家の貧しいために、高等小學校にさへ通へないで、尋常きりで學校を退りて終はなければならなかつた。

「あゝ、僕も、爲ちやんや、友ちやん達のやうに、學校へ行く事が出來たら、どんなにうれしからう。みんなと一緒に行き度いなあ。」

と、かう獨言を言ひながら、腕組をして、悲しさうに、ぢつと考へ込む事もあつたが、元來、進取の氣に富んだ文治は、或日、一大決心が、ムラ〳〵と、彼の心を强く、突き動かしたのであつた。

『よし、僕は行かう、外國へでも、何處へでも！　このまゝ、ぢつと家に煤ぶつて居たり、小さい店の小僧などで、朽ちてたまるものか。」と、彼は心に叫んだ。

彼は、自分の熱心な希望を述べて、やうやく、兩親の許しを受け、近所の梅吉といふ父さんが、今度南洋に行くのを幸ひ、それについて行く事に定めたのだつた。

文治が、梅吉に連れられて、いよ〳〵東京を立つて、遠い南洋へ向けて旅立つたのは、それから間もなくであつた。

文治は、何も彼も初めてなので、長い道中は、何かと梅吉の世話になつたが、南洋へ着いてから後は、さう梅吉の厄介になつてゐる事は出來なかつた。

彼は、南洋の地につくと直ぐ、あちらの巡査に賴んで、會社の給仕に住込んだり、或は、工夫の樣な酷い働きをしたりして、二十歳の年になる迄、足かけ六年といふ永い間、勞働に勞働を續けた。

彼はかうして、いろ〳〵な苦勞をしながら暮して居る中に、すつかり土地にも慣れて、自然南洋の地理にも詳しく通じて來た。

南洋の自然土人の生産上の知識と共に一種特別な生活を示す

文治は或晩、床の中で、眼を閉つたまゝ、いつまでも〳〵何事か考へてゐた。

彼の頭の中には、南洋の地圖が、明瞭りと浮んでゐた。

翌朝彼は、何時もより早く起きた。そして、草鞋をつけたかと思ふと、毎日仕事に出かける道とは反對の方角に向つてサッサと歩み出した。彼は、だん〳〵市を離れて、荒野に出た。

其後、數日を經て彼が辿り着いた處は、見渡す限りの森林で、晝も恐ろしいほど暗かつた。

それを眺め渡した彼は、パタと手を打つて、

『あゝ、遂に、僕の世界が來た！』と、大きく叫んだ。

さて文治にはどんな智慧が出て來たのだらう。このあたりはモローといふ猛々しい土人の居るところだが、ヤシュだのバナゝだのマンゴーだのにマンゴスチンだの、ツリヤームだのといふ大きい果樹が澤山あつた。ックヤームとは果物の太子といはれるもので、五町も先まで異樣な臭を放つものだが、頭のやうに大きい其の殼を破つて食ふと堪らないほど旨い。マンゴスチンは果物の女王、マンゴーは果物の王といはれるものである。

文治は果樹の森かげに掘立小屋をつくり、外國人さへ見れば、槍の先で突殺すといふモロー人と交際を始めた。そして仲よくなつて自分がその酋長になるまでは五六年もかかつた。その五六年の間、彼は木の實ばかり食べ土人と一緒になるまでには大變苦しい目に遭つた。

モロー人は人殺しを平氣でやるのだが、また日本の武士に似て非常に元氣がよくて、人倫をわきまへて居た。この土人と親しむことは殆んど、出來ないことだが、その酋長となつた上は、いよ〳〵素破らしい仕事にとりかゝる事が出來た。文治は彼等に樣々な繪を見せたり、柔を敎へたり歌を敎へたりして、彼等をなづけ、それから世界中の話をいろ〳〵敎へて、彼等と一つの獨立した部落をつくるため、甘蔗の栽培、果實の賣出しを始めた。

昔から今迄、森の中に裸體で住んで、手に弓矢をもつて、外の種族さへ見れば戰ひ、働くことを知らないで、森から森へと移住して居た土人をなづける爲に、彼はもとの酋長の娘を嫁に貰つた。彼等を働かせることは、大變に六ヶしいことであつた。彼等は木の實さへ食べて居ればよかつたので、別に働く必要がなかつたから、繪や、歌や、世界の話で、彼等をして一村落をつくらうといふ樂しみを抱かせるまでには、大變骨を折つた。

一部落が出來ると、今度は他の植民地の方へと道を開いた、そして甘蔗や果實の賣上から、いろんな器具を買つたり、活動寫眞を買つて來て、土人に見せたり、分配してやつたりした。土人はだん〳〵働くことを樂しむやうになつた。働くといつても、日本の農民のやうに朝から晩まで働く必要はなく、よく唄をうたひながら働いて、半日は巨木の枝の上につくつた家に晝寢をするであつた。

文治は、これから、だん〳〵土人の部落を開化さして行かうと思つて居る。何といふ愉快

資本主義精神に反した進取の精神を偶した假作物語

な男らしいことであらう。何と優れた精神な男子だらう。

千代子さんの石鹸製造

千代子さんのお家は、日本でも名高い名門であり、且つ富豪であつた。

かうしたお家の、一人娘に生れた千代子さんは、十四五になる迄、暑いも寒いも知らず、食べたいもの着たいもの、何でも思ひのまゝに育つて來た。と、云つても彼女は、普通豪家に育つた娘のやうに、贅澤な眞似をしたり、或は惰けたり、決して我儘な生活もせず、また は、お嬢樣氣取りをして、引込み思案ばかりしては居なかつた。

千代子さんは、成人するにつれて、大變に研究心がふかく、從つて自ら進んで事をしようといふ、女にも健氣な心を抱いてた。

彼女が二十歳になつたばかりの時、お父さんは千代子さんに家を讓ることにした。

いよ〳〵それと定まつた時、千代子さんは、心靜かに考へた。

お城の樣に大きな此家屋敷と、數百萬の財產とを此儘にして置く事は、寶の持ち腐れといふのも同じことだ、

『さうだ、自分は、これを持つて、社會の爲め、國のため、一仕事せずにはやまぬ。』と思つた。

すると、早速彼女は父の許に行つて、

『お父さん、私は今度澤山なお金と、廣い〳〵立派なお家とを頂きましたが、どうか之れを、私の自由に働かして下さいまし』彼女がかう云つて願ひ出ると、

お父さんは、自分の子ではあり乍ら、普段から、此千代子さんが聰明で、而も撓まず屈せず、進んで事をなすといふ氣象に富んでゐるのを知つて居まし たから、

『あゝ、よろしい。もうお前に讓つた以上は、みんなお前の物だから、決して心配はいらない。だが、それを以て何うしようと云ふのか、一通りお父さんに聞かせてくれまいか』

お父さんは、千代子さんの申出を、氣遣つたわけでなく、却つて一ッの興味をもつて、かう訊いて見たのであつた。

『左樣でございますか、それでは私の只今の決心を、お話し申上げませう。お許しさへ頂けば、こんなうれしい事はございません』と、云ひながら、尙ほ、自分は、毎日のくらしにさへ困らなければよいのだから、此金と家とを、社會のため、人の爲めに、用ゐたい覺悟だと語つた。

『さうか、それは誠によい考えだ、お父さんは、もう何んにもお前の心任せにして干涉はすまい』と、お父さんは、心から喜んで、かう千代子に安心を與へた。

千代子は此頃其處此處に、暴利ばかり貪つて、品質わるい石鹸商會の多いのを歎き、今度、

殆ど父に讓り受けた全財産を投出して、それらの惡い商法を改革する爲めに、大きな〳〵工場を經營した。そして、屋敷は圍ひを解き、その後へ多くの貸家を建てた。それを貧しい人達に、僅な家賃で貸し與へ、石鹸工場の仕事をさせる樣にした。

其間には千代子も、いろ〳〵困難な事に遭遇したが、彼女の事業はます〳〵成功して、最初の計畫を果す事が出來た。

女の身で、而も富豪の家に育ち乍ら、進取の氣象に富み、國益を計り、一方貧民の救濟事業にもたづさはつたので、誰でも彼女を崇めない者はなかつた。

教授指針

ギリシヤの美術羅馬の法律ユダヤの基督教が近代文明の三大源流なりしこと。希臘文明特質に就て教育に示す大要（教育進化の六千年參照）

忍耐

ソクラテス

今から二千五百年も前、希臘といつて大變開けて居た國があつた。希臘の學問は、今日の文明の源になつたものである。特にその時分に出來た美術品や建築は、今の人が見ても只々驚かぶばかり立派なもので、今も變らず手本にされて居る。

その希臘はスパルタとアゼンスの二つに分れて居た。スパルタの方は、學問は進んで居なかつたけれども、國民は愛國の精神が盛んで、子供の時分から戰（いくさ）の稽古をしたり、いろ〳〵な運動をしたりして強い人ばかりだつたので、スパルタと戰つて勝つ國はなかつた。けれども後にはアゼンスの方がスパルタよりもずつと強くなつた。アゼンス人も戰爭の稽古をしたり、運動を盛んにしたりして居たけれども、それだけではなくて、學問や美術が盛んであつた。

誠實には忍耐とか膽力とかの重要な道德的要素あることを暗示し、解剖せしむる。

○

このアゼンスが、波斯といふ強い國と戰つて居た時分の事である。

兵卒の中に一人非常に辛抱力の強い男が居た。見たところ男ぶりが惡くて、そんなに力士とは思へないのだけれども、非常に力が強かつた。けれども一度だつて亂暴なことをしないで、戰の眞最中、自分の隊長が手傷を負つて倒れたら、それをかついで、敵兵の間を平氣でズンズンかけて行つて、危くない處に隊長を置いてまた槍を握つて、敵兵めがけて攻め寄つた。

此の男は、暑つい日でも暑いといつたことがない。寒い日でも寒いといつたことがない。何時でも元氣がよくて疲れたといふこともない。食べ物が足りない時には、人に澤山食べさせて自分には食べないで平氣で居た。三日も四日も食べないことがあつても、苦しいといふことを顏にも出さなかつた。

此の男は、人が飲み食ひして、下らないことを喋舌りながら喜んで居る時には、よく一人外に立つて天を仰ぎながら何か考へて居ることがあつた。冬の寒い日に、一夜雪の上に立つて何か考へて居ることさへあつたので、人は氣が狂つたのぢやないかといつて居た。

何をそんなに考へて居るのか誰も知らなかつた。つまらぬ一寸したことなら、そんなに考へて見ることはいらないのだらうけれど、此の男は、千年たつても萬年經つても消えない大切なことを考へて居るのであつた。此の男の心には天の聲があつた。何時までも消ゆることのない人間の魂の光が輝いて居つた。此の男は、自分が考へ、自分が感じて居ることの外には、誠はないものだと堅く信じて居た。だから人々には深切に優しくしたけれども、誠の爲にはどんなことをされても、ビクともしなかつた。人から惡くいはれてビクつくやうな考へは、誠ではないからである。さて此の男は、後に希臘の大聖人といはれたソクラテス先生だつたのである。

○

戰爭に勝つと、國民の心は惰弱に流れるものです。アゼンス人は彼斯に勝つたため惰弱に流れようとした。

その時分に、アゼンスには貴族や金持の子供を瞞して間違つたことを敎へて居た。ソフィストといふ學者が何人も居た。ソフィストは口がうまくて、いろんなことを知つて居たので、アゼンスの若い人達は、こんな偉い人はないといふやうになり、立身をするにはソフィストから敎はらなければ立身の望がないといふやうになつて居た。

學校を卒業して、猶學問をしようといふ人達は、このソフィストを先生にして勉强して居た。或る時のこと、立派な着物を着た若い人達が、ソフィストをとり卷いて、いろんなことを敎はつて居た。するとその若い人達の間に、頭の禿げた見つともない老人が一人默つて聞いて居た。どこの爺だとも分らぬ男だつたので、美しい若者達は、厭な奴だと思つて居たが、ソフィストが話をしてしまふと、此の老人が何か先生に向つて尋ねた。皆、生意氣な奴だと思つて見て居たが、よく聞いて見ると、此の老人のいふことには非常な力と誠があつた。ソフィストと老人は段々議論を初めたが、後にはソフィストはやり込められてグウともいへず、顏を眞赤にして逃げて行つて了つた。

若い人達は初めて吃驚して此の老人を見た。此の老人はソクラテス先生であつた。先生はソフィストを云ひ伏せたけれども、少つとも自慢した樣子がなく、

「皆さんお互に勉强しませうね！」と若い人達に叮嚀にいつて、トカ〳〵其の場を出て行かれた。

プラトー、アリストートル

○

ソクラテス先生の名は忽ち國中にひろまつてた。後に名高い大學者になつた人々が澤山先生の教を願ふやうになつた。先生の教を受けた人々は皆正しい人になつた。そして二千年後の人々までも先生や、先生の弟子の學問のおかげを被るやうになつた。

斯ういふ立派な先生であつたので、先生の言葉は人々の心の底までしみ込んだ。だから正しいことをきらつて居る考へ違ひの人々はソクラテス先生を憎んで殺さうとして、遂にソクラテス先生は、國にそむく者だといひふらす者があつて、世間でもさういふことを信ずるやうになつたので、先生は捉へられて毒殺されるやうになりました。

先生は少つとも自分には惡いことはない。自分を殺す者の方が惡いといふことを知つて居られたけれども、お官から捉へられて殺されるのであつたから、手向ひすることなく、毒を飲まされて死なれた。

若しソクラテス先生の信じて居られることが誠でなかつたならば、お官から捉へられて殺される時には弱くなつて恐れたり、許しを求めたりしたらう。けれどもソクラテス先生の正しい智慧は、人間の誠であつたから、先生はビクともされなかつた。

私どもも、何事に臨んでもビクともしない立派な心掛を以つて、人間の誠をつくさねばなりません。是れが一番ゑらい人になる途です。

食物は忍耐克己の基礎であることを心得べし。

偉人と食べもの

世界戰爭が始まつて、歐洲の方では、お金が澤山いる。澤山の兵士が打死をする。働く人が少くなる。外國からは食べ物が買入れられないといふことで、どこの國でも、あらん限り儉約をしても食べられず、あの亡んでしまつた白耳義といふ國では、生きた鼠の皮をはいで食ふたこともあれば、あの露西亞では、毎日のパンをつくる麥の粉がないので、藁でパンをつくつて食べて居ます。ワラのパンといへば、日本ではワラでつくつた團子位なものですから、そのまづいことゝいつたら話にはならないのです。

これから戰爭があると、こんなまづいものでも平氣で食べて、元氣よくして居れる位でなければ、勝たないのです。うまいものを澤山たべないと、力づかないといふのは、精神が惰弱になつた證據です。朝晩、膳の上に、自分の好きなものがのつて居ないと、不平をいふやうな子供は決してエラクはなれません。昔から偉らい人は、まづい物を食べたり、または斷食したりされたものです。肉類や魚類は一切ぬきにして、野菜ばかり食べた人に、昔から偉い人があつたといふ位です。昔から貧乏な家から英雄が出るといふことをいつて來ましたが、そのわけには、貧乏人は、どんなまづいものでも喜んで食べるからです。

昔はプラトー、ピタゴラス、釋迦すべて粗食を主張した。

ギリシヤの男女の裸體畫若しくは彫刻の寫眞畫を準備すれば妙、

昔ギリシヤといふ國では、子供は十四歳になるまでは、決して肉や魚を食べてならなかつた。けれどもギリシヤ人の體格は、昔から今日まで、世界で一番立派であつたといふことです。體格がよかつたばかりでなく、政治家にせよ、學者にせよ、軍人にせよ、美術家にせよ、ギリシヤは世界第一の人々が出て來たのです。

日本には胡麻鹽と梅ぼしがあります。世界で胡麻鹽と梅ぼしを食べる處は日本だけです。これは日本の昔の人が、修業をしたり、戰爭したりする時に、おごつたものを食べないで、胡麻鹽と梅干さへあれば、何にも食べないで、平氣で居られた證據です。だから日本の昔の學者や、武士には強い精神があつた。又立派な人物が居た。今の人はうまいものを欲しがり、よい着物を欲しがつて、どんなに苦しくても平氣で元氣よく働く人が少ない。働くことよりも、うまい物を食べることが好な人は、賤しい人で、決して偉くなれない。うまい物を腹よく食べて腹の減ることのない人は、學問が出來ない。腹がへつても、食べ物をねだるでなく、辛抱して居ることが大切である。

世の中には、惡い事をする人がある。盜んだり、詐をいつて人のものを取つたり、人をはねのけて、自分ばかりよい目に會はうといふやうな慾張は、皆食ふことばかり考へて居ます。善いことをするために、盜む者はあるものでない。世の中の人が皆慾ばりになつたら、自

亡國民の悲慘な樣を語つて聞かせるがよい。

士道「節飲食之用」の篇にあり。

これは露西亞の文豪トルストイが村の兒童に話し聞かせるために作つた物語である。人から妨げられて始終害されて怒つてばかり居る者は、遂に身を亡ぼすから、勸忍の

分さへよければ、人はどうでもよいといふやうになつて、意地惡る、横着者、情知らず、泥棒、詐欺師ばかり出て來て、世の中のためになる人がなくなる。

すると國は屹度亂れて來る。國が亂れると、國力が弱くなる。そして外國人から玩具にされる。外國人から玩具にされる程、國の恥はありません。

だから私共は、どんなまづいものでも、難有く思つて頂かねばならぬ。おいしくなければ、よく働き、よく運動すればよい。腹がすけば、何でもおいしい。

山鹿素行先生は、

「世哀へ風俗すたれて、人皆飲食を好むこと分にすぎ、しきりに奇味をなす。こゝに於て口味に耽り、體常にゆるやかにして、大丈夫の志日を逐うて空し」といはれました。

不幸と忍耐

ある町に名はイバン、姓はアクショノフといふ商人が居た。イバンは元氣のよい男で、歌が大變好きであつた。

或る夏の朝、イバンは商買の用があつて都に行かうとして準備をした。

すると妻君が出て來て、

「もし〳〵。今朝お出かけですか？　今日は見合せて明日にして下さらないか。昨夜惡い夢

大切なことを説くのである。斯る種の話は共に大切なのは、人に使はれる者は、なるべく氣に喰はないことがあつても、辛抱して、默つて氣持よく働く時は屹度、尊敬をうけるやうになること、それが成功の道であることを話して聞かせる。

を見ましたから」といふ。

「また俺が都へ行つて料理屋にでも上つて散財するのだと思つて居るのか?」

「いゝえ、さうぢやありませんが、運の惡い夢でしたから」

「どんな夢だつたい?」

「あなたが旅から歸つて帽子をとられると、頭の髮が眞白になつて居た夢でした」

「さうか。そりやー、よい夢だよ。屹度儲かる前兆だよ。いゝかい。儲かつたらよいお土產を持つて來てあげるよ」とイバンは斯ういうて馬車に荷をつんで出かけて行つた。

イバンは道で、前から親しくして居たラザレという商人に遭つたので、道連れになつて、一緒に宿につき、一緒に夕食をすまして、隣り合つた部屋で床に就いた。

明くる朝、夜の明けないうちに起き、朝飯を食べて、宿の勘定を拂つて出かけた。午になると、茶屋に寄つて辨當をたべ、琵琶をとり出してデンデンデンとならし始めた。

ところへ一臺の馬車が走せつて來て、茶屋の前にとまつた。馬車から二人の刑事らしい人と一人の巡査が出て來た。そしてイバンのところへやつて來て、いろ〳〵なことを尋ねた。イバンは一々答へた。イバンは、お茶をくんで、「まあ、一ぱい召し上れ」とすゝめたが、巡査は有りがたうともいはずに、意地惡いことを尋ねる。

けれどもまたそれと反對に、人なら欺かれないやうにすると正當防禦手段にならない場合は、訴へなくてはならないこと、正義のために反抗服從すべきあることは必要なことである。

「貴樣は昨夜何處に泊つたのか」

「何々といふ町に泊りました」

「連れの者があつたのか、一人だつたのか?」

「ラザレといふ友達と道づれになりまして、一緒に泊りましたが、今朝は一人でたつて來ました」

「何故夜も明けない內に立つたのか?」

イバンは妙なことを尋ねられると思つて、「あなたは何ういふわけで、商買のため旅をして居る私に、泥棒かなんぞのやうに、いろ〳〵なことを尋ねなさるのです」といつた。

「自分達は警官だが、昨夜お前と一緒に泊つた商人が、誰かに殺されて居たので、御迷惑だが一應お前の荷物を調べさして呉れ」と警官の方ではいつた。

「はい〳〵よろしう御座います」

警官がイバンの荷物を解いて見ると、これはまた何うしたことだらう。包みの中から血のついた短刀が出て來た。

イバンはそれを見て吃驚した。

「この短刀には血がついて居るが、こりや何うしたのだ?」と警官は尋ねた。

イバンは口がふさがつて言がいへず、

「そ、そ、それは……わ、わたしの物ではありません」と漸くどもつていつた。

すると警官は、「お前が道連れになつたといふその商人は、今朝床の中で咽喉をつかれて死んで居た。その部屋には錠がおろしてあつて、誰も居なかつたし、又誰もはいられる理がないから、殺したのはお前にきまつて居る。しかも血のついた短刀まで、お前の包の中から出て來たではないか。どんなに隠しだてをしても駄目だ。一體どうして殺したのだ。又いくらの金を盗んだのか。すつかり白狀しないと、お前のためにならないぞ」といつた。

イバンは、昨夜、夕食をすました後は、彼と會はなかつたので、殺した覺えはない。いや決して殺しては居ない。金は八千圓持つて居るが、これは自分の金である。その短刀は自分のではない。そんなものは決して持つて來なかつたといつたが、聲は亂れ、顔は蒼ざめ、たとへ下手人ではなくとも、あまりの恐ろしさに慄えて居た。

イバンはとう〳〵ラザレといふ商人を殺して、二萬圓の金を盗んだことにされてしまつて、兩手を縛られ、馬車にのせられると、餘りのことに泣き出した。そしてとう〳〵彼は、獄屋に入れられた。

その事を聞いたイバンの妻は、大變驚き悲しんだが、どうしても自分の夫が人殺しをしたとは思へなかつた。そして乳呑兒と、小さな子供達を皆連れて獄屋の夫に會ひに行つた。最初は面會を許されなかつたが、幾度も幾度も嘆願したので、特別の恩惠をもつて許され、夫の處へ連れて行かれた。赤い着物を着て、手錠をはめられた夫を見ると、妻は氣絶して永い間正氣に歸らなかつた。漸く正氣になつて、子供の手をとり夫の前に坐つて、

「どうしてそんなことになりましたか？」と尋ねた。夫は事の始末をそのまゝに話した。それでも妻は安心が出來ないで、「ねえ、あなた、私にだけは眞實のことを仰しやつて下さいね。眞實に殺したのですか、誰が殺したのですか」

「そんなことをいふ位なら、お前まで俺を疑つて居るのか」といつて、イバンは聲を出して泣いた。そこへ看守が來て、もう歸らなければならぬといつた。イバンは妻子に最後の別を告げた。

皆が歸つた後にイバンは、「ああ、妻までも自分を疑つて居る。神樣より外に眞實な事を知つて下さる方はない。默つて辛抱して神樣から救はれる時を待つより外はない」と心の中で思うた。

それからイバンは笞でうたれて、その傷が治つた時には、他の囚徒と一緒にシベリヤに流された。

笞刑は吾が國には無いことを注意すべし。

そして二十六年の間イバンは、シベリヤの囚徒になつて住むだ。髪は雪のやうに白くなつて、此の世の樂はもうなくなつてしまつた。歩くにも腰をかゞめ、默つて口も利かず、笑ふこともなかつた。

さてイバンは獄屋に居る中に、靴をつくることを覺えた。そして少しつゞの金を貯へた。そしてその金で、聖人のことを書いた本を買つて讀み、日曜日には歌をうたつた。聲だけは昔の通りよかつた。

典獄も看守も皆イバンを可愛がつた。囚人どもは皆イバンを尊敬してくれた。けれども、イバンは家から少しも便りが無いので、妻や子供の生死さへも知らなかつた。

或る日の事、新らしい囚徒の一群がイバンの居る獄屋に來た。夜になつて一人の古顔の囚人が、新らしく來た奴どもに、どんな罪を犯して、何年の罰を受けたかと尋ねて居た。イバンは後ろの方に俯いて、その返事を聞いて居た。新囚徒の中には、丈の高い頑丈な胡麻鹽髭の男が居て、自分の身の上を話して居た。

「私は人の馬を默つて一寸使つたばかりで、泥棒にされてしまつて、此處に送りやられた。友人の馬を一寸使つた位で泥棒だといはれるのです。私は一昔前には惡いことをしたことがあるが、それは表はれないで、惡くもないことをして、こゝに來たとは夢のやうです」と斯ういふことを話して居た。

「どこから來たのかい？」と或る者が尋ねた。

「私はブラヂミヤといふ處から來たセンといふ男だ」と其の男はいうた。

その時イバンを頭をあげて、

「センさん。お前さんは、ブラヂミヤのアクショノフといふ男を、ご存じではありませんかな。そこの家族はまだ生きて居ますかな」というた。

「知つて居ます。アクショノフの親爺さんは、無實の罪で、シベリヤに流された相だが、店はなか〳〵繁昌して居ます。そこで、爺さんはどうして玆へ？」

イバンは、歎息をついて、「私は二十六年この獄屋に居る」といふばかりだつた。

「一體何の罪で」と、センがまた尋ねると、イバンは

「私は辛抱をしなければならなかつた」といふだけだつた。けれども他の囚徒が、イバンは無實の罪を着て、二十六年間玆に來て居ることをくはしく話した。

センはその話を聞いて膝をポンと打つて、

「こりや不思議だ、爺さん、あんたは幾つになります」と尋ねた。何故センがそんなに驚くのかと皆が聞くと、センは只、「こゝで、あんたに遭はうとは思はなかつた」といふばかりで

あつた。

イバンは、何だか此の男が、眞實の罪人だと思はれたので、「センさん、お前はアクショノフの事を聞いたことがあるだらう。そしてまたアクショノフに會つたこともあるだらう」と尋ねた。

「ハイ〳〵、アクショノフの話は聞きましたよ。大變な評判だつたから」

「誰が眞實の罪人で、商人を殺したのか、その噂は聞かなかつたかい？」とイバンが尋ねると、センは只ニヤ〳〵笑ふばかりだつた。

イバンは直ぐにその場を立去つた。そしてその夜眠れなかつた。永い間辛抱して居たが、今眼の前に、眞の罪人らしく思はれる男を見たので、頭が搔き亂されてしまつた。そして二十六年の昔、商用で家を出かける時の妻や子供の姿があり〳〵と見えて來た。それから自分の子供の時分のことを考へ出した。その時分は樂しかつたと思つた。そんなことを考へて、こんなに老ひぼれてしまつたことを思ふと、氣が狂ひそうになつて來たので、一層のこと死なうかとも思つた。それかと思ふと、またセンといふ男がにくらしくなつて、仕方がないので、もうセンの顔を見ないことにした。

斯ういふ具合で一週間程過ぎた。イバンは少しも眠られず、日に日に身體が弱つて行つた。

或る夜イバンは眠れないで苦しかつたから、獄内を歩いて居ると、囚徒の寢て居る室の棚の下から土魂がころげて來た。どうしたのかと立止まつて見て居ると、棚の下からセンが這ひ出て來て、吃驚してイバンを見て居たが、手を握つて、

「イバンさん、俺はこゝに下に穴を掘つてる。默つて居ておくれよ。うまく行つたら、一緒に逃げ出さう。人にいつたら、私は打殺されるし、お前もそのまゝにはして置かんぞ」と嚇しつけた。

イバンは自分の敵を見て、忿怒の情に堪へなかつたので手をふり切つて、「私は逃げはしない。私は殺さうと殺すまいとお前の勝手だ。だがお前は、遠くの昔私は殺したのも同然ぢやないか」といつた。

明くる日、看守が棚の下の穴を見出した。そして囚人どもは一々調べられたが、誰が掘つたやら分らなかつた。で獄長は正直なインバに向つて、誰が掘つたのかいつて見よと迫つた。イバンは決していはなかつた。センは自分の知つたことではないといふやうな顔付をして、平氣で獄長の顔を見て居た。

「イバン、眞實のことをいつて見い。誰がこの穴を掘つたのだ」と獄長はまた迫つた。

イバンは、センの顔を一寸見て、

「獄長様。私は何にも申上ることが出來ません。申上ることは惡いことだと思ひますから。ですから、どうぞ私を罰して下さい」といつた。どんなに獄長が尋ねても、イバンは答へないので、その日はそれで訊問がしまへた。

其の夜、イバンが寢て居ると、誰かソッと彼の傍へやつて來た。闇をすかして見ると、それはセンであつた。

「何をしに來たのだ。お前はこの上にも私に惡いことをしようとするのか?」といつたが、センが默つて居るので、イバンは起き上つた。

「何をするのだ。あつちへ行つてしまへ。行かないと看守殿に屆け出るぞ」

すると、センはイバンの傍へスリ寄つて、

「アクショノフさん。どうぞ許して下さい」と小さな聲でいつた。

「何を許すのかい?」

「商人を殺して、短刀をあんたの袋に入れたのは私でした。私はその時、あんたをも殺さうとしたのだが、外で人の聲がしたので、短刀を袋の中にしまつて逃げたのでした。私は天にわびても地にわびても許されない惡いことをしました」

イバンが默つて居ると、センは膝まづいて、

「どうぞ〳〵許して下され、私は商人を殺した罪人だといつて自首します。そしたら、あなたは無罪放免になつて、お宅へ歸ることが出來ます」とくりかへした。

「私はもう二十六年間も、こゝで苦しんだ。今になつて何處へ行かう。妻は死に、子供は私を知つて居まい。私はどこへも行くところはない」

センは地の上に頭をうちつけて啜り泣きした。

「アクショノフさん、何卒許して下さい。私は何といふ惡者でせう」

「よろしい。神様はお前を許して下さる」。と斯ういつた時、イバンの心は大變輕るくなつて嬉しくなつた。

それからセンは自首したけれども、イバンは無罪放免の通知が來た時には、もう已に此の世の人ではなかた。

日本の紀元の由來と現今の紀元は何年であるかを質問す。今の西暦年數に就いても

文豪カーライル

日本では大正何年、又は紀元二千五百何十何年といふやうに年を數へます。西洋では何世紀といつて、一世紀は百年、基督の生れた時から數へて、今は二十世紀です。二十世紀の前は十九世紀、十九世紀の前は十八世紀でした。世の中は、十八世紀から大變開けて來ました。その前は、汽車も汽船も電信電話もなかつた。飛行機や、潛航艇は二十世紀になつて出來た

ものです。十八世紀の初め頃までは、西洋では僧侶や、富豪や、貴族が、下平民を苦しめて居た。そしてさういふ人達は惡いことばかりして居た。

そんなことではいけないといふことで、佛蘭西の人民達が戰爭を起したが、それは佛蘭西革命というて有名な戰爭で、その戰爭から後、下平民でも偉くさへあれば、立派に立身出世が出來るやうになつた。でもその戰爭ははげしい戰爭で、澤山な人が平民たちを助けるために、むごたらしく殺された。

イギリスの文學者のカーライルといふ偉い人は、その戰爭のことを、二十年もかゝつてくはしく書かれた。一生懸命になつて、骨折つて全部書きあげた時には、どんなに嬉しかつたでせう。二十年もかゝて書いた本(原稿)ですから、大變大きい本です。

その本を書きあげた時、友達が專ねて來たので、カーライルは、書いたのを出して見せました。友達はそれを少し讀んで見ると、大變に面白くて、よいことが書いてあるので、印刷屋にまはして本になる前、一寸借して貰ひたいとて借りて行きました。

その晩友達は、それをよんで大變感心しました。何せよカーライルといふ偉らい人が書いたのであるから、面白くてならなかつたのです。その晩おそくまで讀んだ、それを大切に棚の上にのせて休みました。

明くる朝起きて見ますと、棚の上にのせて置いたその本(原稿)がありません。「大變だ、どうしたのだらう。まさか無くなつたのぢあるまい」と思つて女中を呼びました。

「お前はこゝにあつた本を知らないか?」

「本ですか? 本はありませんでしたよ。紙屑見たやうなものが重ねてありましたから、頂きました」

「馬鹿、それは大切なものだよ!」

「まあ!」

「まあつて何うしたんだ」

「私あれは紙屑かと思ひまして……」

「で何うしたのかと聞くのに」

「たきつけものにしてしまひました」

「たきつけものに……そりやまた何うしたことだ」

「まあ、どうしたらいゝでせう」

「馬鹿、默つて此の室にあるものを、たきつけにする法があるものか? あれは千萬金よりも大切なもので、二十年もかゝつて學者が書いたものだよ!」

西洋では紙をたきつけにすることを注意す。

然し、もう何といつても燃やしてしまつたものが、戻つて來るわけは無い。此の友達は、餘りの驚きと、悲しみに腰が立たなくなり、申譯もなく、熱病になつて寢て居ました。

カーライルは、此の友達が本(原稿)を返へして呉れないので、催促をすると、女中が誤つてたきつけにしたといふことで、これも失望して腰が起たなく、寢たまゝウン〳〵うめいて起き上れなかつたのです。

けれども、カーライルは何日か經つと、また起き上つて、再び佛蘭西革命の歴史を書き初めました。大抵の人ならば、友達から辯償金でも取つたでせうが、カーライルは友達を氣の毒に思つて、少しもその不注意を責めないで、また生命のあらむ限り、熱心に書いてとう〳〵立派に書きあげたのです。それは立派に本になつて、今日でもカーライルの「佛蘭西革命」といつたら、學者が誰でも尊敬して讀んで居ます。斯ういふよい本が出來たのは、全くカーライルの辛抱力の結果です。

高貴尊嚴な感奮なくして忍耐力は生じないことをさとすべし。

偉人の忍耐

昔、伊太利の國に文藝復興といつて、學問や美術が大變盛んになつたことがあつた。その時の偉い人に、ミケランゼロといふ人があつた。この人は彫刻家で、その人の彫刻したものを見ると、誰だつて感心しないものはない。今でも美術家はこの人を非常にえらい人だとして崇めて居る。

昔つて授けたミケランゼロの復習をし合せて文藝復興は希臘文明の復活で、近代文明の第一歩であつたことを示す。

その人が或る時、王様に頼まれて、或る名高い人の彫刻をつくつたことがあつて、それが街に立てられることになつた。その時ミケランゼロも行つて居つたが、見物する人が澤山集まつて居た。その中には官吏や、學者や、僧さんや、金持や、美しい婦人達も來て居た。

するとミケランゼロの知り合の者が通りかゝつて、

「折角よく出來てるが、鼻が釣合はないでおかしい」といつた。多くの見物人の中で、自分が一生懸命につくつた責任の重い立派な彫刻品が、おかしいといはれることは、大變な恥であつた。けれどもミケランゼロは、少しも怒らないで、鑿と金槌をとつて、鼻のところを少しばかりコツ〳〵やつた。すると、先に惡口をいつた男が「、さう〳〵、それでよい。それで立派なものになつた」といつた。勿論その彫刻品は、もとのまゝにして置いたがよいけれども、强情をはつたり、怒つたりするといけないので　ほんの少しばかり、コツコツやつたところが、實に立派なものになつたとて知り合の者が感心したのである。

私共も、何か書いたり、作つたりしたものが、人から笑はれたら、たとへ立派に出來て居ると思つても、怒らないで、少しでもよいものを作る樣に心掛けなくてはならない。怒つて喧嘩をしたり、ヤケを起すと、いけない。また私どもは、自分でよいと思つてしたことが、

人から笑はれたり、惡口いはれたりすることがある。さういふ時も、無闇に怒つて喧嘩を起したりなどしないで、益々よいことをするやうに氣をふりたてなくてはならない。

偉い人はよく辛抱する。辛抱する人が、よい事をしたり、よい物をつくつたりする。偉くなくては決して、よいものをつくることが出來ないのです。

不遇も世間の嘲罵も吾が身の爲となす忍耐奮起の心掛が大切であることを示す。

桃の種子が何百兩

昔、日本に名も知れない小僧が居つて、かゝりあひになつて獄に入れられた。町の腕白者等が、「それ見よ小僧が獄にはいつた、あれは泥棒だ」といつて桃の種子を投げつけた。小僧は顏色も變へないで、その桃の種子を拾つて、小刀の先で、種子の上に三匹の猿を彫刻した。その小僧は大きくなつて、名高い彫刻家になり、獄屋の中で刻んだ桃の種子が何百兩かで賣れました。

本篇は事實を脚色したものである。苦しいことに耐へ怒ぶことを知らないものは空想家で、よいことをしようと思つても、それは實に根の弱いものであることを知らしむるを以つて目的とする。

馬車屋の息子

太郎の父は田舍驛の馬車屋をして居た。小學校を卒業したら都の商業學校に入れてやると約束して居た太郎の父は、太郎が學校を卒業して、もう二三ヶ月經つたけれども、まだ何ともして呉れない。

「父さん。私は學校を卒業してもう五ヶ月になる。どうして商業學校にやつてくれないの？」

と太郎が或る日、父にねだると、父は、「學校にはいるのは春ぢやないか？　しつかり家の加勢をしてくれたら來年からやつて上げる」と澁々答へた。夏になつて馬が一匹死んだ。馬車が一臺くづれて物置の中に押込められた。つゞいて馬丁が一人暇乞をした。

父は、馬丁と毎朝、寂しさうに店先にくすんで、道を通る人々を眺めて居た。

「乘つてお出でんか？」まけて置きます」と父は時々居たまらなくて道ばたに出て、通り行く人々にせがんで居た。太郎はそれを見て、寂びしい情ない思ひがして居た。

太郎の住んで居る田舍驛に馬車會社が出來てから、父の馬車に乘つてくれる者が、頓と少なくなつた。馬が一頭死んでからは、二臺の馬車が一臺となり、大切な一匹の馬も臀部に大きな生疵が出來て、痩せ細つて行くのが日に日に見えた。或る日のこと、たつた一人の老人が、父の馬車にのつて呉れた。父が馬に鞭をあてると、馬は苦しさうに頭を上下に動かして、走り出した。すると後ろの方から、怪たゝましい音をたてゝ、立派な黑塗りの馬車をひいた逞ましい馬が走つて來た。會社の馬車だ。鞭を握つて居た馬丁は、

「おい、駄馬危いぞ。よけないか？」と呼んだ。太郎の父は馬に鞭を加へた。馬はヒーンともいはず、泡を吹いて頭を動かすばかり。會社の馬車は勢よく遂に追ひ越した。太郎はその有樣を見て、殘念でならず、ホロ〳〵涙を流したが、人から見られては耻かしいので、馬車小

屋の後ろに行つて、藁の中に頭を突つ込んで、背中を波うたせて泣いた。

「殘念だ〳〵。家の馬を駄馬なんて。父さんの大切なあの馬を。可愛相に、痩せたから仕方がない。何故父さんは、もつと丈夫な馬を仕入れないだらう。會社の惡漢の馬車に負けて、父さんは可愛相だ」斯う思ふと、無暗に悲しくなるばかり。

その日から太郎は決心して、毎晩馬の足を洗つてやることにした。そして野原に行つて、生々とした青草を刈つて來て、馬に喰はしてやることにした。毎日毎日、それを怠らなかつた。「今に見ろ、今に見ろ、家の馬を立派なものにして見せる」太郎は毎朝斯う祈つて床を跳ね起き、鎌を持つて、早速刈つて來た露ぼい草を馬にあてがつて樂んだ。

盆になつて、馬丁はひまを貰つて家に歸つた。十五夜の月があがつて、空は美しかつた。太郎は柱にもたれて、月を眺めて居た

「おい、太郎父さんの腰をうつてくれんか？」側に打伏せに寢て居た父が斯ういつた。

「あゝ、」、太郎は直ぐ父の腰をうち初めた。「あゝ、いゝ。もうよからう」父は暫らくすると起き上つて、「太郎、お前に話して置くことがあつた。お前はよく働いてくれる。またよく本をよんで勉強して居る。來年は約束通り學校に入れてやりたいが、一つお前に相談がある。お前が知つて居る通り、家には馬が一匹になつた。もう一匹仕入れて、あのくづれた馬車を修繕しようと思ふけれども金が無い。いろいろ工面をしたが、貧乏すると誰も同情しなくなつて、金が借り出せない。商賣がへをしようと思つても、今になつては何とも出來ない。いろいろ俺も考へた。でも、お前に一つ相談するより外はない」といつた。

太郎は眞直に座り直して、痩せた父の日燒面を見て、息をのんだ。

「昔から偉らくなつた人は、皆辛抱した。お前も偉らくなつて貰はんとならんから、辛抱してくれんとならん。でね、來春の學校が、さ來年の春になつても、一つ父さんに加勢してくれる氣はないか？」

「父さん、何でもやる。一生懸命にやる。俺力もちだから」

「うむ」と父は點頭いて、「ぢやね、明日から一つ、お前が馬丁になつてくれんか？　お前はよく走れる。すると俺が月に三圓づゝ貯金してやる。半年すれば十八圓、一年すれば……三十六圓になる。さ來年の春、さつと一年半で幾何になるかね」

「五十四圓」と太郎はいつた。

「いや、一年半以上ある。一年八九ヶ月あるから、えゝ、いくらかね……六十圓以上になる。ふらい金ぢやないか。それをすつかりお前の學資金にやる。どうだ、だから一つ加勢してくれるか？」

「あゝ、加勢するよ、父さん」太郎は腕をさすつた。

明くる日から、雨であらうと、風であらうと、太郎は父と馬車にのつて客を送つた。坂のぼり下りやら、人通りのある處にくると、太郎はヒラリと馬車からとび下りて、馬に先だつて走つた。

夏は何時しか、秋となり、ことしも、もう暮に近づいた。天高くして馬肥ゆと昔の人がいつた通り、太郎が毎朝、朝飯前に草を刈つて來て馬に喰はした甲斐があつて、秋から冬にかけて、馬はだいぶ肥つて、臀部の疵もたほつた。けれども、毎日毎日、後ろの方から幾臺も幾臺も、會社の立派な馬車が素敵な勢で追つついた。會社の馬丁は、會社の信用をあげる爲に、太郎親子の馬車の姿を見ると、無暗に鞭をなぐりつけて、狂つたやうに馬をはしらせるのであつた。特に意地惡るい馬丁は、さも勝ちほこつたやうに、カラ〳〵と打笑つて、太郎父子の馬車をはねのけむばかりの勢で追越して行くのであつた。太郎はそれが殘念でならなかつた。

けれども、太郎親子の馬は、とても會社の馬とは較べものにならなかつたので、決して鞭を喰はせることをしないで、その代りよい食物を馬に喰はしてやる事にし、その日その日の生活(くらし)が出來れば、無暗に客をとらなかつた。そしてお客には誰にでも叮嚀深切にしてあげた。

翌年の正月から父は、太郎に月に四圓づゝ貯金をしてやることになつた。どうしたわけか、前の年は客が少なかつたけれど、今年は日に月に客が增えて行た。

物置に押込められた馬車は修繕が出來て、立派なものになつた。太郎はほく〳〵喜んだ。秋になると、父は大きい馬を一匹仕入れて、人のよさ相な馬丁が一人傭ひ込まれた。そして二臺の馬車を出すことになつた。

噂に聞くと、會社の馬車は、早いには早いが、餘り鞭を喰はせて、馬が飛び上るので、乘つたものは、右にぐらぐら、左にゆらし〳〵て、年より子供はとても乘つて行けないと、事であつた。斯ういふことで、太郎の馬車はだん〳〵繁昌して行つた。

その師走、馬車會社の方では年度の決算があつて、利益分配のことで、內わの大喧嘩が始まり、とう〳〵會社は解散してしまつた。それから後といふものは、太郎親子の馬車だけが、縣道條を占領して、毎日毎日お金が澤山はいつて來た。

そして約束の春になると、父は太郎に元利合計八十圓貯金通帳を出してやつて、

「太郎お前はよく辛抱して働いてくれた。おかげで、父さん(とう)も、馬を買ひ込むことが出來て、日に日に繁昌するやうになつた。もう今日ぎりで、お前に加勢を賴まないでよい。お前は來月から、學校に行かねばならぬから、勉强をして呉れ。八十圓の貯金は、しまつて置くがよ

い。俺が毎月お前に仕送りする位は、どうかして儲けてやる。しつかり勉強してゑらくなつてくれ」

太郎は貯金通帳を振つて、バラ〳〵涙を流した。

「父さん、この金は私はいらねえ。これで馬をもう一匹買つて、もつと儲かるやうにしてお呉れ」

「あゝ有りがたう。けれどもそれはお前の金だ。父さんは只は費はない。用があつたら、お前に相談をして借りる。借りたら屹度返へしてあげる。そんなことは心配しないでよいから、さつさと勉強してくれよ」

太郎は、それから勉強をしたが、毎朝草刈りは止さなかつた。馬丁をして居た間にも、懐にはいつも本を入れて、休む時に出してよんで居たので、入學試驗には見事に及第して、都の商業學校に入り優等生となつたさうである。

教授指針

禮儀

禮儀と自信

人は皆天地の生をうけて育てられて居ます。昨日の賤しい者が、今日は貴くなり、今日の貧しい者が、明日は富める者となることがあります。どんな人でも天の惠みを受けて生きて居るのだから、何時どんなに尊いことをするかも知れません。

だから人を賤しんで、自分を貴いとし、人々に誇つて情がないといふことは大變に吾が身のためにならないことです。人を賤しめ、人に誇る者は、きつと人から惡まれ、人に遠ざけられます。

昔から聖人といはれた人は、皆世の中から賤しめられて居た人と親しんで、その人々の値をあげて下すつた人です。富める者、名門の高い人にばかりよくする者は、富貴權門にへつらふといふものであつて、人間として最も耻づべきことです。

だから人には誰でもよい氣持を感ぜしむるように、よく心がけ、言葉づかひ、行をよくして、そのために人が喜び勇み、自分のねうちを感ずるやうにしてやらなければなりません。誰でも、自分はつまらないものだと思ふやうになつたら、何のよいこともん出來ず、立身も出來ませぬ。吾が身を貴くし、吾が身の立身を願ふならば、人を尊み大切にしなければなりません。

人に恥かしめられたゝめに、憤慨し默つて忍んで遂に偉くなつた人はありますが、人を賤しめ、人に恥をかゝせて偉くなつた人はありません。

訶諛は男子の恥辱であることを貫徹せしむ。

人の爲にすることは自らの爲にすることである。

上に立つ人々が、下々人民を賤しめた國は、昔から一つとして強い國ではなかつたのです。上に立つ人が下々人民の苦しい心を察してやつて情深いことをした國に、強い立派な國が出來ました。昔から澤山な國が興つたり亡んだり、榮えたり衰へたりしましたが、何時でも上に立つ人が下々を貴んだ時に興りまた榮え、上に立つ人が下々を賤んだ時に亡んだり衰へたりして居ます。

だから人々のことを思ひやり、人々に禮をつくさねば決してえらくはなりません。

昔、イタリーのアシヽといふ處に、フランシスといふ聖人がありました。或る日のことフランシスの留守に、泥棒が入りましたので、弟子が棒を振りかざして追つぱらひました。そこへ丁度フランシスが歸つて見えて、そのことを聞かれると、フランシスは氣の毒な顔をして、

「食べ物がなくなつて困つたから來たんだらう。私はこヽに澤山お土産を貰つて歸つて來たから、お前は走つてその泥棒をよんで來てくれないか？」といはれました。

先生の仰せであるから弟子は走つて泥棒の跡を追つたら、丁度よく姿が見えましたので、「もし〳〵私を許して下さい」といつて呼びとめ、先生のお心を通ずると、泥棒は何ごとかと思つて先生のところに戻つて來ました。そして情深い先生の言葉に感じ入つて、先生の前に

自信自覺の尊き所以を貫徹せしむる。

手をついて泣き、「私共は今迄惡いことばかりして居ましたが、これから心を改めてよいことをしますから、先生の弟子にして下さい」と頼み入つたのです。

そしてその泥棒は弟子になつて、後には立派な人になつたといふことです。

「泥棒だ！」とて憎まれて居る間は、よい人間になれなかつたのが、先生の情深い思ひやりをうけて、心に感じ、遂にその泥棒は心を改めたのです。

だから私共は、毎日人と交はるにも、己を高ぶつて人を賤しめることがなく、よく禮儀をわきまへて居なければなりません。

けれどもそれは、人よりも自分の方が劣つて居ると思ふのではない。人を大切にすれば、自然と自分も貴い心を持つた人だと思ふやうになるものです。

然し自分の思うたことが正しいと思ひ、人のいふことが間違つて居ると思ふ時には、その時には人から憎まれても構はずに、自分の正しいと思ふことを尊んで、その通りにしなければなりません。自分には惡いと思ひつゝ人のいふことに從ふ者は卑怯者であり、惡者の奴隷です。正しいことを考へて、それを實行する時、人々が皆反對する時には、何にも恐れないで、勇ましく實行しなければならぬ。斯ういふ人は世界で一番貴い人であり、豪傑であつて、天が必ず助けて下さる。私共は天から助けられる人にならねばなりません。何時でも私

どもは、正しいこと、よいことを考へて、自信をもつて居なければなりません。自信がないと心がぐらついて何ごとも出來せん。私共は、如何なる場合にもビクともしないで、さつさと自分の信ずることを實行して行く人にならねばならんのです。

教授指針

本編は物語である。

習慣

玉子さんと秀子さん

玉子さんと、秀子さんとは、小學校も同じであり、お家も近くなので、學校の往復は、必ず一緒にして居りました。

たま子さんは、今日も、お當番の秀子さんを待合はせて、今しがた學校の御門を出て參りました。

二人は賑やかな花園通りを、歩いて居ましたが、やがて新年も近まるので、店々の飾窓には、各々、意匠を凝らした飾付けがしてございます。

つい、餘り美しいものですから、思はず知らず見とれて居るうちに、いつか玉子さんと、秀子さんは、離れ〳〵に歩いてゐましたが、玉子さんは、お母さんや、先生のお言ひ付けが、長い間の習慣となつて居るので、店飾りに氣を取られ乍らもいつも道の左側々々と歩いて居ました。

處が、一方の秀子さんは、ついそんな事には無頓着に、いつか玉子さんよりも一間も後れて、いろんなものに心を惹かれながらに、歩いてゐました。

可成り賑やかな通りでありますが、それでも東京に比べれば、ずつと田舍のことですから、道幅も狹く、それに年末に近い頃とて、人通りは普段にもまして多いのでありました。

「リン〳〵〳〵」と云ふ、向ふから來たけたゝましい自轉車のベルの音に、吃驚してよけようとした秀子さんは、慌てたものですから、あつと思ふ隙に、それにぶつつかつて、ひどい怪我をして其場に倒れました。

玉子さんは、自分の傍に、秀子さんの居ない事を氣が付いて、振り返つて探した時に、丁度此さわぎですから、玉子さんは吃驚して其處へ駈付けました。

それを見て集つた人と共に、玉子さんは秀子さんを助け起し、其の直ぐ前の商店に賴んでねかして貰ひ、自分は大急ぎに、秀子さんのお家へ知せて上げました。

お家の人は大變に驚いて、ひどく心配しながら、お母さんと、兄さんとが駈けつけて來てみると、秀子さんは死人の様に蒼褪(あをざ)めた顔色をして、頰や手からは、まだ血がタラ〳〵と流れて居ました。

早速、近くの病院へ連れて行きましたが、思ひの外、傷口が深かかつたので、其さわぎや、お母さんたちの心配は一通りではなかつたさうです。

もし、玉子さんとも、左側通行といふ好い習慣がついて居ませんでしたら、きつと秀子さんと一緒に怪我をして居たでせう。

本編も假作物語である。

雪雄の京都土産

峰雄と、雪雄とは、何ちらも、負けず劣らずの、朝寢坊であつた。

毎朝、學校が遲れると云ふので、お母さんから

「峰雄さん！　雪雄さん！　峰雄さん！　雪雄さん！」

と、かう交るがゝに、名前を呼ばれて、それがお隣りに聞える程、いつもお定まりのやうに起されてゐた。

ところが、春から夏にかけては、一層體にだる氣を覺えて、二人の朝寢は益々はげしくなつて來た。

其中、とう〳〵夏休が來た。もう、學校を遲刻する心配もないと云ふので、二人は殆ど競爭の樣に朝寢をしてゐた。朝起きの競爭をする人はあるが、朝寢坊の競爭は珍らしいと女中達も笑つて居た。

この夏、御用があつて、上京して居られた叔父さんは、弟の雪雄さんが、まだ京都を見た事がないと云ふので、お休み中を幸ひ、一緒に連れて歸る事になつた。

此叔父さんと云ふのは、京都の大學の先生で、隨分嚴格な人であつた。それに、毎朝暗い中から起きて、ちやんと机に向つて勉强するのであつたが、雪雄さんが來てからは、一層早く起きて、雪雄さんを連れて、毎朝丸山公園を散歩し、その邊を一週して歸る事に定められてゐた。

朝寢坊の雪雄さんは、始めの中毎朝早く起されるのが、泣く程辛くて、目をこすり〳〵、不性々々に、やつとお床を離れるのであつたが、毎朝々々の事で、段々日がたつにつれ、平氣になつた許りか、早く起きると、體も心も洗つた樣に、非常に氣持が好いので、終ひには、却つて雪雄さんの方が、先に起きて叔父さんを起すやうになつて來た。

雪雄さんは、京都の有名な所を見物させて貰つて、九月の初めに東京へ歸つて來たが、彼は京都に居る間、毎朝〳〵早く起きる事が、何時となく習慣となつたので、東京へ歸つた後も、前の樣に朝寢すると、却つて氣持ちが惡くて、迚〳〵寢てゐられなくなつた。

どんな寒い寒中でも、朝早く起きて、霜の中を駈足でもして來ると、そのうちに、すが〳〵しい太陽は上るし、雪雄の體は湯上りの時のやうに、ポカ〳〵と暖くなる、精神は、ピンと

鏢をかけた機械の様に、緊張つて來る。此時雪雄はひとりでに、大地を踏んで飛上るのであつた。それから一勉強して學校に行く。之れが此頃の雪雄さんで、昔とは大變な相違である。お父さんや、お母さんはそれを見て、「これは何よりもよい、雪雄の京都土産である」と、云つて喜んだ。

それに引かへて兄さんの峰さんは、お休中の怠惰と、朝寢が癖になつて、秋が來て涼しくなつてからも、矢張り朝寢を續けてゐた。おまけに、冬が來て寒くなるほど、お床の中が戀しくて、毎日〳〵の様に遲刻しては、先生からお目玉を頂戴するといふ有様であつた

或朝、雪雄は何時ものやうに、早く起きて、學校の勉強もすんだから新らしい今月の少年世界を出してよんで居ると、

折から勇ましく、ヂャン〳〵〳〵、と鈴の音がして、

『號外々々！　獨逸降伏休戦！』

と云ふ、號外賣りの聲か、靜な朝の空氣をふるはして聞えて來た。

雪雄は戸外へ飛出した。そして號外を貰つて讀んで見ると、間違ひなく、「獨逸降伏休戦！」と記してある。尙ほ、「今朝、六時迄に、日比谷公園に集つた者には、休戦祝賀の示しとして、（獨逸降服双六）を配布する」と、附加へてあつた。

雪雄は大喜びで、朝の散歩の代りにと、早速、日比谷公園をさして出かけた。

程なく彼が、美しい獨逸降服双六を、懷中にして歸つて見ると、朝寢坊の峰雄さんは、殊に今日は日曜日だと云ふので、まだグウ〳〵と高鼾で、何んにも知らずに眠つて居る。

雪雄は峰雄の枕許に行つて。

『兄さん！〳〵、これこんな好いもの』

と云ひ〳〵ゆり起した。

峰雄さんは、夢中で一つ寢反りを打つた、と思ふと、またグウ〳〵と鼾を初めた。

『兄さん、好いものを見せるから、もうお起きよ』

雪雄はまたゆり起した。すると峰雄さんは、如何にも五月蠅ささうに、

『いやだよお母さん、今日は日曜だからもつとねるんだよう』

峰雄さんは、まだぼんやりして、また何時もの様に、お母さんが起しに來たのだと思つてゐるらしいのです。

『兄さん、僕だよ、お母さんぢやないよ』

と、かう云つて雪雄は笑ひながら、今度は少しひどく搖り動かして見た。

すると、峰雄は少し目が覺めて來たのか、